

シンポジウム

日本の細石刃文化

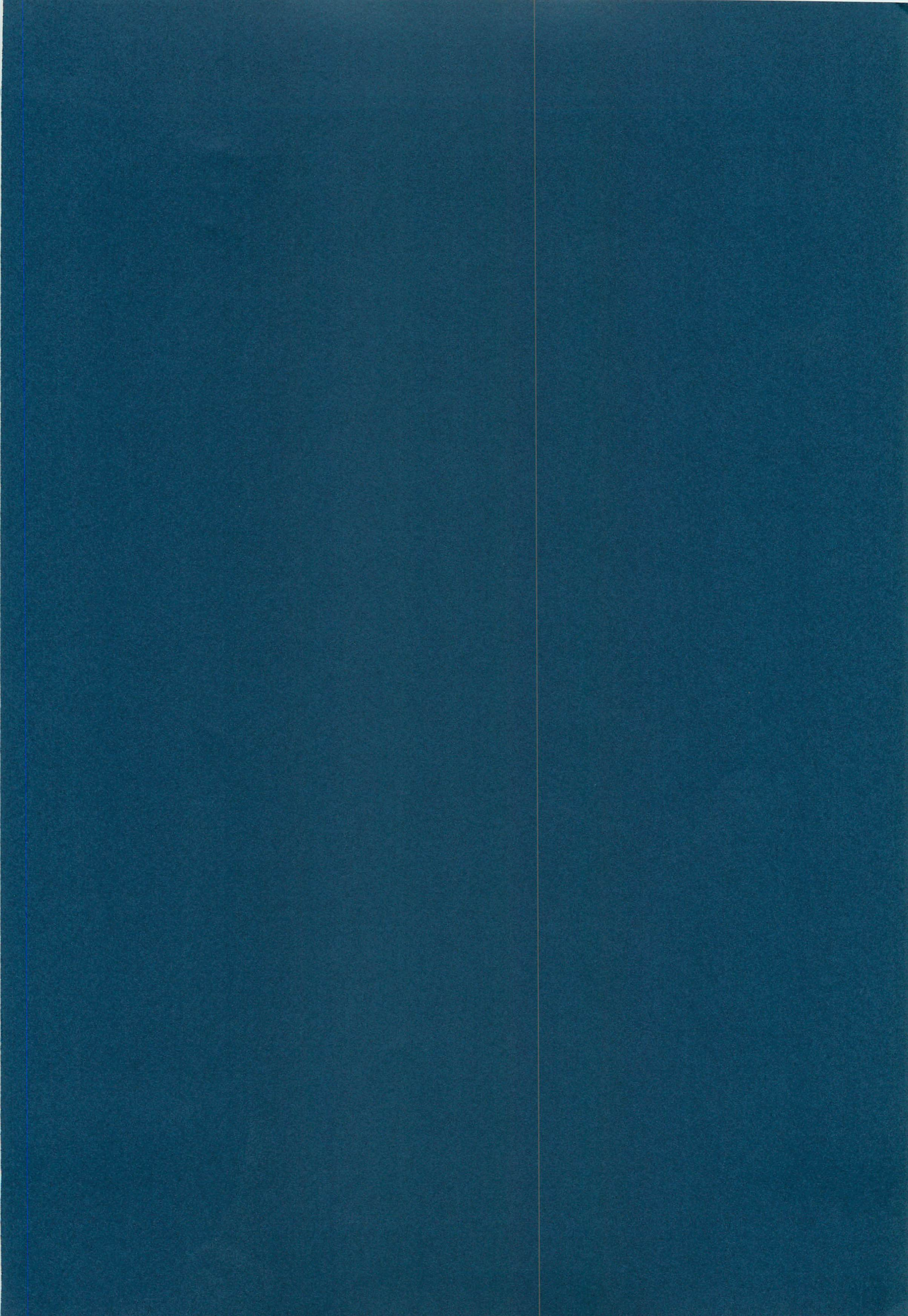
III

— 細石刃文化研究の諸問題 —



2004年12月

八ヶ岳旧石器研究グループ



シンポジウム

日本の細石刃文化

III

— 細石刃文化研究の諸問題 —



2004年12月

八ヶ岳旧石器研究グループ

シンポジウム 日本の細石刃文化 III

— 細石刃文化研究の諸問題 —

目 次

原産地遺跡における細石刃石器群の技術構造	鈴木宏行	1
関東以北の細石刃石器群の遺跡構成	山科 哲	18
東京都瑞穂町狭山遺跡石器組成の再検討	国武貞克	39
下総—北総回廊をめぐる細石器石器群の 生態学的考察	田村 隆	52
細石器文化と海上渡航	池谷信之	66
九州細石器文化における地域性の分立とその評価	木崎康弘	74
日本列島の細石刃遺跡と細石刃資料	堤 隆	86

例 言

- 1 2003年10月18日(土)・19日(日)八ヶ岳旧石器研究グループ主催のシンポジウム「日本の細石刃文化」が、長野県浅間縄文ミュージアムで実施された。

本書はこのシンポジウムにおいて、論じられなかった諸問題について、何人かの研究者より原稿をお寄せいただいた論集で、同シンポジウムにおいて発刊された『シンポジウム日本の細石刃文化』I・IIの続刊である。

- 2 編集は八ヶ岳旧石器研究グループの責任のもと 堤 隆が行った。

原産地遺跡における細石刃石器群の技術構造

— 上白滝8遺跡の分析を通して —

鈴木 宏行

1 はじめに

白滝村は黒曜石の原石山である赤石山を擁し、原産地遺跡として旧石器時代研究当初から注目されてきた。平成7年以降旭川紋別自動車道の建設に先立つ緊急調査として北海道埋蔵文化財センター・白滝村教育委員会による白滝遺跡群の調査が継続的に行われ、約550万点、約10トンもの膨大な石器類が出土している（鈴木ほか2004など）。

この一連の調査には大きく二つの意義があると考えられる。一つは原産地遺跡で行われた石器製作活動の復元が可能である点で、もう一つは道路建設に伴う長大なトレンチ調査ゆえにほぼ同一の石材環境と見なされる範囲内での通時的・共時的な遺跡間変異の検討が可能であるという点である。白滝遺跡群では良質で豊富な原石を採取できる立地を背景として行われた原石採取から石器製作・搬出に至る石器製作活動を知ることができる。また、地域内では複数の石器群が確認され、各石器群の石器製作活動を通時的に比較検討が可能である。同様に、同一石器群が複数の遺跡から出土し、より狭い地域内での石材製作活動の遺跡間変異の検討が可能である。本論では上白滝8遺跡出土の峠下型細石刃核を伴う石器群を対象として石器製作技術構造を明らかにすることによって、細石刃剥離技術における各段階の意味づけを行い、石材採取・石器製作技術・石器の搬出過程と併せて遺跡間変異を考える上での規準とする事を目的とし、原産地遺跡から導き出される石器製作技術検討の問題点・遺跡間変異の問題点を提示する。

2 上白滝8遺跡の位置と周辺環境（図1）

遺跡の存在する白滝村は、北海道の屋根といわれる標高2,000m級の山々が連なる大雪山系の北東山麓にあり、市街地の北北西6.5kmには黒曜石の原石山である赤石山がある。その一帯にはいくつもの露頭があり、黒曜石原石の詳細な分布状況は不明であるが、その規模は国内最大級で、全体の埋蔵量も数十億トンと言われている。村の中央には湧別川と支湧別川に挟まれた台地状の三角地帯があり、周囲は山地に囲まれている。村内を東西に流れ、オホーツク海に注ぐ湧別川の流域は、数段の河岸段丘が発達し、90か所近くの旧石器時代の遺跡があり、「白滝遺跡群」と総称されている。遺跡の集中域は大きく八号沢川と湧別川の合流点付近、十勝石沢川と湧別川の合流点付近、幌加湧別川と湧別川の合流点付近、の三か所に分けることができる。いずれも赤石山を源流とする沢と湧別川の合流点付近から下流に広がる形で集中し、原石採取や露頭へのルートとして沢が利用されていたと想定される。特に、八号沢川と湧別川の合流点付近には白滝第13地点遺跡をはじめ、服部台・服部台2・白滝第32・33地点遺跡など、学史的に有名かつ大規模な遺跡が集中している。一方、段丘以外では赤石山の山頂付近で赤石山・幌加沢遠間地点・幌加林道遺跡の3遺跡が確認されるのみであるが、深い森林のため未発見の遺跡があることが予想される。他の黒曜石産地との位置関係は、赤石山を起点とすると南東方向40kmに置戸町所山・置戸山、南方向50kmに上士幌町十勝三股が位置している。

上白滝8遺跡は、八号沢川と湧別川の合流点から約1.1km下流の右岸段丘上、白滝第13地点遺跡の南側、奥白滝1遺跡の沢を挟んだ東側、上白滝2遺跡の沢を挟んだ西側に隣接し、大規模遺跡の集中する地域の中央部に位置する。標高は高位部で約435～450m、低位部で約415m、湧別川との比高は高位部で35～50m、低位部で15mである。

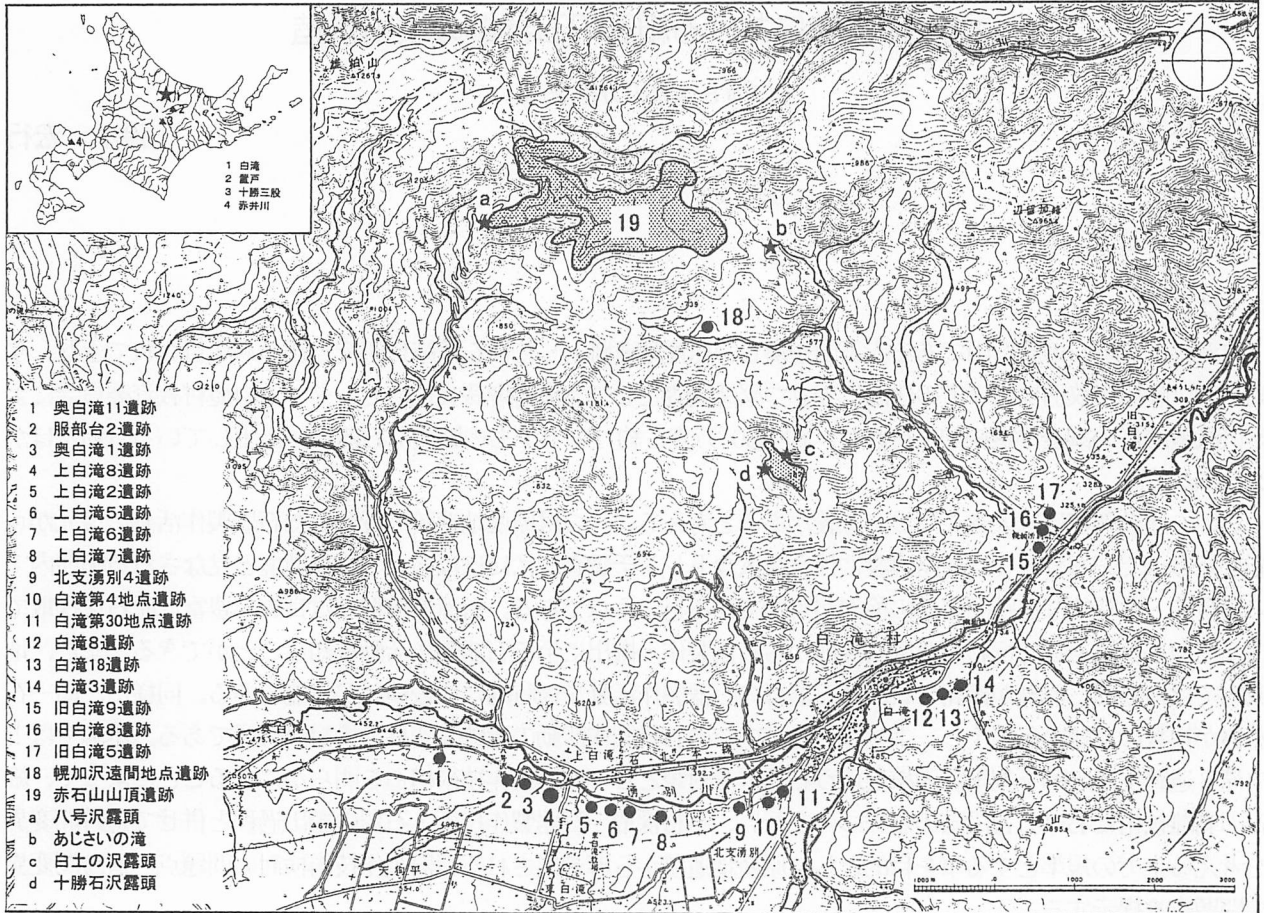


図1 調査遺跡と赤石山の位置

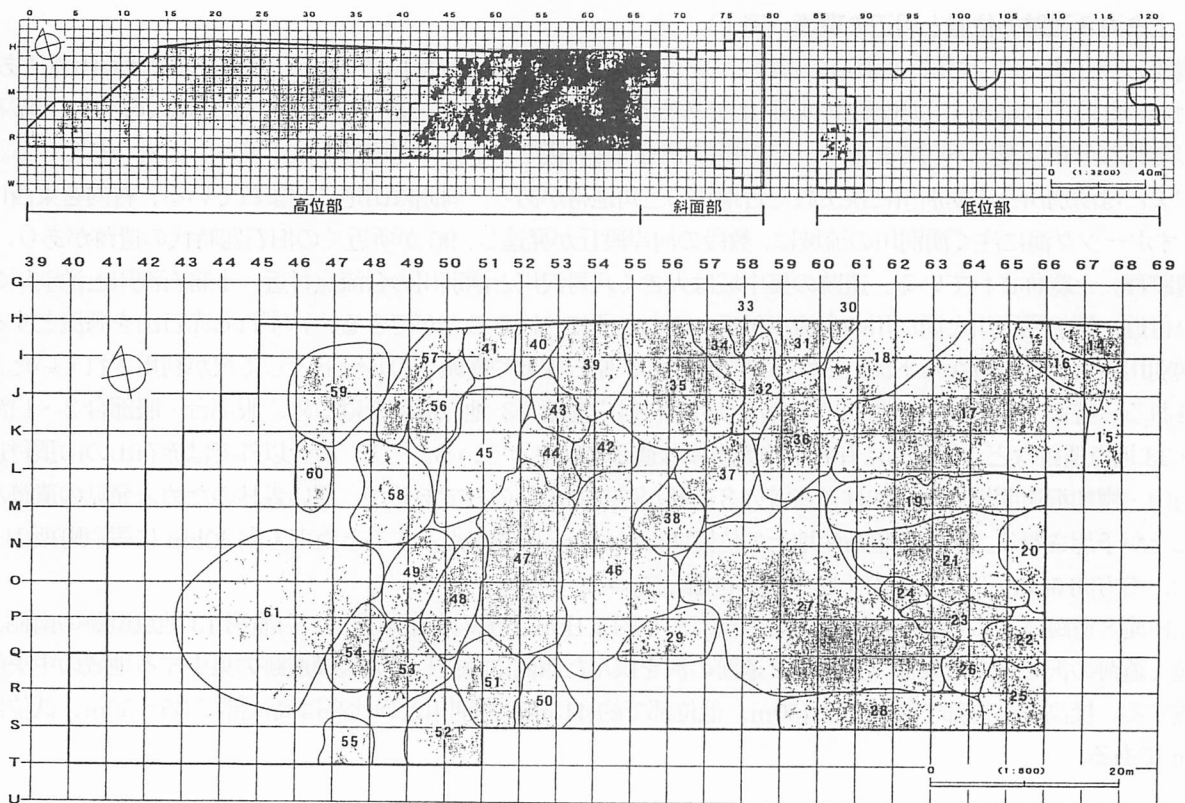
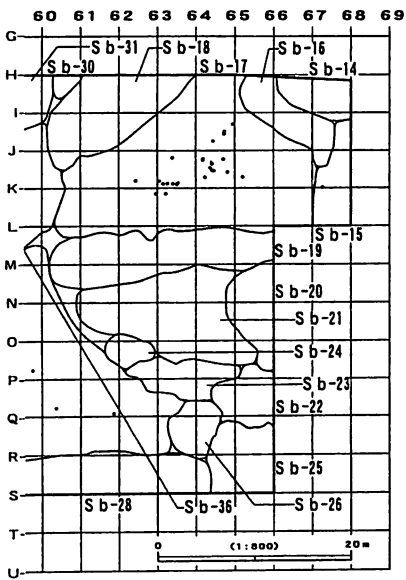
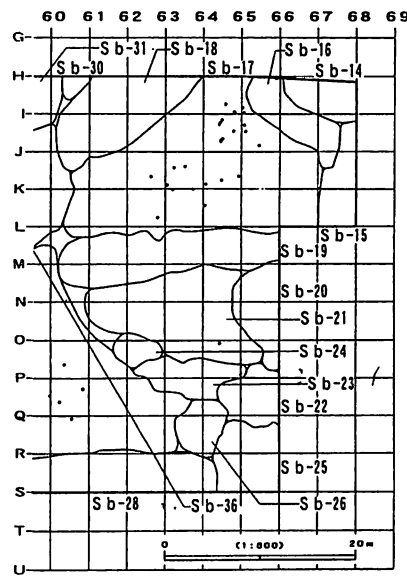


図2 上白滝8遺跡遺物分布・石器ブロック設定図

細石刃



細石刃核



細石刃核削片

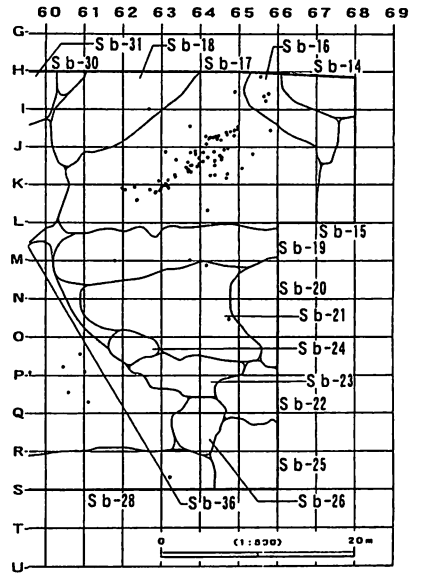


図3 細石刃関連資料分布

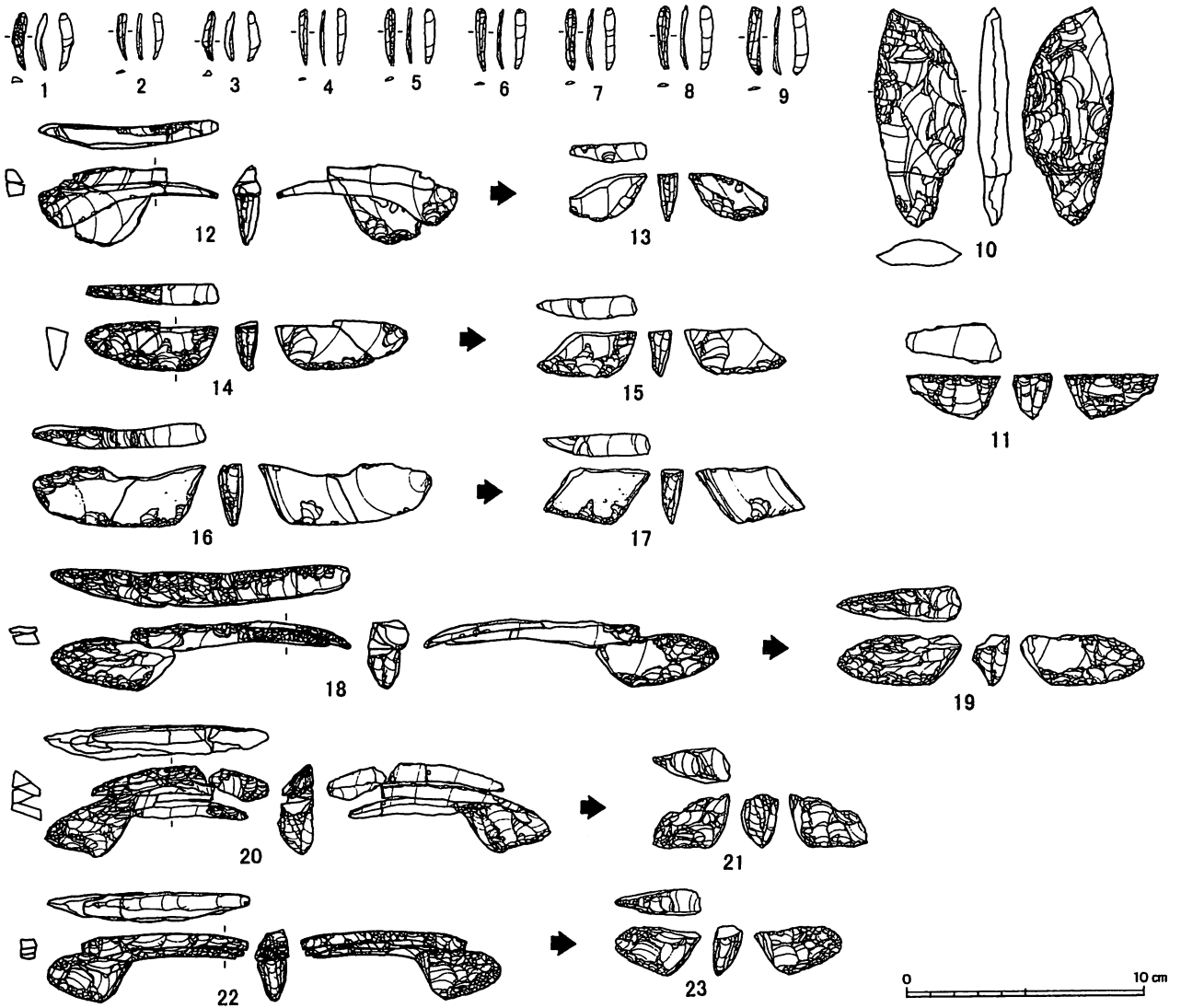


図4 上白滝8遺跡の石器(1)

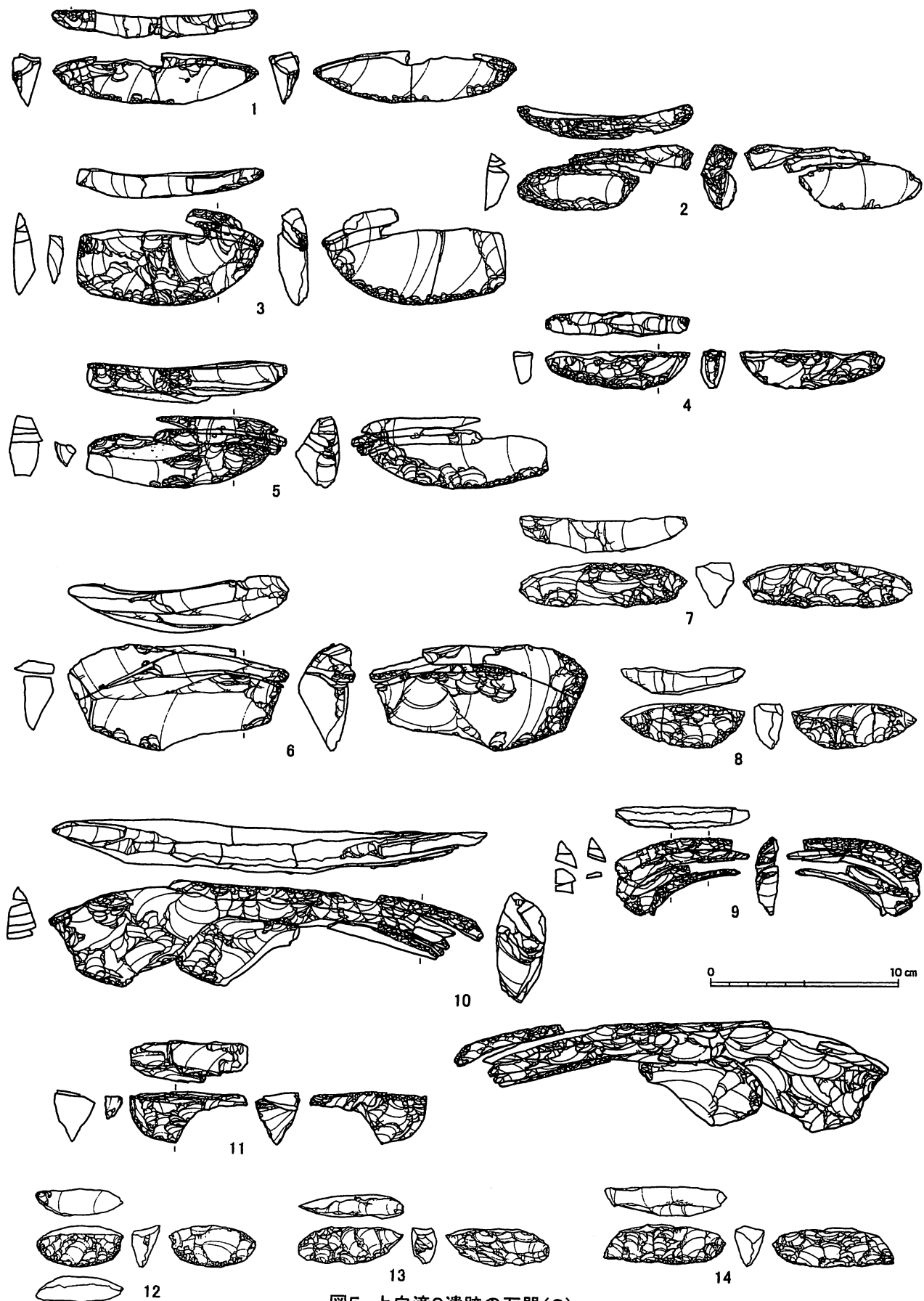


図5 上白滝8遺跡の石器(2)

3 対象とする資料体

上白滝8遺跡は、全部で約135万点、3,460kgの遺物が出土している。遺物は全て石器類で、ほとんどが旧石器時代のものであるが、ごく一部、石鏃などの旧石器時代以外の石器が混じる。北海道埋蔵文化財センターが調査した17遺跡の中で最多の出土量で、分布密度では低位部を除くと服部台2・奥白滝1遺跡と並んで1㎡あたり100点前後である。遺物分布は他の遺跡に比べ最も広範囲に連続し、巨視的に見ると直径50m規模の集中域と見なすことができる(図2)。しかし、これらは複数の石器群が重複・連続する状況で複雑な様相を示し、白滝遺跡群の中でも最大級の規模を誇る本遺跡の性格を特徴づけている。個々の集中部の分布はソリフラクションの影響で傾斜方向に広がり、厳密には原位置を保っていないが、集中域から放射状に伸びる形状や狭い範囲で接合する状況から著しく移動や攪乱を受けていないものと思われる。遺跡からは非常に大量の石器類が出土しているため、高位部中央やや東よりの空白地帯を境に東西に分割し、東地区を平成15年度(鈴木ほか 2004)に西地区をそれ以降の二回に分けて報告することとした。

白滝遺跡群では土層が発達せず、層位的に石器群を区別することは困難である。東地区では大きく、石器製作技術が恵庭a降下軽石下位相当の石器群と考えられる「白滝I群」とそれ以外の石器群に分けて整理を行い、前者については遺物分布・密度分布・接合関係から遺物集中域である石器ブロックをSb-1~13に、後者についてはほぼ密度分布のみから便宜的にSb-14~61に分けた。さらに、Sb-1~13についてはSb-1~3、4~6、7・8、9、10、11~13の石器ブロック群に分け、Sb-14~61についてはA区(Sb-14~19)、B区(Sb-20~29)、C区(Sb-30~35)、D区(Sb-36~55)、E区(Sb-56~60)、F区(Sb-61)の区域に分けた。

「区域」で括られた遺物の集合体は、同一の石器製作技術を持ち、同一時期の所産と考えられるまとまりである「石器ブロック群」とは異なり、純粋な石器群を反映したしたものではないが、複数石器群の重複の中にばやけた実体として把握される。

細石刃石器群は、このうちSb-17(A区)・27(B区)・34(C区)にまとまって分布し、特にSb-17に集中した分布がみられる(図3)。各ブロック出土の細石刃核は一部幌加型(図4-11)が含まれるもののほとんどが石刃や剥片を素材とした峠下型細石刃核である(図4-13など)。また、高位部と低位部の間の斜面部にはこれらよりややサイズの大きい峠下型・幌加型や蘭越型類似、美利河型類似のものがあるが、斜面部であり、それらの関係は不明である。本論では、最も多くの細石刃関連資料(細石刃・細石刃核・細石刃核削片)が出土しているSb-17を中心としたA地区出土の資料を分析対象とする。このうち、幌加型細石刃核(図4-11)についてはK62区出土で分布の中心から外れていること、A地区にその素材を剥離した剥片剥離技術が無く、隣接するB地区の剥片剥離技術に関連する可能性があることから対象から除外する。細石刃関連資料はSb-17でも特にI64・65、J63・64区周辺の非常に狭い範囲に分布し、その範囲からは小型舟底形石器を含む舟底形石器や彫器も出土している。これらには主に茶色に黒が混じる黒曜石が利用される一方、細石刃関連資料は黒や黒に紫が混じる黒曜石が利用されており、同一母岩に両者が含まれる資料はない。また、峠下型細石刃核は美利河1遺跡の出土状況などから細石刃石器群の中では古い位置付けがなされる(寺崎 1999)が、小型舟底形石器は旧石器時代終末期に位置付けられており(山原 1998)、それらの同時性は想定しにくい。現段階では接合作業の資料操作を通して両者の関係は見出せないため、異なる石器群で本遺跡の性格を反映した重複と捉え、特に本論では扱わない。また、Sb-17付近の遺物分布は調査区外である北側に広がる可能性も考えられるが、Hライン際では密度が低くなっており、完結した石器群として認定して論を進めることとする。

4 方法と目的

細石刃・細石刃核を対象とした分析を行い、接合資料と併せて技術構造(稲田 1969)を復元する。技術構造復元の方法は目的剥片である細石刃形状を重視し、まず、遺跡に残された細石刃の分析を行い、それらと細石刃核との関係、さらにそれらに対応した素材から細石刃核母型、細石刃核未製品⁽¹⁾に至る細石刃剥離技術を分析する。その後、その素材に対応した剥片剥離技術を、最終的にはそれらに対応した原石形状を復元する(図6)。

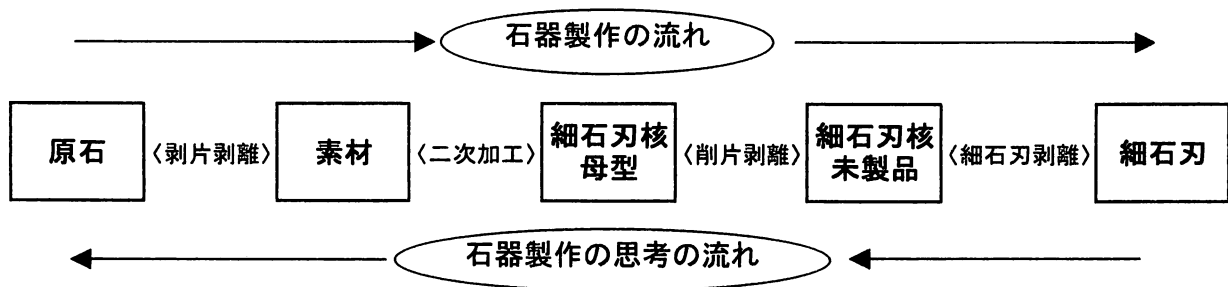


図6 細石刃剥離技術における石器製作と思考の流れ

また、技術構造を明らかにした上で遺跡における搬入・搬出形態、遺跡で行われた石器製作活動を復元する。通常の石器製作技術復元と逆の手順をたどるのは当時の人々の石器製作時の思考が目的とする石器を念頭に置いて組み立てられていたと考えられ、その思考を復元することが重要であると考えられるからである。また、そのような視点に立った時、当時の人々が一般的に用いた技術と特殊な技術との判断が可能となり、技法の設定において有効な視点になりうると考える。特に白滝遺跡群では石材消費の脈絡における遺跡の機能を豊富な石材を背景とした石器製作に限定できる利点があり、それらの復元に適した遺跡といえる。本論では細石刃・細石刃核・細石刃核未製品・細石刃核母型・素材・原石などの選択性を明らかにするために主に定量的な分析を中心に行う。個々の石器・接合資料の説明の詳細については報告書（鈴木ほか 2004）を参照されたい。

5 分析

(1) 細石刃 (図4-1~9)

292点 (点取り25点、一括遺物292点) のうち掲載遺物69点を対象とする⁽²⁾。

完形品の長さの平均値は23.7mmである(表1)。度数分布(図7)は24mmと32mmにピークがあるが、32mm周辺の細石刃は、末端部に母型作成時の側面加工が残り、細石刃核の下縁を取り込んでいるものが含まれ、量的にこのサイズの細石刃が剥離されているとは考えにくい。24mmにピークのある山は20~28mmにまとまり、特に20~24mmに偏った分布を示す。完形品の幅の平均値は5.3mmで(表1)、4~6mmの範囲の広いピークのある分布である(図8)。折損品は5mmにピークがあるが、主に4~6mmに分布し、平均値も完形品とほとんど違いがみられないことから、完形品と折損品には本来の大きさの違いはないと考えられる。よって、細石刃は24mm前後の細石刃剥離作業面を持つ細石刃核から剥離されたと考えられる。細石刃の幅は細石刃核作業面形状に規定されるため剥離された細石刃核作業面形状も画一的であったと考えられる。

図4-1は細石刃剥離の最初に剥離されたもので稜部は左右からの剥離で形成され、側面観は直線ではなく弧状である。背面右側には細石刃核右側面の素材面が残存している。これらの特徴は細石刃核未製品の作業面形状を表している。背面右側には細石刃核に残る素材腹面がみられるもの(図4-1~3)が多く、素材面を取り込む細石刃はねじれが強い。遺跡には素材面を残さない直線的な細石刃より素材面を残すねじれの強いものが多く、前者は搬出され、後者は遺棄されたものと思われる。打面形状は全て単剥離打面である。二次加工は1点を除いて行われず、完形品と折損品との違いはみられない。また、両者に幅の違いがみられないことから折損品が形態上選択されて「折り取り」が行われたとは考えにくい。

(2) 細石刃核

46点 (点取り28点、一括遺物18点) のうち掲載遺物40点を対象とする。

細石刃核は、面的な側面調整の行われないもの(I類)(図4-13・15・17)、行われるもの(II類)(図4-19・21・23)がある。両者の細石刃剥離角の平均値(表2)はそれぞれ61.3、60.4度、細石刃剥離作業面長の平均値は23.5、23.8mmで違いがみられず、分布も21~27mmが主体でほとんど変わらない(図9)。同様に細石刃核高も違いがみられないが(図10)、細石刃核幅は平均値が9.8、13.8mmでII類の幅が4mm程度広い。また、細石刃剥離作業面に残る最終細石刃剥離度の幅は、平均でI類が4.0mm、II類が5.3mmである。分布は、

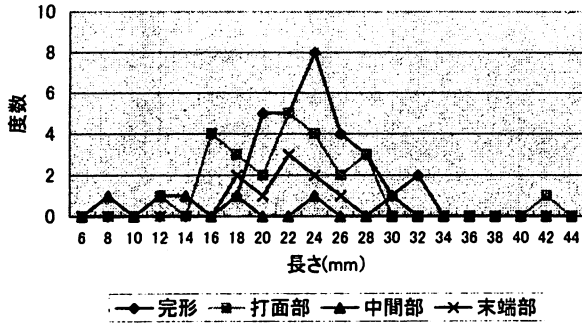


図7 細石刃の長さ(mm)

平均値	完形	打面部	中間部	末端部
長さ	23.7	21.7	14.8	21.9
幅	5.3	5.5	5.0	5.1

表1 細石刃長さ・幅(mm)

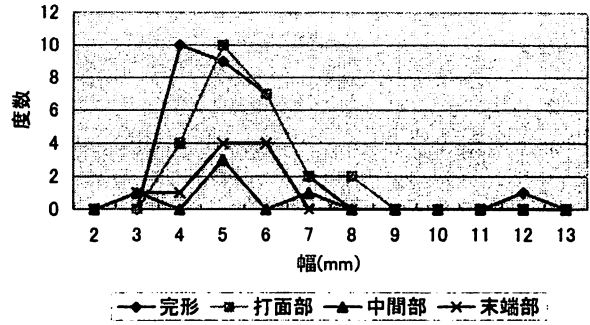


図8 細石刃の幅(mm)

平均値	剥離角	作業面長
側面調整無し	61.3	23.5
側面調整有り	60.4	23.8
全体	60.9	23.6

表2 細石刃剥離角・作業面長(mm)

	細石刃核	細石刃核未製品
側面調整無し	9.8	12.2
側面調整有り	13.8	16.3
全体	11.3	14.1

表3 細石刃核幅(mm)

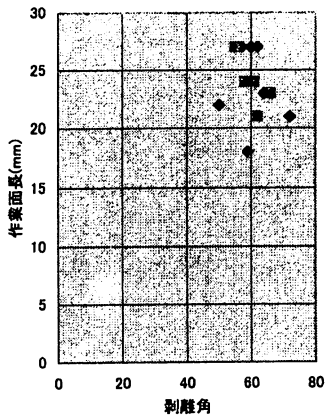


図9 細石刃剥離作業面長と細石刃剥離角

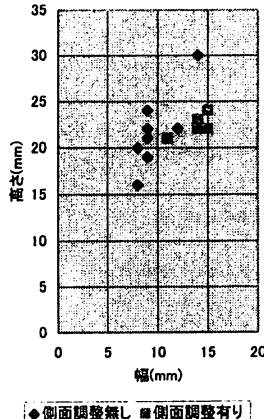


図10 細石刃核高さ・幅

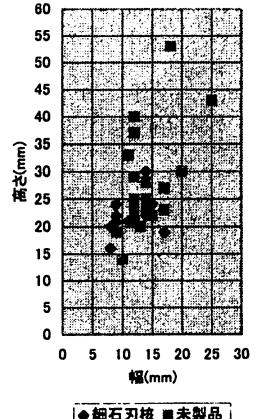


図11 細石刃核・未製品高さ・幅

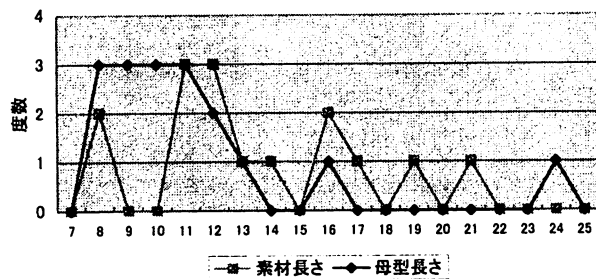


図12 細石刃核素材・母型長さ(cm)

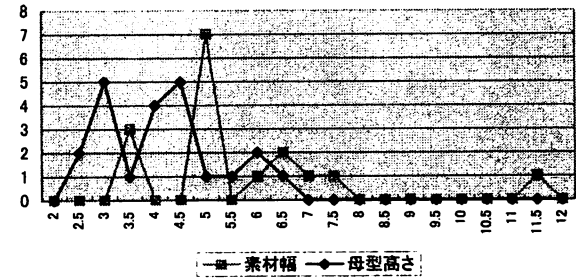


図13 細石刃核素材幅・母型高さ(cm)

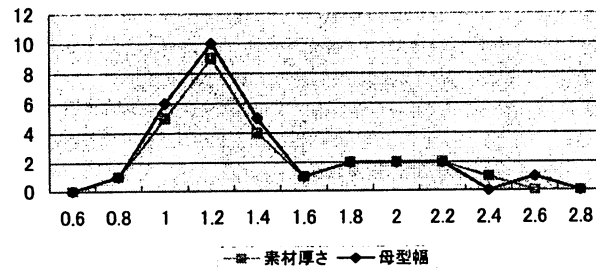


図14 細石刃核素材厚さ・母型幅(cm)

	無し	縁辺のみ	広範囲	総計
T<1.6	11	5		16
1.6≤T			7	7
総計	11	5	7	23

表4 削片剥離に伴う調整と素材厚さ(cm)

	石刃	剥片	不明	総計
T<1.6	16		3	19
1.6≤T	1	6	2	9
総計	17	6	5	28

表5 素材の種類と素材厚さ(cm)

	石刃	剥片	不明	総計
無し	10		2	12
縁辺のみ	3		2	5
広範囲	1	4	6	11
総計	14	4	10	28

表6 素材の種類と削片剥離に伴う調整

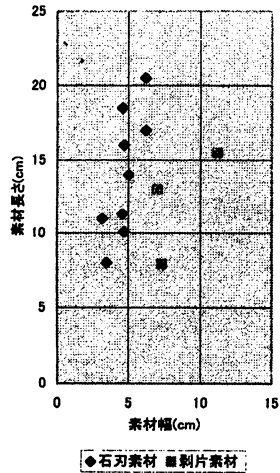


図15 素材長さ・幅

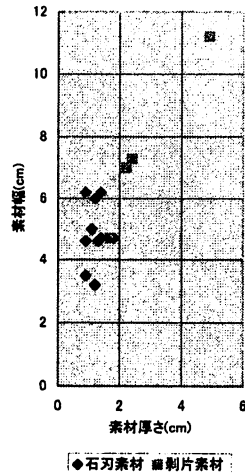


図16 素材幅・厚さ

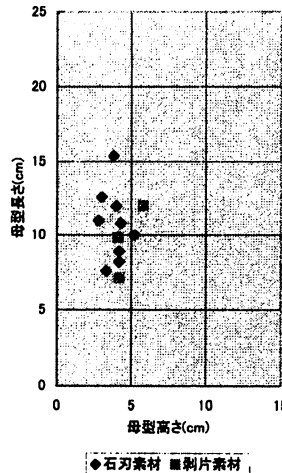


図17 母型長さ・高さ

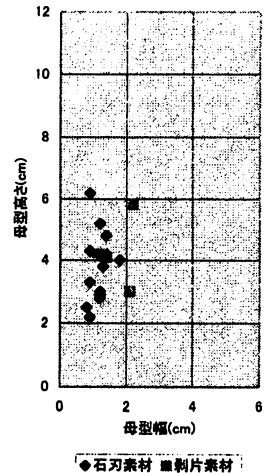


図18 母型高さ・幅

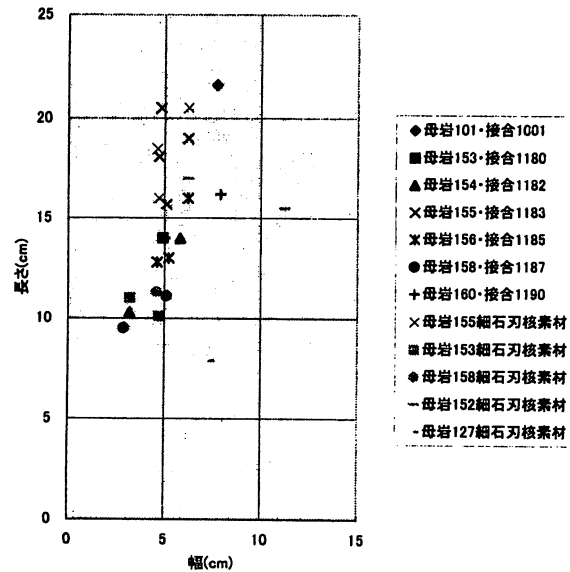


図19 母岩別石刃ほか・細石刃核素材の長さ・幅

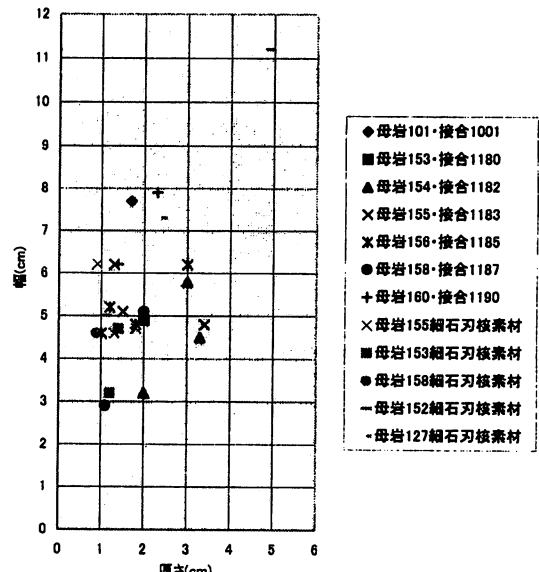


図20 母岩別石刃ほか・細石刃核素材の幅・厚さ

	細石刃核	未製品	搬出細石刃核
平均値	1.13	1.41	1.33
接合2657・2653除く			1.17

表7 細石刃核・未製品・搬出細石刃核幅(cm)

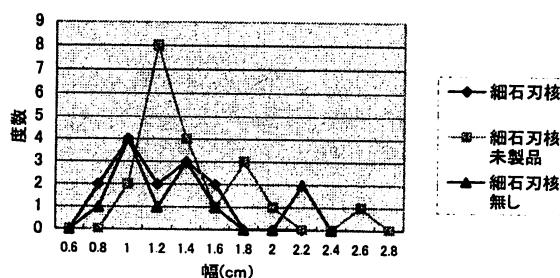


図21 細石刃核・搬出細石刃核幅 (cm)

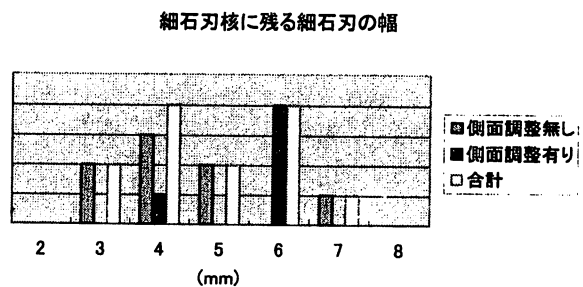


図22 作業面に残る最終細石刃幅(mm)

I類が3～5mm、II類が6mmを主体とする(図22)。このことからI・II類の細石刃核から剥離される細石刃の長さはほぼ同じであるが、幅にはやや違いがみられる。しかし、両者は連続的である。これらの数値を細石刃の大きさと比較すると長さは21～27mmで一致し、幅も4～6mmで一致する。細石刃で看取された細石刃幅の度数分布の広いピークは二種類の細石刃核から剥離された連続した分布を示していると言え、細石刃はI・II類の両者から剥離されたものと考えられる。ただし、これらの二種類の細石刃が目的的に剥離されたかどうかは不明で、連続した分布と側面調整によって幅を減少させるII類の技術的特徴から、II類はI類と同様の幅に減少させることが困難であるためやや幅広であったと考えたい。

細石刃核と細石刃核未製品の長さ・幅(表3・図11)に関しては細石刃核に比べ、細石刃核未製品はばらつきが大きく、それらは母型から細石刃剥離に至るまでの形態のばらつきを含んでいる。逆に言えば、細石刃核形態の規格性の高さを示していると言える。

細石刃が剥離される直前の細石刃核未製品は甲板面と下縁がほぼ平行する形状である。細石刃核の細石刃剥離角が一定であることから、細石刃剥離の進行過程で細石刃剥離角・作業面長を維持しながら一定の長さの細石刃が連続して剥離されたと考えられる。細石刃核の作業面長・細石刃の長さが画一的であることはこのことを裏付けている。

(3) 素材形状・細石刃核母型・細石刃核未製品製作技術

細石刃核の素材には石刃(図4-18など)と剥片(図5-6など)がある。接合資料から計測できる素材形状の長さは7～21cmでばらつきが大きく、素材別では石刃に15cm以上の長いものが含まれる(図12・15)。幅は主に3～8cmで長さ同様ばらつきが大きく、素材別では石刃が3～7cm、剥片が4～12cmでよりばらつきが大きい(図13・15・16)。厚さは0.8～5cmで主に0.8～1.6cmと1.6～2.4cmに分けられる(図14・16)。素材別では石刃が前者に、剥片が後者に対応し(表5⁽³⁾)、他の属性に比べ、ばらつきが少ない。素材の大きさに関しては長さ・幅にばらつきが大きいものの厚さにばらつきが少なく厚さが素材選択の条件であったと考えられる。また、素材別では石刃に比べ、剥片のほうが形態的なばらつきが大きい。

細石刃核母型は、主に縁辺部を中心とした加工により製作される(図4-12・14・16・18、図5-1～3・5・6)が、両面調整に近い母型(図4-22、図5-12～14)、断面三角形の母型(図5-11)が準備されることもある。また、石核素材の可能性のあるもの(図5-10)もある。

接合資料から復元される母型の長さ(図12・17)は7～16cm、高さ(図13・18)は2～7cmで素材に比べ、小型化し、ばらつきが減少している。また、素材別でも違いが小さくなっている。幅(素材の厚さに対応)は素材厚さと同様で0.8～1.6cmと1.6～2.4cmに分けられる。素材別では石刃は変化がみられないが、剥片では減少するものと減少しないものがある。前者は図4-20・図5-9のように母型作成段階で面的な加工がなされるもので、後者は図5-6のように加工が縁辺のみに限定されるものである。以上のことから素材から母型に加工することで長さ・幅(母型高さ)が減少し、同時にばらつきは減少する。厚さ(母型幅)は剥片素材で面的な加工がなされるもの以外はあまり変化がみられない。これは、母型作成段階で縁辺のみ加工が行われるのが多いためである。母型作成時には図23-8のように石刃の湾曲した先端部の両側縁にノッチ状の加工を加え、折り取る場合がある。また、図4-22・図5-9のように母型に両面調整を準備するものがあり、図4-10はそのような母型の可能性がある。

削片剥離は、ほとんどが母型の一方の端部から行われ、その打点位置には素材打面・先端部の偏りはみられない。また、ほとんどの細石刃剥離は削片剥離打面側で行われ、細石刃剥離作業面を正面に据えると素材背面が左側面に、素材腹面が右側面に設定される。削片剥離の頻度は、3～5本が主体的であるが、剥離されている削片の打面厚はほとんど変わらず、一定の厚さの削片を剥離する傾向があり、また、目的とする細石刃剥離直前の細石刃核未製品の長さが一定であることからその数は細石刃核母型の大きさに規定されている。

削片剥離後、甲板面・下縁から側面に加工が行われるものがあり、面的な調整が行われるもの(図4-20、図5-4～10、図23-3)と側面から甲板面への加工を含めた縁辺に細かい加工が行われるもの(図4-12、図5-

－1～3、図23－2、図24－2）とに分けられる。前者は細石刃核の形態を変化させる調整、後者は次の削片剥離に先立つ調整と考えられる。

これらと先ほど分離された素材厚さとの関係は、厚さ 0.8～1.6cm の素材には削片剥離に伴う側面調整が行われないか、縁辺に細かい加工が行われるのみで、厚さ 1.6～2.4cm の素材には幅を減少させる面的な側面調整が行われる（表4・6）。

母型と細石刃核未製品との関係は面的な側面調整の行われないⅠ類の未製品（図5－1～3）の幅は主に 0.9～1.5cm で石刃素材の母型に対応する。面的な側面調整が行われるⅡ類の未製品（図5－4～8・12～14）の幅は主に 1.1～2.0cm で石刃素材と剥片素材の両者の中間的な様相を示す。これらは剥片素材で母型から削片剥離に伴う側面調整によって母型より幅が減少しているためである。また、これら未製品は細石刃剥離までの折損品あるいは失敗品と考えられるのでⅡ類の細石刃核との中間的な様相を示している。

以上の結果を整理すると素材・素材厚さ・削片剥離に伴う側面調整・細石刃核に次のような相関が認められ、それぞれ細石刃剥離技術 AB 類とする。

A 類：石刃素材－素材厚さ 0.8～1.6cm－削片剥離に伴う側面調整無し－Ⅰ類細石刃核－長さ 20～28mm・幅 3～5mm の細石刃

B 類：剥片素材－素材厚さ 1.6～2.4cm－削片剥離に伴う側面調整有り－Ⅱ類細石刃核－長さ 20～28mm・幅 4～6mm の細石刃

つまり、相対的に薄い素材である石刃には削片剥離に伴う側面調整を行わず、相対的に厚い素材である剥片には削片剥離に伴う側面調整によって素材厚さ（細石刃核未製品幅）を減少させⅠⅡ類の形態差を減少させているのである。

（4）剥片剥離技術と母岩毎の細石刃核素材の選択性

ここでは、細石刃核関連資料が母岩の中でどのような位置付けにあるかを検討し、さらに、素材形状と剥片剥離技術との対応関係・剥片剥離技術と原石形状の対応関係を検討する。

接合資料から素材を生産したと考えられる剥片剥離技術は大きく二つに分けられる。

①20～30cm の角礫ないし転礫を素材として平坦面で、石核調整を行わずに一度の大型剥片剥離により作出された打面から頭部調整を伴う石刃剥離が行われる（図23－1、図24－1・4）。平坦な作業面形状を反映して剥離される石刃は幅広である。また、作業面形状が平坦であるためヒンジになりやすく、悪化した作業面を修正するため 180 度の打面転移が行われるものが多い。

②20～30cm の主に扁平な角礫ないし転礫を素材として裏面調整・打面調整・頭部調整を伴う石刃剥離が行われ、打面転移の結果、石核形状は円盤状になる（図25－5）。①の工程を経て②に移行するものがある（図26－1）。

図19・20 は本石器群に関連する剥片剥離技術の復元できる掲載接合資料を対象として、それに含まれる主な石刃類・細石刃関連接合資料の素材の大きさを示したグラフである。母岩 155・接合 1183（図23）は剥片剥離技術①により長さ 15～21cm、幅 4～7cm、厚さ 0.9～3.5cm の石刃が剥離され、加工のない石刃と細石刃核素材は長さ・幅に違いがみられないものの細石刃核素材には厚さ 0.9～1.8cm の石刃が選択されている。母岩 153・接合 1180（図24・25）は剥片剥離技術①により長さ 10～14cm、幅 3～5cm、厚さ 1.1～2.0cm の石刃が剥離され、10cm 程度のやや小型の石刃を細石刃核素材としている。本接合資料は剥離されている石刃が剥離の進行に伴い小型化し、中間的な大きさの石刃は欠落している。欠落した部分が搬出され、細石刃核素材として利用されたと考え、長さによる選択性は認められない。厚さに関しては 1.1～1.3cm の石刃が利用されている。母岩 158・接合 1187（図25）は剥片剥離技術②により長さ 9～12cm、幅 3～5cm、厚さ 0.9～2.0cm の石刃が剥離され、細石刃核素材には長さ・幅による選択性は認められないものの厚さは 0.9cm の石刃が利用されている。以上のことから、細石刃核素材は母岩内では長さ・幅による選択性は認められないものの、厚さに関しては 0.9～1.8cm 程度の薄手の石刃が選択されている。また、これらは全て石刃技法によるもので上述の細石刃核素材に厚さ 0.8～1.6cm の石刃が利用されている分析結果に一致する。

図4-20・図5-9が含まれる母岩127(『白滝遺跡群Ⅳ』の2分冊図Ⅳ-281、3分冊図版179)は石刃技法ではなく、厚手の剥片が剥離されている。細石刃核素材には厚さ1.7、2.4cmの剥片が利用され、石刃技法によって剥離された石刃から選択された細石刃核素材に比べ厚い剥片が利用されている。素材・未製品の分析においても剥片素材は石刃素材に比べ厚手のものが利用されており、石刃技法から剥離されたものと異なる選択性があったことが認められる。一方、剥片素材の中には石刃技法の打面作出剥片と考えられるものがあること、石刃技法以外の母岩が少ないことから、剥片素材の細石刃核素材については母岩127のような剥片を主体とする剥片剥離技術から剥離されたと考えるより、石刃技法で剥離された石核調整剥片や厚手の剥片が主体であると考えられる。

次に母岩単位で剥離される石刃等を比較する。先ほど検討したように石刃の長さは母岩単位で5cm程度の変異幅を持って剥離される。また、全体では9~22cmの石刃が剥離されているが、おおよそ15cm以上の石刃が剥離される母岩(母岩155・101)と15cm以下の石刃が剥離される母岩(母岩153・158・156など)に分けられる。作業面の大きさは打面再生が行われたいめほとんど変化はみられず、剥離される石刃等は石核の作業面の大きさ・形状さらに言えば原石の大きさに規定される。15cm以上の石刃が剥離された母岩は原石形状が20cm以上で、15cm以下の石刃が剥離された母岩は概ね20cm以下である。剥片剥離技術①②共に両者が利用され、利用される原石の大きさに偏りはみられない⁽⁴⁾。また、両者から剥離された石刃は細石刃核素材として利用されており、細石刃核素材の選択性と原石サイズ・剥片剥離技術に違いはみられない。石刃の幅は小型のものを除くと4~7cmにまとめ、母岩毎の変異が小さい。幅は作業面の横断面形・稜の分布・打面縁辺からの打点位置等に規定される。本石刃技法は平坦な作業面を特徴としており、それら諸条件の母岩毎の個体差が少なかったと考えられる。逆に考えれば、細石刃核に適した素材と考えられる厚さ0.8~1.6cm程度の石刃でなおかつ削片を剥離できる程度の幅(5cm前後)を持つものが剥離されるのが石刃技法の条件で、それが、本遺跡で行われている石刃技法と言える。つまり、細石刃を規準にすると長さ2.4cm前後、幅0.4~0.6cmの細石刃を得るためには、高さ1.9~2.4cm、幅0.8cm前後の細石刃核が必要となり、その素材として適した幅5cm前後、厚さ0.8~1.6cm程度の石刃を剥離するのに適した石刃技法が採用されているということが出来る。また、一方では石刃技法やその他の技術から剥離された剥片も利用され、大きさの変異の度合いが大きい剥片には削片剥離の際に面的な側面調整を行うことで幅を減少させ、高さ2.2~2.4cm、幅1.4cm前後の細石刃核を準備し、石刃素材同様の細石刃を剥離している。石刃素材・剥片素材の割合は細石刃核関連接合資料・細石刃核・細石刃核未製品ともに6:4程度で、AB類ともにほぼ同等な比重で利用されており、両者とも石刃技法に組み込まれた一般的な技術であることが分かる。

剥片剥離技術から細石刃剥離技術を総合すると本石器群の石器製作技術は目的とする細石刃を剥離するために石刃技法から剥離された石刃・剥片という二種類の素材に適応したAB類という細石刃剥離技術を採用したもので石器群での両者の位置付けはほぼ等質であったと評価することができる。

(5) 剥片剥離技術と原石形状

現時点では原石の形状から採取地点を推定するのは困難である。原礫面が平滑で角が全く潰れていないものであれば露頭付近で採取したのと考えられるが、その露頭位置を推定することも困難である。本石器群には原石の角が潰れた痕跡のある転礫が利用されることが多いが、表面に爪状の痕跡のある角のとれた転礫も利用されている。また、平滑な原礫面を持つ原石もあることから露頭付近から遺跡付近の河原まで比較的広い範囲で採集された可能性がある。原石は細石刃核素材に適した石刃の剥離が可能なものとして15cm以上のものが選択され、また、平坦な原礫面のあるものが選択されたと考えられる。剥片剥離技術と原石形状に偏りは無く、剥片剥離技術①②共に角礫・転礫が、また、20cm以上・以下の原石が利用されている。

(6) 石材の搬入形態・遺跡で行われた石器製作作業・搬出形態

遺跡には原石で搬入され、残核まで剥片剥離作業が行われるものと途中で石刃核として搬出されるものがある。15cm以下の石刃が剥離される20cm以下の母岩(母岩153・158)は残核まで剥片剥離が行われることが多く、

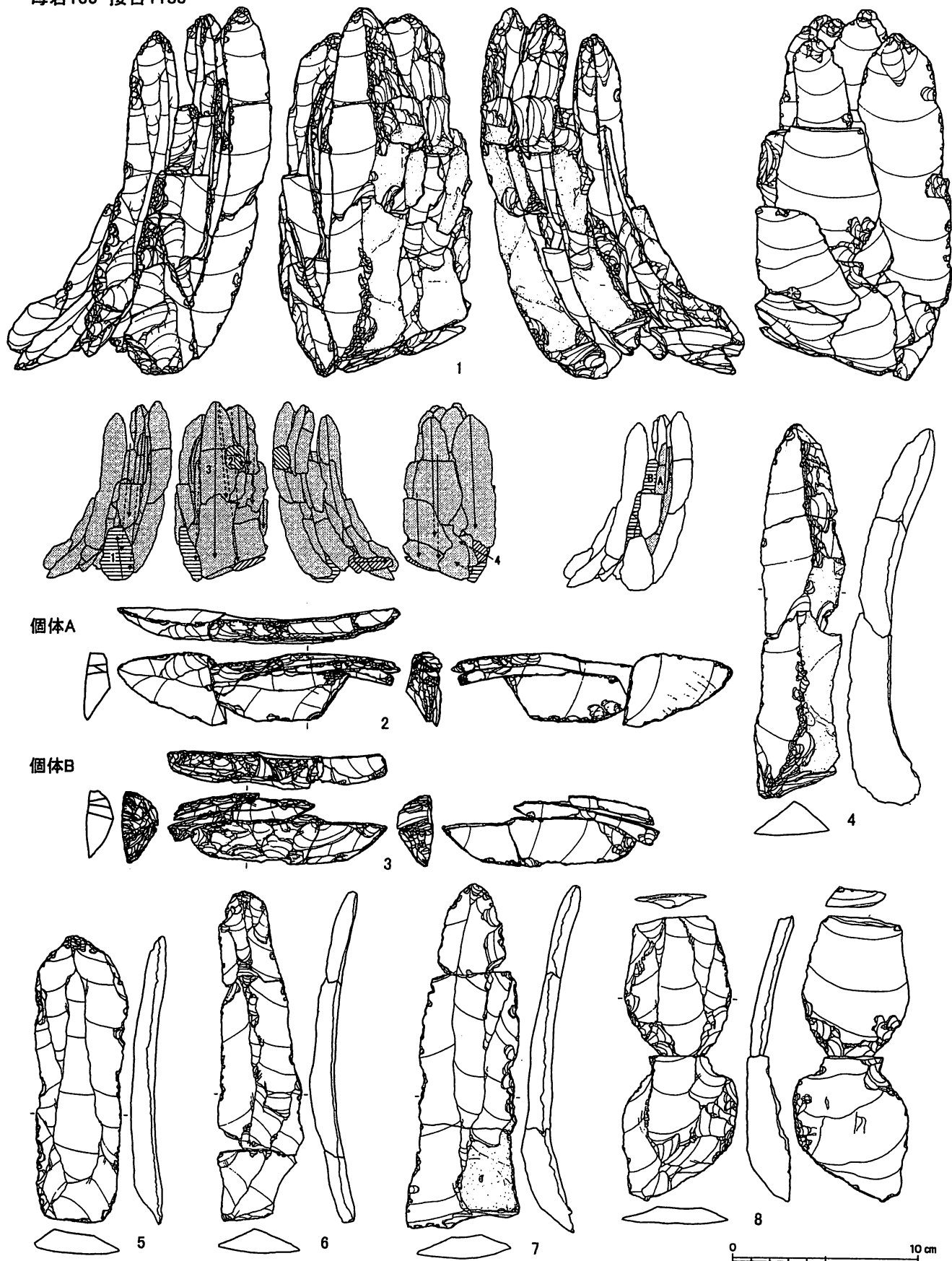
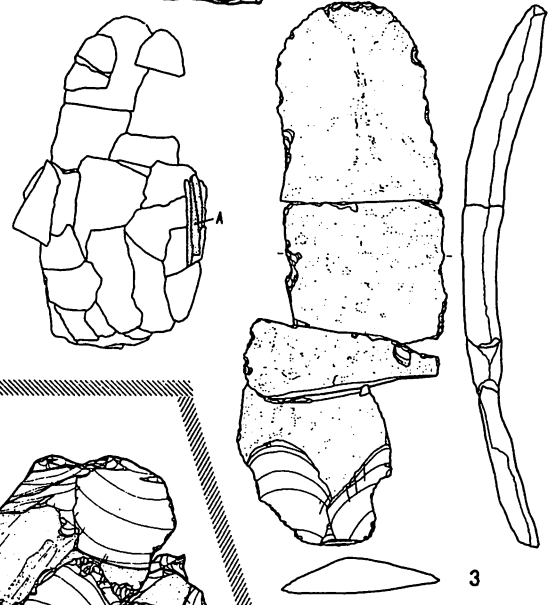
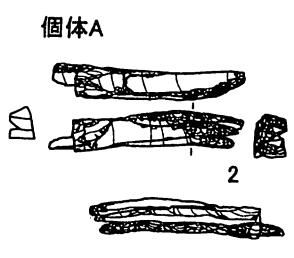
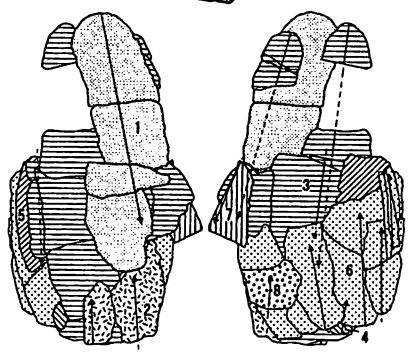
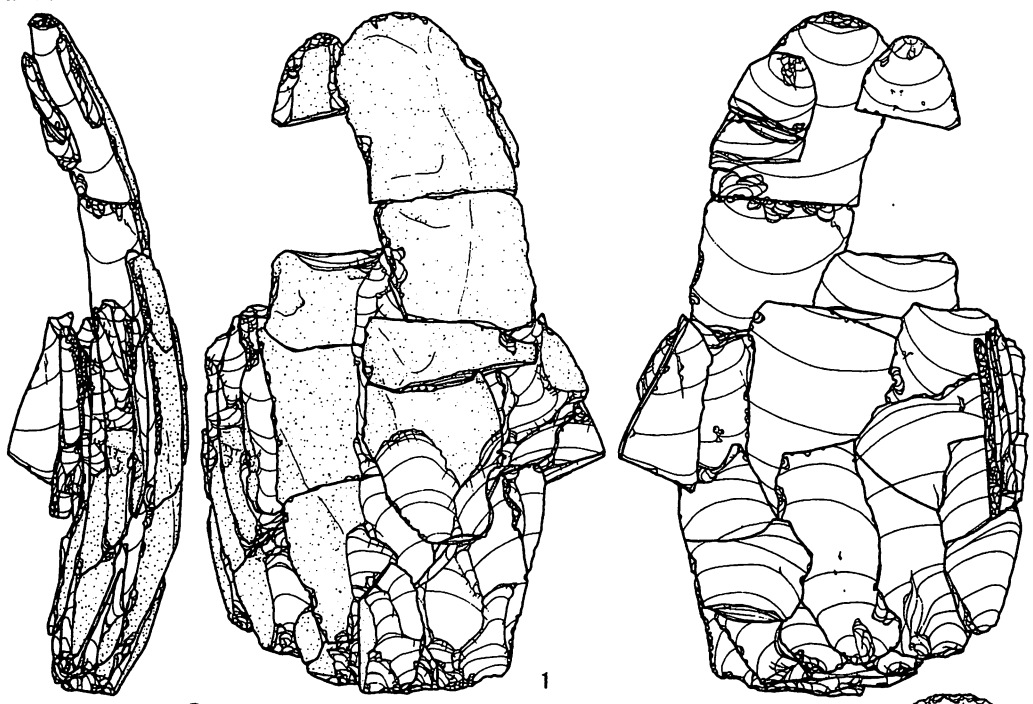


図23 上白滝8遺跡の石器(3)

母岩101・接合1001



母岩153・接合1180(1)

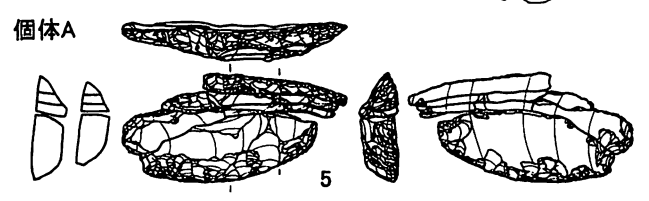
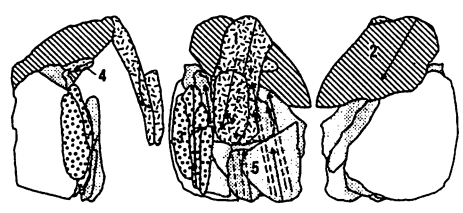
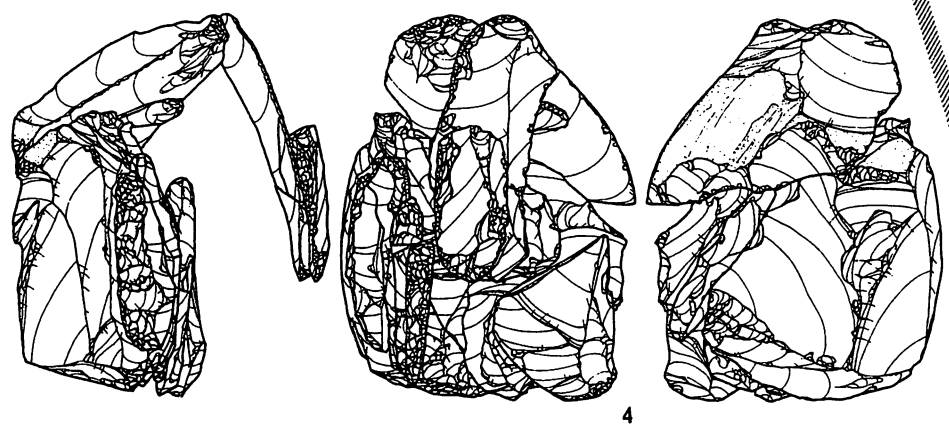
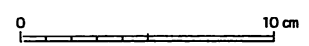
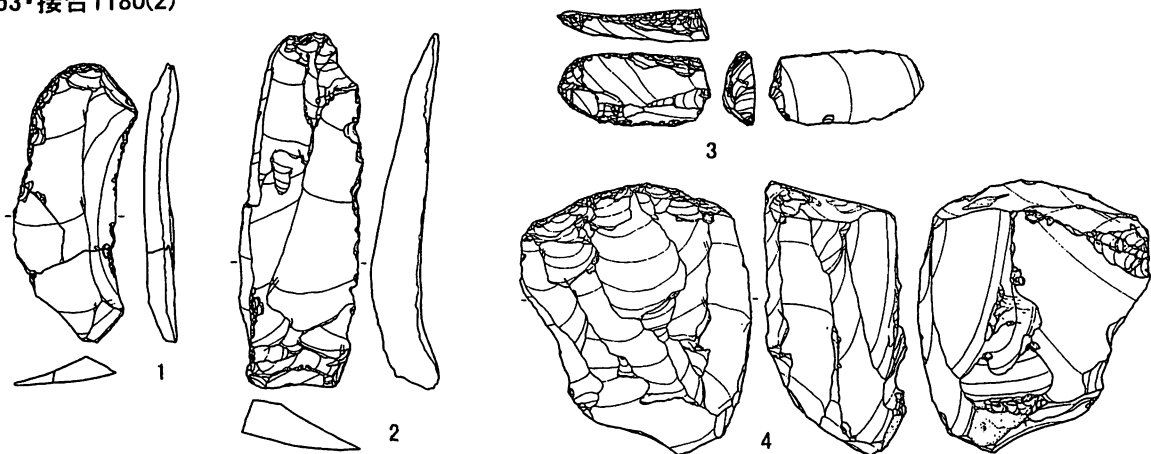


図24 上白滝8遺跡の石器(4)



母岩153・接合1180(2)



母岩158・接合1187

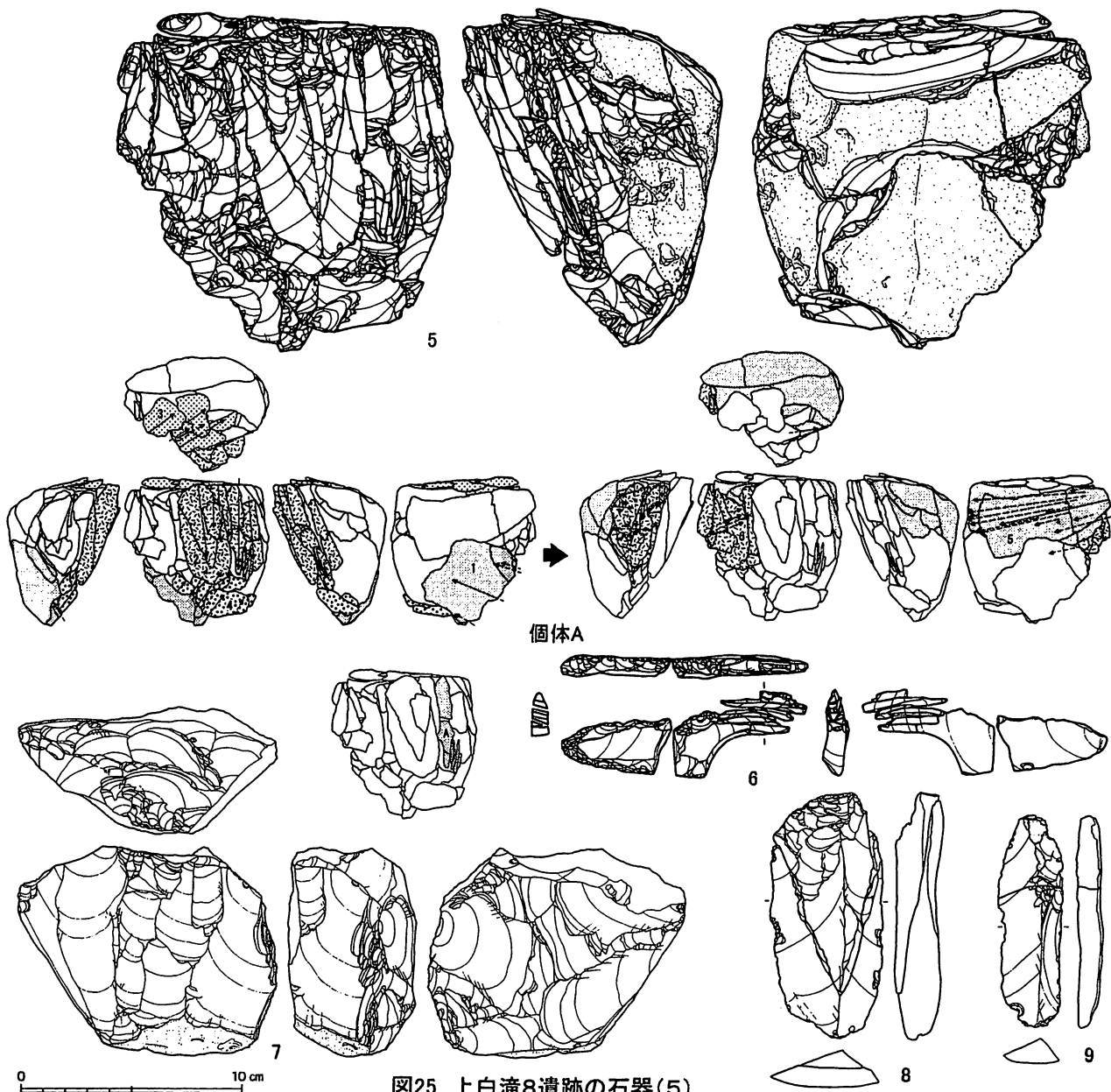


図25 上白滝8遺跡の石器(5)

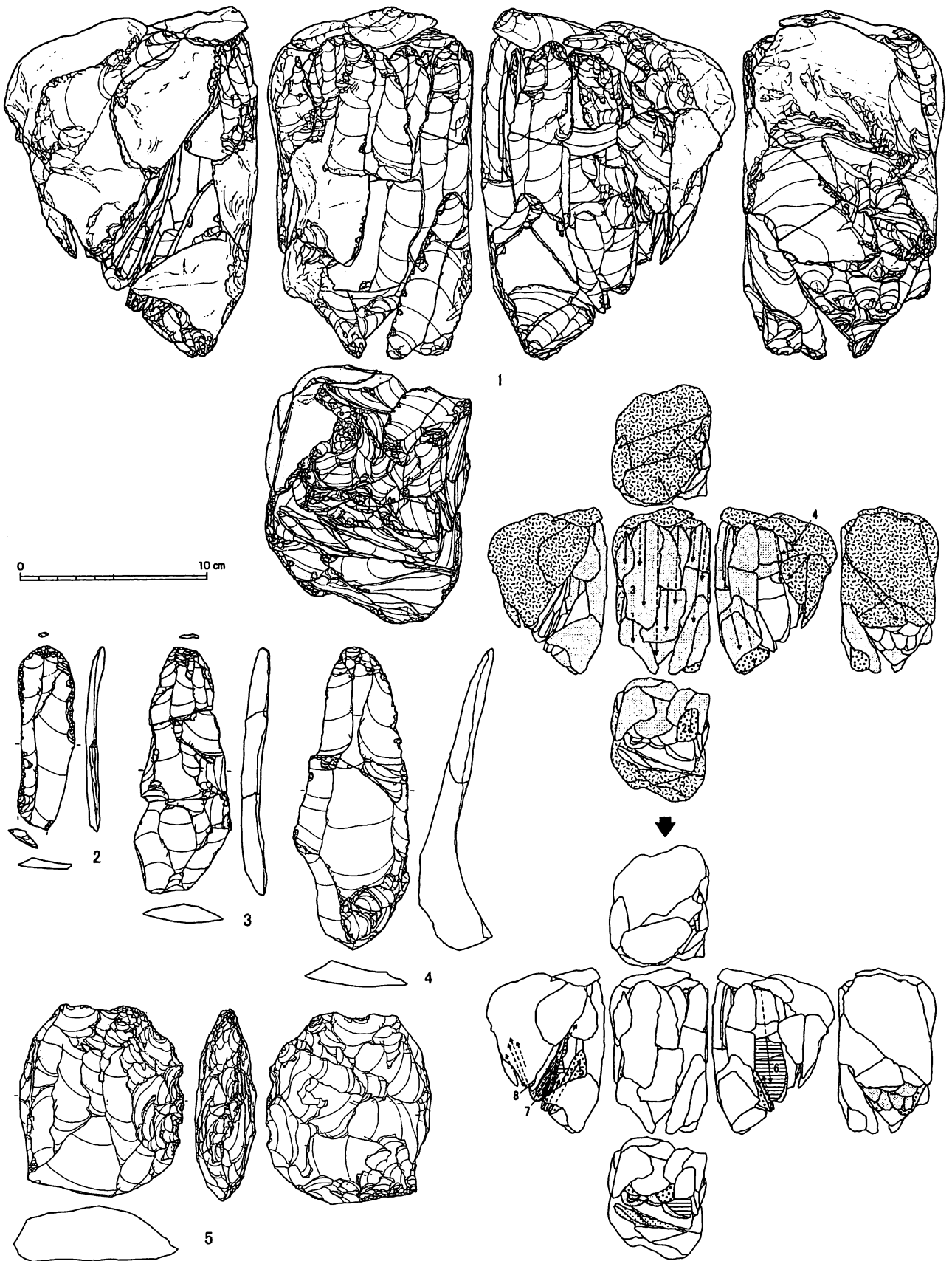


図26 上白滝8遺跡の石器(6)

15cm 以上の石刃が剥離される 20cm を越える母岩で比較的良好な石刃が連続的に剥離されるもの（母岩 101・155 など）は石刃核として搬出される。また、接合資料には石刃が欠落するものや細石刃核母型作成時の調整剥片のみが接合し、本体が欠落するものがあり、石刃・細石刃核母型で搬出されていたと考えられる。

細石刃核削片が接合する細石刃核（図 4-12・14・16・18・20・22、図 23-2）は削片剥離後、打面再生は行われず、残核になるまで一気に細石刃剥離が行われている。細石刃関連資料は前述の通り黒色の黒曜石が利用されているため、細石刃の母岩分類が困難である。そのため細石刃核が欠落し、細石刃核削片のみ接合する資料については同一母岩の細石刃の有無で搬出された細石刃核が細石刃剥離後に搬出されたかどうかを判断することはできない。しかし、削片が接合する細石刃核の細石刃剥離頻度から考えるとおそらく細石刃核未製品で搬出されたと考えられる。図 21 は細石刃核削片のみ接合した資料の搬出形態の幅を細石刃核・細石刃核未製品と比較したものである。その分布形は大型の図 5-10、断面三角形の素材から加工された図 5-11 を除くと、母型から細石刃剥離直前までの幅広い段階を含む細石刃核未製品とは異なり、細石刃核とほぼ同じ分布を示す。このことは、細石刃を剥離する直前の段階の未製品で搬出されていることを示すと思われる。また、母岩認定が困難であるものの細石刃核削片のみの接合資料の中には同一母岩を持たないものがあり、また、細石刃核未製品についても同様で、細石刃核母型や石刃などの素材で搬入されたものがあると考えられる。

以上のことを整理すると遺跡には原石・素材・細石刃核母型で搬入され、原石については 20cm 以下のものはほぼ消費しきるまで石刃剥離が行われ、20cm を越える大型のものは良好な石刃が剥離されたものは消費しきるまで石刃剥離が行われず、石刃核が搬出される。また、両者ともに石刃・剥片が搬出される。細石刃剥離に適した石刃を素材として細石刃剥離が行われるが、未製品の段階で破損・失敗するものもあり、細石刃核の幅・高さなどの形状が細石刃剥離の条件を満たしたと判断できるものには消費しきるまで一気に細石刃が剥離されたものと考えられ、剥離された細石刃のうち側面を取り込まない直線的な細石刃の多くが搬出されたと思われる。全体では細石刃・細石刃核母型・細石刃剥離直前の細石刃核未製品・石刃・剥片・石刃核が搬出されたものと思われる。本遺跡には本石器群に含まれると積極的に考えられる細石刃関連資料以外のツールは無く、石器群を残した人々が保持していた全ての技術の一部のみを反映している可能性がある。筆者は、かつて上白滝 5 遺跡の分析において消費地遺跡との石器製作の連鎖が認められず、短期間で石器製作・搬出が行われた Sb-5 と消費地遺跡との石器製作の連鎖が認められ、回帰的な行動の結果残されたと考えた Sb-6~11 を対照的な性格を持つものとして認識した（鈴木 2002）。本石器群における石器製作作業は細石刃剥離と素材である石刃剥離に限定された点で短期間の石器製作が想定され、その点では Sb-5 に近い。しかし、細石刃核母型等で搬入される石器製作の連鎖が認められるため、異なる様相を示している。その性格付けのためには、今後同様な石器群の消費地遺跡との比較が必要であろう。

6 おわりに

本論では上白滝 8 遺跡の細石刃石器群の技術構造について目的剥片である細石刃を起点として検討してきた。本石器群では、二種類の石刃剥離技術が認められ、それらから剥離される石刃は細石刃剥離技術 A 類によって、また、剥片は細石刃剥離技術 B 類によって細石刃が剥離されている。それらは両者とも一定の割合を持って利用されていることから一般的に用いられた技術といえる。技術構造を構成する原石から細石刃剥離に至るまでの個々の技術は目的剥片である細石刃を起点として説明が可能であり、石器製作者の一連の思考とそれに基づいて表現される石器製作技術を復元することができたと思う。また、遺跡で行われた石器製作作業、搬入・搬出形態の検討によって地域内・地域間での遺跡間変異を検討する基礎的データを提示することができたと思う。

前述のとおり、石器製作技術は構造体をなしており、石器群を理解する上ではその構造を明らかにすることが重要である。技術構造における各段階の意味づけを行うためには目的剥片自体の分析が起点となり、細石刃石器群では細石刃剥離技術を説明するために細石刃を規準とする必要がある。今回対象とした石器群では石器製作活動が細石刃剥離に限定されていたが、上白滝 2 遺跡 Sb-3~6・10 のように細石刃剥離とその他のツールで異

なる技術基盤を持つものがあり、そのような石器群についてはそれぞれの目的剥片を起点とした構造とそれらの関連性を明らかにする必要がある。細石刃剥離技術については、素材・母型作成などはもちろん、削片剥離に伴う調整などの個々の属性レベルでの変異を検討する必要がある、そのためには定量的な分析が有効である。そのように具体的に比較可能な形で技術構造を復元し、石器群単位のデータを蓄積し、それらを等質に比較することで有意な技法設定が可能になると考える。また、同様に遺跡間変異に関する検討も可能になろう。

石材消費の脈絡では原産地遺跡である白滝遺跡群は石器製作の起点として位置付けられ、石材採取を目的とする点で遺跡の機能的理解が可能である。また、質量共に行われた石器製作活動を復元することが可能で、それは消費地遺跡を理解する規準になりうると考える。白滝遺跡群の調査は今まで具体的・直接的に論じることが困難であった原産地遺跡の実体を明らかにする点で非常に重要で、また、同一地域に立地する異なる石器群を比較することによって石器群による様々な変異（石材採取から石材の搬出、石材の搬入）を検討することができる点でも重要である。

白滝遺跡群におけるデータは少しずつであるが蓄積してきており、今後も継続し、原産地周辺地域内での石器製作活動の復元、通時的・共時的な石器製作活動の遺跡間変異の検討を行っていききたい。

末筆ながら編者の堤隆氏、共に白滝遺跡群の整理に携わり議論をしていただいている直江康雄氏に感謝します。

註

- (1) 細石刃核については剥片剥離によって一次的に剥離され、加工される前の剥片や石刃を「素材」、加工により整形され、削片剥離が行われる直前の段階を「母型」、削片が剥離され、細石刃が剥離されていないものを「未製品」とした。細石刃剥離製作技術上、以上のように分けられるが、「母型」に関しては多くは接合資料から判断できるものであり観念的なものである。「未製品」は削片剥離段階で折損したものや剥離の困難になったものがほとんどで細石刃が剥離される直前のものとは限らず、削片剥離が行われてから細石刃が剥離される直前のものまでを含む。細石刃核母型・未製品・細石刃核の大きさの呼称については一連の細石刃剥離技術の中で削片が剥離される長軸を「長さ」、それに直交する短軸を「高さ」、厚みを「幅」とする。これは、素材の「長さ」、「幅」、「高さ」に対応する。
- (2) 細石刃のような小型の遺物に関しては回収率の問題がある。本遺跡では調査時には篩いを利用した回収を行っていないため、サンプリングエラーが想定される。細石刃に関してサンプリングエラーは質的な問題と量的な問題に影響を及ぼす。質的な問題では回収された細石刃がその本来の資料体をどれだけ反映しているかということである。後述するが、本石器群の細石刃剥離技術における細石刃剥離作業面の形態変化はほとんど無いため、本来の資料体を反映していると考え、資料を扱う。また、量的な問題については現場において部分的な篩いがけを行い、手掘りと篩いでの回収率の違いを検討するなどその資料体の位置付けを行う規準が必要と考える。今回は、細石刃の量的な問題については、細石刃核削片と細石刃核の接合資料によって細石刃剥離頻度を推測することとする。
- (3) 表やグラフにおけるサンプル数は計測や判定可能なものを対象とするため必ずしも一致しない。例えば、欠損しているために幅は計測可能であるが長さは計測できない場合などがある。
- (4) 今回掲載していないが、母岩 160・接合 1190（『白滝遺跡群Ⅳ』の2分冊図Ⅳ-283）は20cm以上の原石を利用して剥片剥離技術②が行われている。

引用文献

- 稲田孝司 1969 「尖頭器文化の出現と旧石器的石器製作の解体」『考古学研究』15-3pp. 3-18
- 鈴木宏行 2002 「Ⅵ-2 上白滝5遺跡について」『白滝遺跡群Ⅲ 奥白滝1遺跡・上白滝5遺跡』pp. 348-375
- 鈴木宏行・直江康雄・長沼 孝 2004 『白滝遺跡群Ⅳ 奥白滝11遺跡・上白滝8遺跡・上白滝6遺跡・白滝第30地点遺跡』（財）北海道埋蔵文化財センター
- 寺崎康史 1999 「北海道細石刃石器群理解への一試論」『先史考古学論集』8pp. 71-88
- 山原敏朗 1998 「北海道の旧石器時代終末期についての覚書」『北海道考古学』34pp. 77-92

関東以北の細石刃石器群の遺跡構成

山科 哲

1 はじめに

矢出川遺跡の発見から半世紀の歴史を積み重ねてきた細石刃石器群の研究を振り返ると、その多くは型式設定とも言うべき技法研究と編年研究が主体であったと認識できる。一方で、ここ10年来、行動をめぐる研究が蓄積され、議論は多様化していると言っていいだろう。

編年研究の問題点には、何も細石刃石器群に限ったことではないが、層位的出土事例に恵まれるかどうかで編年整備に大きな影響を与えることが、やはり問題のひとつであろう。各地域ごとの編年といえども、残核型式を基準とする編年においては、おおよそ同一の製作工程をたどる（同一の「技法」による）残核の変異を時間差として評価するのか、コアリダクションの程度に起因したものとして評価するのかわかも結果は大きく変わる。結果的に、地域ごとの編年網の整備も決して容易ではない。全国的な視野にたった編年では、層位的出土事例に基づける地域や遺跡と、そうでない地域や遺跡との比較になるため、一層困難である。しかも、安蒜政雄氏（安蒜 1984）や白石典之氏（白石 1993）のような傾斜編年で捉えていけない限り、議論が難しいのが現状である。また、近年の重要な問題の一つに、北海道柏台 1 遺跡の調査成果がある。これは、同一時間幅としての「細石刃段階」と評価して、その時間幅における編年整備と地域間比較という攻め手が適用できないことを示す。

行動論的な研究については、温度差が激しい状況と言える。本州地方の東北日本における議論は活発だが、それ以外の地域あるいは石器群においては、北海道東部や南西関東における細石刃石器群の黒曜石産地推定分析にもとづいて、黒曜石の流入経路に関する議論があるとはいえ、本州地方東北日本をターゲットにした議論に比べれば低調であるのは否めない。加えて、本州地方北半における残核の型式分布が明瞭に観察できることから、両者を行動論的に比較することは、分布論を超えた旧石器時代の地域性の研究においても重要になる。

本稿では、関東地方以北の細石刃石器群について、尖頭器類を伴わない細石刃石器群として評価できる石器群を取り上げ、その石器製作の構造と遺跡構成を抽出し、先行する石器群と比較することを目的としたい。本来先に議論すべき編年的な位置付けはここでは触れることができないが、遺跡間比較に基づく行動論的にみた場合に先行石器群とどのような関係にあるのか、また、おおよそ古利根川を境としてあたかも対峙するように分布する湧別技法を持つ石器群と、野岳・休場型の細石刃石核を持つ石器群とに、どのような評価を与えることができるのか、これによって可能になると考えるからである。より単純な石器群を「切り取る」、そして比較するということには、それぞれの編年整備と互いの比較が本来前提としてなければならない。しかし、野岳休場型の一群の遺跡立地がナイフ形石器石器群と共通するという指摘（橋本 1998）などを考慮すれば、本稿の試みは決して無駄になるものではないと考える。

分析自体は先行研究や幾多の報告書に基づくから、研究の剽窃行為に近いものがあるが、上記視点による研究が必ずしも多くない現状においては無駄ではないと判断しているので、その点をご寛恕いただきたい。分析にあたっては、細石刃石核の型式ごとに、①細石刃製作工程の特徴、②伴う石器とその素材供給、③利用石材、④石器群の組成と接合資料による遺跡の構成、の4点を捉え、先行する石器群との比較に望みたい。

なお、分析を進めるにあたり、便宜的に道東（十勝平野、注 1）、本州地方日本海側～古利根川以北、南西関東地方と地域をあらかじめ設定しておく。本来進めるべき分析手順とは逆転するが、ご容赦いただきたい。

2 石器製作の構造

はじめに、石器製作の特徴と利用石材について整理していくことにしたい。整理にあたっては、本来、型式に相当すると思われる細石刃石核の製作工程を、各石器群の接合資料をもとに把握したうえでなすべきかと思われるが、紙数の都合もあるため、ここではあらかじめ道東、本州地方日本海側～古利根川以北、南西関東において、従来の型式を接合資料によって追認しつつ、整理を進めることにしたい。

2-1 道東

道東におけるより単純な細石刃石器群ということで、残核型式としては従来札滑型、峠下型と認定されてきた型式をもつ石器群に絞ることにする。編年的な評価では、いわば細石刃が盛行する時期といえるだろう（木村 1995、寺崎 1999、山田 1999 など）。まず両型式の細石刃石核の製作工程（素材供給）、次に、伴う剥片石器の素材供給を把握し、最後に利用石材を捉えていく。

札滑型細石刃石核の製作工程：素材は原石もしくは大形で分厚い剥片を利用する。おおよそ平面形状が楕円形、断面形状が凸レンズ状になるように両面に調整を施すことで石核原形を製作する。ただし、将来の細石刃剥離打面に平坦な礫面を設定し、断面三角形状に仕上げる場合もある。細石刃剥離打面の確保は石核原形の長軸に沿って削片剥離を行うことで確保する。削片剥離は満足する細石刃剥離打面が得られるまで行うが、削片同士の接合例を見る限り、削片剥離によって形成された剥離面が石核原形の縁辺に対しておおよそ直行する（水平）状態が目安となっているといえる。幌加沢遺跡遠間地点の接合例などでは、この削片剥離の過程で、石核原形側面への調整が行われる場合がある。ただし、形状を著しく変えるほどではない。細石刃剥離の進行に伴う打面再生は稀であるが、細石刃剥離作業面を大きく取り込んだ剥片の存在は、暁遺跡第 1 地点に認めることができる。なお、打面形成削片には、細石刃石核へと転用された資料が、幌加沢遺跡遠間地点と暁遺跡第 1 地点に存在する。

峠下型細石刃石核の製作工程：素材は石刃／縦長剥片である。素材となる剥片の側縁に加工を施し石核原形とする。将来の細石刃剥離打面への調整加工は石核下縁の調整に比較して急斜度である。おおよそ素材剥片の右側縁を細石刃剥離打面と見たたて調整を施すが、緑ヶ丘 B 遺跡などには逆になる資料が含まれる。打面の確保は削片剥離によって行う。連続的な削片剥離も行うが、その都度先行する削片剥離面への調整が施される。細石刃剥離の進行に伴って打面再生が行われるが、暁遺跡第 1 地点の接合資料から判断する限りでは、札滑型よりも再生の頻度は高いと言える。

剥片石器とその素材供給：伴う剥片石器には、荒屋型彫器を含む彫器、搔器、二次加工のある剥片や微細剥離のある剥片（以下 RF/UF）が確認できる。いずれの資料も、不定形な剥片を素材とする場合と石刃／縦長剥片を素材とする場合とが考えられる。それぞれについて触れていく。

彫器：彫器は、荒屋型彫器と、かつて吉崎昌一氏が「ビュアリン・ナイフ」と呼称したもの（吉崎 1973）と、大きく 2 型式の彫器が通常組成する。この 2 種の彫器の長幅比などを分析を示した山原敏朗氏の論考では、素材剥片の違いが想定されている（山原 1997）。前者では石刃／縦長剥片のみならず、細石刃石核原形・細石刃石核の石核調整剥片を利用している可能性が高いこと、後者ではより石刃／縦長剥片を利用している傾向が強いことが指摘された。同様に荒屋型彫器の長幅比および背面構成を詳細に検討した加藤学氏の研究によれば、細石刃石核との接合資料を持つ本州地方の湧別技法を含む石器群に比べて、長幅比係数が大きく、背面構成でも多方向の傾向が強い本州出土資料に比べて、同一方向が非常に多いという傾向がある（加藤学 1999、2003）。リダクションの進行や縁辺調整の度合いなどによって観察可能な面積に影響を及ぼすため、接合資料抜き議論には限界があるが、やはり山原氏が示す荒屋型＝石刃／縦長剥片素

表1: 十勝平野の石器群

遺跡名	集中部	ツール		札滑型			峠下型			残滓	
		細石刃	剥片石器	細石刃石核	打面削片	調整剥片	細石刃石核	打面削片	調整剥片	剥片・碎片	残核
晩第1地点	SP1	2644	262(25)	3	0/1	18	9	9/27/14	0	8674	4
	SP2	8	1	0	0	0	0	0	0	354	0
	SP3	276	38(3)	1	0/1	2	1(広網型)	0	0	1603	0
	SP4	1	13	0	0	0	0	0	0	748	1
	SP5	30	8(1)	1	0/6	0	0	0	0	1531	3
	SP6	80	3(1)	2	0/3	0	0	0	0	42	0
	SP7	62	5(1)	0	0	0	0	0/1	0	68	0
	SP8	2093	118(30)	7(2)	1/7	10	6	2(1)/8(1)	3	4172	2
	SP9	74	5	1	0	0	0	0	0	188	0
	SP10	1	0	0	0	0	0	0	0	15	0
	SP11	177	18	1	0	3	0	0	0	298	0
	SP12	1913	166(25)	1	0/4(2)	4	11	6/9	2	3594	0
	SP13	18	13(1)	0	0	0	0	0	0	36	0
	SP14	630	28(10)	2	0/1	6	0	0/1	0	1339	0
	SP15	45	54	0	0/1	0	1	1/7(1)	0	845	1
	SP16	71	1(1)	0	0	0	0	0	0	76	0
SP外	174	50(7)	2	0/2	2	1	3	0	855	0	
晩第4地点	SP1	352	57	0	0	0	8	3/8	0	1214	18
上似平	Aブロック	332	6	0	0	0	0	0	0	263	2
川西C	SP13-15	10	11(1)	0	0	0	0	0	0	146	0
南町2	SP3	167	5(3)	1	0	0	0	0	0	392	0

注: 剥片石器のカッコ内は非黒曜石の資料、札滑型細石刃石核のカッコ内は打面削片転用資料
 打面削片のスラッシュは、左が一次削片、右が二次削片(SP1は左:一次、中:二次、右:不明)を示す
 打面削片のカッコ内はツール転用資料、ただし細石刃石核への転用は含まない
 調整剥片は、細石刃剥離作業面に關係する剥片

表2: 本州地方日本海側～古利根川以北の石器群

遺跡名	ツール			残滓		
	細石刃	剥片石器	礫器	細石刃石核	打面削片	剥片・碎片
角二山	1274	194	15	12(4)	38	4362
荒屋(2・3次)	5590	1072	2	20(9)	27	85715
下堤D	5	5	0	2(2)	0	238
中土	22	21	1	3(1)	0	31
月岡	92	29	0	4	14	233
正面中島	19	37	1	1(1)	2	96
後野B	167	11	1	4	0	562
柏原	103	3	0	2	0	50
白草	478	144	1	1(1)	6	3786
頭無	121	37	1	1	1	268
上原	51	6	0	1	1	65
木戸場	3	33	1	2	0	55
大網山田台No.8	34	49	1	3(1)	0	87
東峰御幸畑西	13	42	0	5(1)	4	41
高岡大山	3	11	0	1	0	20
駒井野荒追	8	3	0	0	0	37
下崎中郷	0	0	0	0	1	0
天神前	0	0	0	1	0	0
北篠場	0	0	0	0	0	1
稻荷山	0	0	0	1	0	1
押手	0	0	0	1	0	0
落合	0	1	0	0	0	0
赤羽根	1	0	0	2	0	0
高岡大福寺	0	0	0	1	1	0
木戸先	1	2	0	2	0	0
聖人塚	0	1	0	0	0	0
草刈六之台	0	1	0	0	0	0

注: 細石刃石核のカッコ内は細石刃剥離に及んでいない資料

材+細石刃石核調整剥片素材、「ビュアリン・ナイフ」=石刃/縦長剥片素材と捉えておいて問題はないであろう。なお、石刃/縦長剥片を剥離した残核は、幌加沢遺跡遠間地点と置戸安住遺跡B・C地点において確認できるが、それ以外の遺跡では概して資料が少ない。石刃/縦長剥片製作と札滑型細石刃石核の製作の関係については、かつて一体化するとの評価もあったが(白石 1993 など)、石刃/縦長剥片を剥離した残核は、稜形成をはじめとする石核調整が顕著であり、その点に対する評価次第と思われる。置戸安住遺跡B・C地点を再整理した経験に即して言えば、両者は一体化せず、札滑型利用の細石刃製作と、石刃/縦長剥片製作はそれぞれ別個に行われていたと捉えておく。

搔器：搔器は、おおよそ石刃/縦長剥片素材と考えていいだろう。特に、幌加沢遺跡遠間地点、緑ヶ丘B遺跡、本沢遺跡の事例は好例である。ただし、数点は背面構成が多方向である。それ以上に問題になるのが、ソコル遺跡と暁遺跡第1地点出土資料である。この2遺跡から出土した搔器には、両面に調整が施された寸詰まりもしくは円形に近い搔器が含まれる。それらはすでに素材を認定することは難しい。それ以外の資料でも、主剥離面と同一方向の剥離面を持つ資料は寸詰まりで縁辺調整が著しいものが多い。後述するように、この2遺跡では明確な石刃/縦長剥片剥離の工程を認めることができないので、一部の資料は刃部再生に伴って再加工→縮小が進んだものと考えられる。

RF/UF：これらの資料は、彫器や搔器に比べて、背面構成が多方向の資料が多い点が特徴である。素材となった剥片の打面の情報からも、石刃/縦長剥片を素材とするのではなく、札滑型石核の調整剥片を利用していると考えていいだろう。とりわけ暁遺跡第1地点をはじめとする十勝平野で確認できる資料は、そうした特徴を持つ資料が多い。

利用石材：最後に利用石材について触れていく。道東は、北海道の4大黒曜石産地のうち、白滝、置戸、十勝三股の3つを抱えている。これに呼応するように、利用石材は黒曜石が突出する。細石刃関係はほぼすべて黒曜石であり、それは札滑型、峠下型の別なく利用される。一方、剥片石器についてみると、特に荒屋型彫器については、木村英明氏や山原氏の指摘にあるとおり、非黒曜石を利用する傾向が強い(木村前掲、山原前掲)。とりわけ硬質頁岩の利用頻度が高いようである。暁遺跡第1地点やソコル遺跡では、搔器にも一部非黒曜石の資料が存在する。石器群に占める非黒曜石の利用頻度はきわめて低いが、こうした特定器種での非黒曜石の利用頻度はかなり高い。しかしながら、非黒曜石の残核は明確な痕跡がなく、注目に値する。

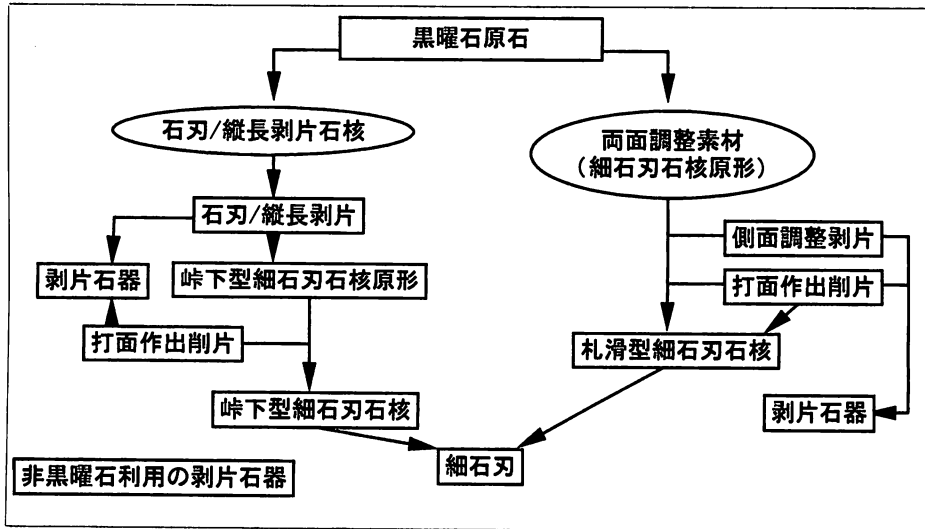
以上のような、道東における石器群の構造は、図1(上段)のように考えておいていいだろう。

2-2 本州地方日本海側～古利根川以北

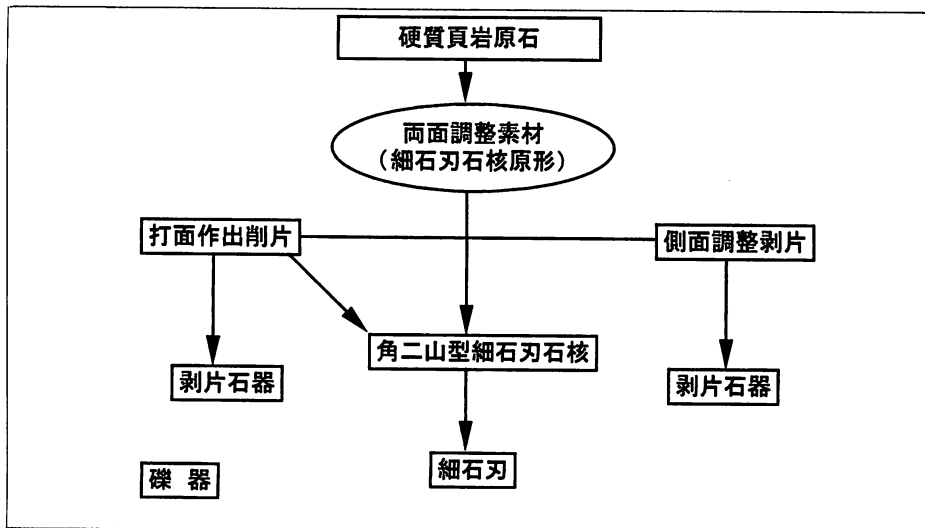
古利根川以北としたが、大陸での荒屋型彫器類似資料の出土範囲を考えると、おおよそ北緯36度以北と言ってもいいかもしれない。当地域では、角二山型(札滑型)が広く確認されている。ほかにも幌加型、稜柱形(野岳・休場型)の資料が検出されているが、幌加型は伴う石器が石刃/縦長剥片、それらを素材とする彫器、搔器、彫搔器で、彫器は荒屋型ではないこともあわせ、多分に神子柴型石斧を組成する石器群と共通する要素が認められるため、ここでは触れない。野岳・休場型の資料については、石器群としての評価ができるのは荒川台遺跡に限られるため、同様に本稿では触れないことにする。

角二山型細石刃石核の製作工程：札滑型で確認した工程と大差はない。角二山遺跡の接合例をみると(桜井1992)、原石を大きく打ち割ったものを素材として、おおよそ両面調整に仕上げ、削片剥離による打面形成、という工程を捉えることができる。永塚俊司氏が注意した「分割-削片系」(永塚1997)については、明治大学所蔵の荒屋遺跡第1次発掘調査資料、大綱山田台No.8遺跡、東峰御幸畑西遺跡に存在する。いずれも、削片剥離によらない打面確保の可能性が高いとはいえ、少なくとも両面調整の石核原形を準備した後に、細石刃剥離作業面を確保、そして側面への調整はほとんど行わない点が指摘できる。永塚氏が指摘するように、これは打面確保の一種のヴァリエーションとして考えておく。

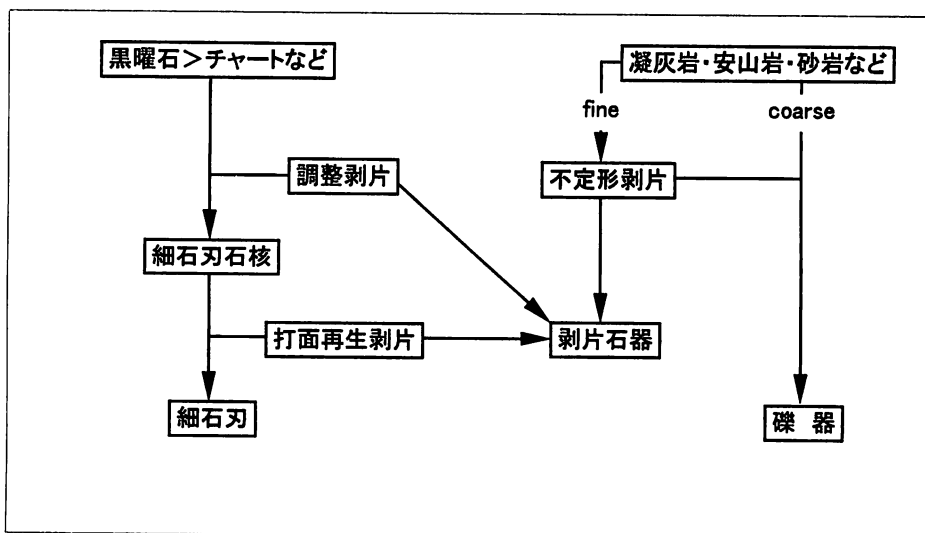
剥片石器とその素材供給：伴う剥片石器については、荒屋型彫器と搔器、RFが顕著である。これらの剥



道東



本州地方日本海側～古利根川以北



南西関東

図1: 石器製作の構造模式図

片石器の素材供給については、かねてより細石刃石核原形の調整剥片を利用した、とする見解が数多く提出されただけでなく、実際の接合資料にも確認できることである（角二山遺跡、荒屋遺跡、恩原1遺跡、木戸場遺跡）。桜井美枝氏の角二山遺跡出土資料の統計的な分析（桜井前掲）などの所見を踏まえても、接合資料の有無とは別に、否定する材料をそろえるほうが今や難しい状況である。先にふれた加藤学氏による荒屋型彫器の背面構成と長幅比の傾向から判断しても（加藤前掲）、やはり否定することのほうが難しい。

このほか、礫器を伴う場合がある。後野遺跡B区、白草遺跡、角二山遺跡、中土遺跡などが該当する。

利用石材：硬質頁岩を多用する。しかし、わずかながら非硬質頁岩石材を利用する遺跡もある。大綱山田台No.8遺跡では、流紋岩利用の接合資料が、東峰御幸畑西遺跡では安山岩利用の接合例が検出されている。

2-3 南西関東地方

南西関東に限らず、関東地方で検出される細石刃石器群の多くは、野岳・休場型（鈴木1971）、稜柱形（安蒜1979）などと呼称されてきた細石刃石核を持つ石器群がほとんどである。これにしたがって、ここでは南西関東以外の石器群にも触れながら石器製作の構造を検討したい。

細石刃石核の製作工程：このタイプの製作工程については、鈴木忠司氏（1971）、安蒜政雄氏（1979）、堤隆氏（1987）各氏の論考があるが、小林達雄氏（1970）、橋本勝雄氏（1998）両氏の指摘にもあるとおり、細石刃剥離が進行すると、工程的な特徴を捉えるのが難しくなるという特徴がある。しかし、まずは各資料にどのような特徴が認められるのか、確認していくことにする。

主な該当資料をみると、鈴木氏や安蒜氏が指摘するように、おおそ石核側面もしくは背面に大きな剥離面か礫面をとどめる資料が多く確認できる。その共通項を除けば、石核背縁を形成する資料、側面への調整を施す資料、石核側面調整や背縁形成が認められない資料、打面調整の有無など、かつて堤氏が指摘したように、資料ごとの変異が多様に認められる（堤前掲）。そうした特徴は、石材の別なく確認できる。

こうした特徴から判断するに、素材には小ぶりの原石、原石をいくつかに打ち割ったもの（含む分厚い剥片）、の2種が採用されたと考えられるが、横田遺跡と市之関前田遺跡出土の接合資料は、そのような所見を裏付ける資料といえる。いずれの接合資料も、厳密には細石刃石核と確実に認定できる資料を含まないが、市之関前田遺跡では、剥片素材の細石刃石核1点、大きな剥離面をとどめる細石刃石核1点が検出されており、これらの接合資料を構成する各資料に類似するものが、細石刃石核の原形として利用されたと考えていいであろう。

ところで、このタイプには、打面再生剥片として認識できる、石核を輪切りにしたような剥片が伴う場合がある。出現頻度も低いわけではないし、遺跡ごとの細石刃の長さの変異（栗島1993、2003）も考慮すれば、打面再生も必要に応じて施されたと考えていいだろう。

剥片石器とその素材供給：伴う剥片石器には、スクレイパー、RF/UF、そして礫器（もしくは石核）がある。この点については、かねてより、伴う剥片石器が不定形であることが指摘されてきたが（織笠1984など）、そうした傾向がある一方で組成上はおおむね伴うことから、器種組成上は構成要素のひとつであると理解しておくべきである。ただし、これらの素材を供給した石核の存在は不明瞭であることも、同様にかねてから指摘されている点であり（織笠前掲、仲田2003a・bなど）、注意すべき点である。このうちでも、細石刃石核調整剥片類を利用した資料も存在することが確認できることは、細石刃石核を準備する／再生する過程で生じる剥片類を利用した痕跡であり、細石刃製作と剥片石器の素材供給がある部分では一体化していると評価できる。

ところで、大林遺跡遺跡出土の細石刃石器群に対する評価で、田村隆氏は細石刃石核の調整剥片が利用されているほかに、長幅比が1:1になる矩形の剥片がこれら剥片石器の素材となる、とした（田村1989）。具体的には、任意に打面転移を行うもの、打面と作業面を入れ替えるもの、分厚い剥片の腹面を打面として剥片の周縁に沿って剥片剥離作業を行うもの、という剥離技術からなる「構成2」として、「構成1」の細石刃製作、「構成3」の礫器製作とは別立ての要素と位置付けた。同じく、萩谷千明氏もこれらの剥片石

器の素材供給に、細石刃製作と一体化したものと、90度の打面転移を含む大形の一群とがあると指摘した(萩谷 1994)。この点についての詳細は、利用石材の検討と絡めて後述したいが、多くの石器群で、明確な剥片剥離工程を確認できない状況である。

利用石材：利用石材については、橋本氏の指摘にあるとおり、細石刃には黒曜石を多用する。黒曜石以外では、チャート、凝灰岩などが用いられるが、特に武蔵野台地や相模野台地といった南西関東では黒曜石主体で若干の非黒曜石利用のものが伴う場合が多い。

ところで、礫器は非黒曜石利用であることはともかくとして、RF/UF についてはどうであろうか。相模野台地の石器群において、それらの利用石材の傾向を確認すると、細石刃に利用する石材と共通する事例が多い。B0 層準においては実に3分の2以上が細石刃に利用される石材を用いており、残りでも礫器と共通する石材を利用する。実際に、細石刃石核の打面再生剥片を利用した剥片石器や細石刃石核の調整(もしくは細石刃石核素材生産)の過程で生じた剥片を利用していると思われる接合例も存在すること、礫器から剥離される剥片と同じ特徴をもつ剥片を素材とするものが確認でき、むしろ剥片石器の素材を供給する目的で、独自の剥片剥離を行っている場合は極めて少ない状況である。ただし、もちろん細石刃にも礫器にも利用されない石材を用いている例もあり、それらは細石刃と共通する石材を利用したものと比べれば明らかに大形であると同時に、背面構成の特徴からして、礫器製作とも関連しないと考えられる。したがって、明確に剥離工程を確認するのは難しいとはいえ、その存在は考慮すべきである。

とはいえ、多くの石器群において検出される傾向が強いのは、細石刃と共通する石材利用の小形の一群であることは注意すべき点である。石器製作構造は、図1下段のように考えておく。

3 石材消費からみた遺跡のあり方

次に、遺跡のあり方を検討していきたい。かつて、打面形成削片の組成を比較することで、遺跡における細石刃製作工程の把握が可能であると述べたことがある(島田・山科 1998)。これはあくまでも細石刃製作工程の全体的な位置付けにかかわる議論としては有効であるが、個々の遺跡での詳細を論じるには、不向きである。ここでは、手掛かりとして、石器群組成と主に細石刃製作にかかわる接合資料を中心に検討し、石材の消費という側面を捉えつつ、それぞれ遺跡のあり方を描き出してみたい。

3-1 道東：十勝平野を中心に

道東における尖頭器類を伴わない細石刃石器群の遺跡構成の特徴は、すでにかつて置戸安住遺跡B・C地点の再整理報告でも指摘したが、石器組成上は細石刃石核打面形成削片の量的な多寡を判断材料として、打面形成までの工程が集中的に現れる原産地遺跡と、後半工程、特に細石刃製作が主な製作と捉えることのできる遺跡とに分けて認識することが可能となる(島田・山科前掲)。同様に、石刃/縦長剥片とそれらを供給した残核の間にも、札滑型細石刃石核とは逆のかたちで、数量的なアンバランスが確認できる(木村前掲：ただし、残核約100点に対する石刃/縦長剥片約3000点=残核あたり30点という計算結果が多いか少ないかは議論の余地がある)。したがって、札滑型は原産地での石核原形の製作とその搬出、峠下型に関しては、原産地では素材となる石刃/縦長剥片の相当数の製作と搬出が想定でき、搬出先の遺跡では、札滑型は細石刃剥離の工程がよりはっきりと表れ、峠下型では石核原形の製作と細石刃剥離が表れるものと想定できる。

ところで、こうした所見は、認識しやすい原産地直下に立地する遺跡のデータに基づいたものである。ここで、近年資料が増加しており、なおかつ地形的に一つの単位として捉えることも可能である、十勝平野を例として、原産地遺跡とは異なると言っている遺跡の状況を検討し、道東における遺跡構成考察の材料としてみたい。

暁遺跡第1地点は16箇所の石器集中部が検出されたが、かつて山原氏が細石刃製作技術を述べるなかで整理したように、細石刃の製作は、より細石刃剥離の工程に限定的であり、残核等に観察できる石核調整

の痕跡も、細石刃剥離をスムーズに行うために施されたものであろうという所見がある（山原 1998）。石器組成においても、多数の剥片が存在するなかで、札滑型細石刃石核の打面形成削片は少なく、いわゆるファーストスポールは頁岩製の 1 点のみであり、おおよそ両面調整の状態よりも、すでに打面が形成された状態で持ち込まれた資料が遺跡に残存している（木村 1995）。峠下型もファーストスポールよりもセカンドスポールが多いことから、同様にすでに打面が形成された状態で持ち込まれたものが多い状況である。ただし、スポット 4 とされる石器集中部には円礫状態の原石にまでおよそ復元できる接合資料があり、淘汰された礫面を持つ剥片石器の存在もことから、山原氏が指摘したように、露頭ではない遺跡近傍から石材を補給した状況が確認できる（山原前掲）。

ところで、16 箇所ある石器集中部を再度確認すると、札滑型と峠下型の集中部ごとの出土に若干の傾向が指摘できる（表 1）。既に山原氏も触れているが（山原前掲）、峠下型細石刃石核および打面形成・再生削片は遺跡発掘区画の南側、より具体的にはスポット 8 とされる石器集中部よりも南側で検出される傾向が強く、札滑型に関連する資料は、スポット 1、8、12 のそれぞれで峠下型とともに出土しているほかは、おおよそ発掘区画の北側の集中部群に痕跡をとどめている傾向がある。そうした出土状況に加え、それぞれの石器集中部の出土石器総数を見ると、峠下型細石刃石核を出土する集中部と出土しない集中部とで、点数にも若干差があることが指摘できる（ただし、比較的出土石器数が多いスポット 3 と 5 の集中部が未発掘区まで広がっていることは注意すべき点である）。とりわけ、スポット 6、7、13 および 16 は出土した石器総数がほかの石器集中部に比べて少なく、かつ札滑型に相当する細石刃がほとんどであるのに対し、峠下型細石刃石核が検出されたスポット 1、8、12 は出土点数の最も多い集中部である。単純に言って、峠下型細石刃石核を保有する石器集中部は石器総数が多く、札滑型細石刃石核を保有する石器集中部は石器総数に大きな差が認められる場合がある、ということになる。

同じ十勝平野のいくつかの石器群をみると、細石刃石核が検出されていない川西 C 遺跡では、石器組成上は細石刃と数点の剥片石器および札滑型の石核調整剥片からなる。細石刃の形態も札滑型に相当する資料といえる。南町 2 遺跡ではやはり形態的には札滑型に相当すると思われる細石刃と小形の札滑型細石刃石核が検出されている。どちらも石器製作工程はかなり限定的かつ小規模で、札滑型細石刃石核による細石刃剥離、石核調整、彫器の彫刻刀面再生程度と判断できる。暁遺跡第 1 地点における、スポット 6、7、13、16 といった石器集中部と似た構成であると言っていいだろう。近年、山原氏によって再整理された上似平遺跡 A ブロックも同様の石器群と捉えていいと思われるが、細石刃石核の存在を示す接合例は、すでに細石刃石核の状態と遺跡に持ち込まれ、細石刃剥離と側面調整が行われたあとに、搬出されたことを示すものである（山原 2002）。点数に開きがあるとはいえ、細石刃と側面調整剥片が存在する川西 C と、器種組成上は類似し、複数遺跡にわたる横断的な細石刃石核の持ち運びを示すと評価できるだろう。

一方、峠下型細石刃石核で比較できる十勝平野の遺跡は、暁遺跡第 4 地点が好例である。第 4 地点では、5 つの石器集中部が検出され、いずれも厳密に縄文時代の石器群との分離は難しい状況であるが、スポット 1 とされる石器集中部を中心に、淘汰された礫面を持つ原石利用の、峠下型細石刃石核に関する接合例と小形の石刃／縦長剥片剥離の接合例が残されている（また、スポット 3 では、同じような原石を両極打法によって分割した船底形石器の接合例があるだけでなく、両極打法による分割礫素材の幌加型細石刃石核や、その調整剥片の接合例がある点も注意したい）。このことから、第 1 地点のスポット 4 と同じく、遺跡近傍で採取したであろう原石を利用した剥片剥離が確認できる。第 1 地点と共通するのは、峠下型細石刃石核とその打面形成削片がともに複数、それも接合例を伴いながら出土する点である。

この状況を整理すると、札滑型は石器集中部ごとで出土石器の点数に著しい差が生じる場合があることに加え、打面形成削片と細石刃石核との接合例が非常に少ない点が特徴であり、峠下型は石器点数・接合例が相対的に多く、細石刃石核を組成する場合には必ず打面形成削片を組成するのが特徴といえる。すなわち、山原氏が指摘した、搬出先への余力を持った状態での複数遺跡を横断するような消費・持ち運びが

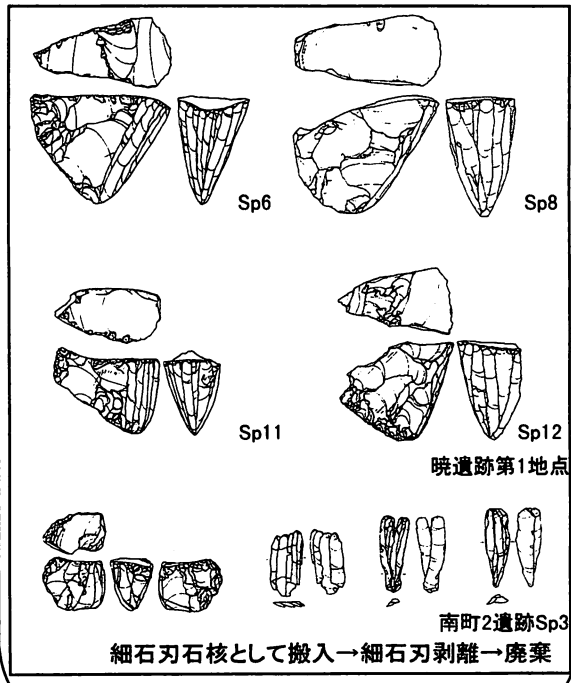
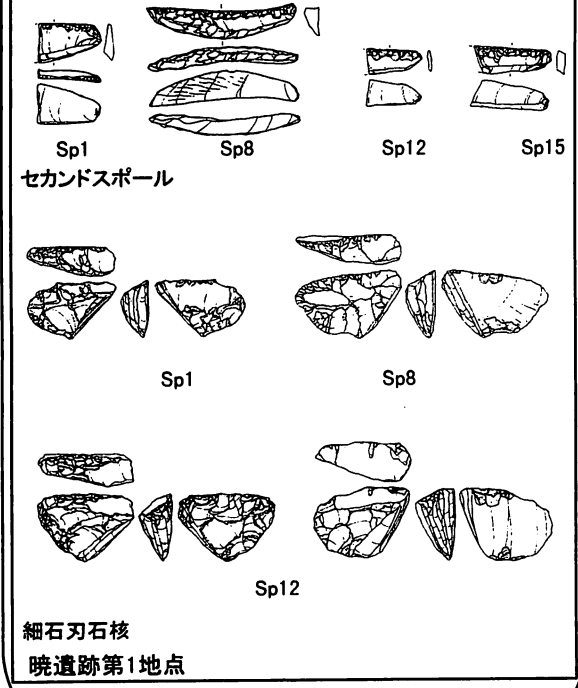
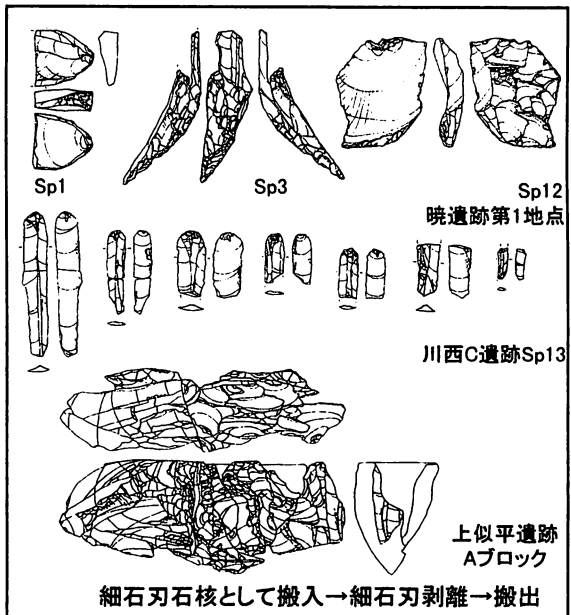
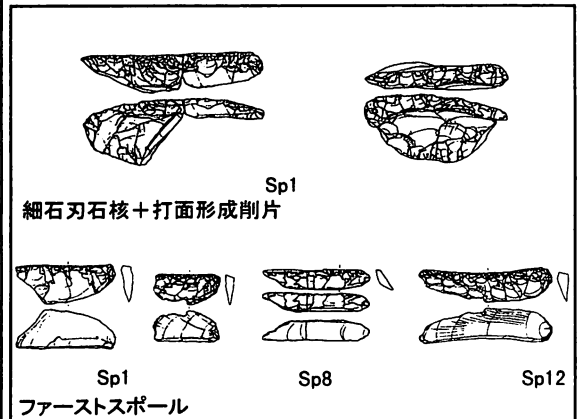
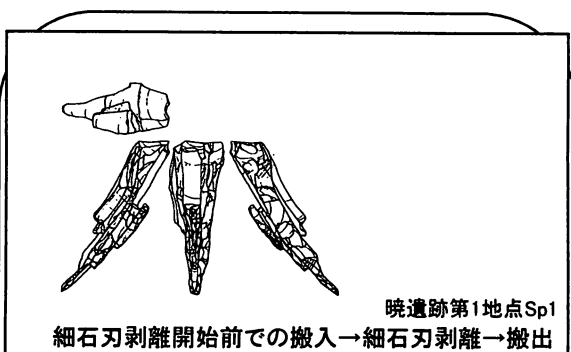
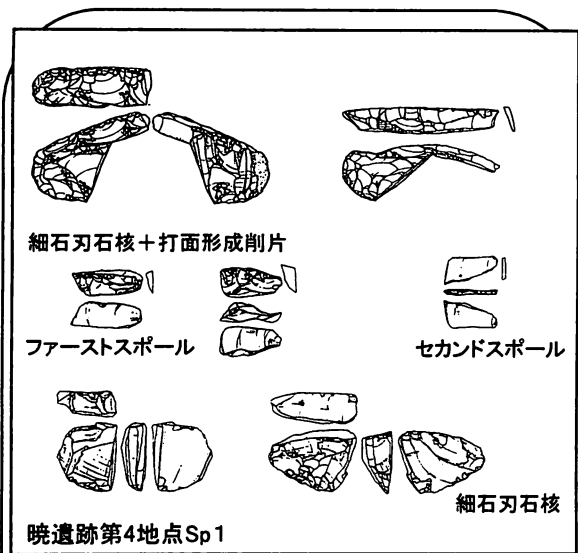
確認できる札滑型に対し、常に細石刃石核に廃棄の一群と搬出される一群とが確認でき、場合によってはそれに新たな製作を含む峠下型、という異なる状況が確認できる。両型式の石器製作構造は既に確認したとおりだが、札滑型の資料群は実際に側面調整剥片利用のRFや削片素材の細石刃石核の存在から、コンパクトな石器製作構造が発揮されていると評価できる(注2)。複数遺跡に渡る横断的な細石刃石核の持ち越しと消費は、そうしたコンパクトな製作構造ゆえに、ということではなく、複数遺跡にわたる横断的な細石刃石核の持ち越しを必要とするから発揮されたのであり、その点で一部に石材補給が観察でき、かつ細石刃石核が廃棄の一群と搬出の一群とで常に構成される峠下型は、石器製作構造の特徴からも、札滑型よりも相対的に一定の石材補給の機会を前提としていると評価できる(図2、注3)。このことから、両型式が何らかの石材入手の条件によって選択されていた可能性を指摘したい。第4地点の接合資料のあり方は、峠下型細石刃石核のそうした局面を示す資料であろうし、十勝平野の事例ではないが、常呂川流域上流部の緑ヶ丘B遺跡でも、石刃/縦長剥片剥離を行った可能性と峠下型細石刃石核の補給の可能性が指摘されている(山田前掲)。

なお、藁科哲男氏らによる黒曜石産地推定分析の結果によれば、第1地点における札滑型関連の資料群(細石刃石核、打面形成削片、細石刃、石核側面調整剥片など)は白滝産黒曜石、峠下型細石刃石核は美曼含む十勝系黒曜石と置戸産黒曜石を利用する傾向があり、第4地点ではスポット3の幌加型と峠下型石核1点ずつが白滝産であるほかは、すべて美曼含む十勝系黒曜石によって構成されることが判明している(東村・藁科1995、北沢1996)。札滑型がより遠隔地の白滝産黒曜石を利用し、峠下型が複数産地を利用しているという点では、筆者の解釈に好都合ではあるが、この結果について山原氏は、「曉遺跡に最も近い原産地である十勝三股においては大型品の大量生産が可能な量の大型原石の獲得が困難な状況にあり、このような産地間の特徴が石材選択に表れている」と推測している(山原前掲)。そうした黒曜石の産出状況も含め、札滑型においても、複数遺跡にわたる横断的な細石刃石核の持ち越しが極端に観察できるわけではないこととあわせ、この両型式に関する解釈はさらに検討が必要である。

3-2 本州地方日本海側～古利根川以北

この地域における遺跡構成については、佐藤宏之氏(佐藤1992)、稲田孝司氏(稲田1996)、加藤博文氏(加藤1996)、佐野勝宏氏(佐野2002)など、すでに示唆に富む先行研究が蓄積されている。表2にいくつかの石器群組成をカテゴリーで示した。調査面積や精度が一定ではないので、残滓類の多寡をダイレクトに議論できるかどうかは難しいが、先行研究でも指摘されているとおり、第1の特徴として、石器総数に著しい差が認められること、次に、細石刃製作工程について、道東と同じように細石刃剥離打面の確保で二分して捉えてみると、細石刃製作工程について、やはり前半工程に重点を置きながらも全工程を含む場合と、後半の工程のみが現れるような場合とに、組成上は分かれてくる。こうした様相は、太平洋側だけでなく、東北地方日本海側にも確認できるあり方で、女川相当層の広がりも考慮すれば、原則として石材補給を行わないものとみなせるような状況である点は注意したい。この点は、後述するが、先行する東山型ナイフ形石器(会田1993)、杉久保型ナイフ形石器(沢田1994)と類似した状況であるといっていだろう。

このような特徴を接合資料にしたがって確認すると、細石刃石核原形の製作から細石刃剥離までの一連の工程が接合資料で確認できるのは角二山遺跡のみである(削片同士の接合例が含まれ、組成上で打面形成削片が一定数確認できる荒屋遺跡も同様に捉えていだろう)。これに対して、後野B、白草、木戸場、東峰御幸畑西、大網山田台No.8では、接合資料が確認できるとは言え、ひとつの接合資料によってすべての工程を確認できるわけではない。また、接合資料が存在しない石器群においては、石器製作活動自体が低調であることは、先行研究においても確認されてきたところである。後野Bと白草では、複数の細石刃石核原形もしくは細石刃石核が細石刃製作に利用されたと考えられる状況を示すが、白草では石核側面の調整剥片の接合例と細石刃同士の接合例がある一方で、細石刃石核が出土しておらず、連続的な細石刃剥



峠下型細石刃石核

札滑型細石刃石核

図2: 十勝平野における細石刃石核の消費 S=1/4

離＝細石刃石核の消費に加え、持ち込まれた細石刃石核原形→打面形成および側面調整→細石刃剥離、といった状況が確認できる(図3)。同じことは、木戸場における小形の細石刃石核と、RF 素材となっている石核調整剥片の接合資料にも確認できるところである。この点については、細石刃石核原形に細石刃の供給源と剥片石器の供給源を一本化している石器製作構造を有していながら、実際には細石刃剥離と剥片石器の素材供給とを複数の細石刃石核原形によって支えていた、つまり複数の細石刃石核原形を、剥片石器素材を供給する石核と細石刃石核として組み合わせて、時間差を持たせながら消費していたと言えるだろう。なお、遺跡ごとに荒屋型彫器が大きめの資料と小さめの資料の双方でセット関係をなし、細石刃石核の側面にかかわる剥離・調整の状況が異なる＝素材として供給される剥片が石核調整の段階差に応じたもの、という絹川一徳氏の指摘は(絹川1996)、やはりこうした時間差をもたせた消費によって現れたものと思われる。

一方で、単体もしくはそれに近い状態で出土する資料の存在がある。器種としては細石刃石核、石核調整剥片、荒屋型彫器などだが、単体ということで石器群としての評価は一見難しいように思われる。しかし、角二山や荒屋を除き、製作工程が限定的もしくはそれ自身が確認できないかそれに等しく、原則として石材補給を行わないと捉えることもできるわけであるから、むしろ単体であることも評価の材料といえる。各遺跡における剥片石器に、搬入品を含むことも合わせて考えると、それがまさに単体で遺されたものと考えることができる(注4)。

まとめると、①特定場所での集中的な細石刃石核原形の製作→搬出、②搬出先での細石刃製作/剥片石器製作における石材時差消費(石材補給なし)、と捉えることができ、単体出土資料やそれに近い状態の資料については、そうした石材消費の特に末端での一局面と捉えておきたい。

3-3 南西関東

南西関東については、まずは相模野台地のB0層準の資料群をもとに検討してみたい。石器群の構造と遺跡での石器製作活動については、すでに仲田氏の先行研究があるが(仲田2003a・b)、再度、剥片石器の石材利用とその供給、また接合資料の有無から検討していきたい。

表3に、各石器群の細石刃関連資料、礫器、剥片石器の、それぞれ利用石材と点数を示した。既に指摘した石器製作の構造にしたがってみると、礫器製作の痕跡が色濃く残る場合はともかくとして、細石刃の出土点数の占める割合が高い遺跡の場合、組成上は細石刃製作にかなり偏った状況を示し、剥片石器も細石刃と石材が共通することが理解できる。黒曜石以外の石材種も少ない状況である。この石材種が増えると、同時に非黒曜石利用の剥片石器も増加し、非黒曜石の細石刃を含む場合がある。非黒曜石の細石刃を含む場合には、黒曜石製の細石刃の点数も低下することが注目される。こうした特徴を踏まえると、①細石刃石核＝原則黒曜石製のみ：細石刃製作に集中(石材は黒曜石+1～3種の非黒曜石石材)、②礫器製作に集中、③出土石器総数が100点以下：製作痕跡そのものが乏しいか相対的に小規模、④複数の細石刃石核がそれぞれ黒曜石、非黒曜石製の双方からなる：一定量の細石刃製作と非黒曜石利用の剥片(石材は黒曜石+多種の非黒曜石石材)、という4つのパターンとして認識できる(表3で二重線で区切ったそれぞれが、上から順に①～④に相当)。

①あるいは②といったパターンが、石器製作という側面では、それぞれもっぱら細石刃あるいは礫器の製作に重点を置いており、石材種の構成も単純なわけであるから、より単位的な構成と考えることも可能であろう。とすれば、④という複合的なパターンは、(1)細石刃と礫器の製作とそれらを利用した生産活動が同時に行われることで形成された、(2)細石刃あるいは礫器の製作とそれらを利用した生産活動の一方が行われた後に、もう一方の生産活動が上書きされて形成された、(3)その両方を含む、という3つの背景を想定することができる。考古学的にそのいずれかを判定するのは極めて難しいわけだが、いずれにせよ石器組成から議論できる範囲では、規模の大小はあっても、④のパターンは①と②のパターンが示す石器製作を含む生産活動が行われた場であることは確かであろう。

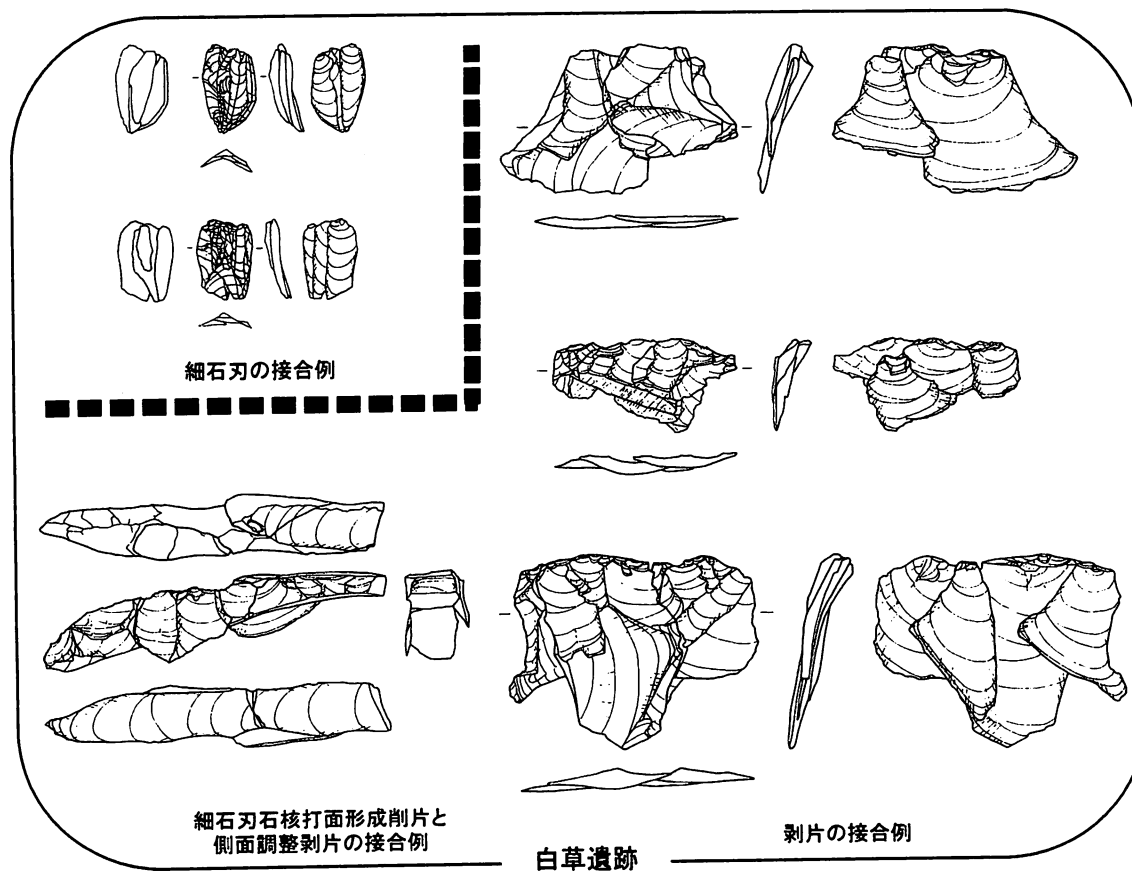
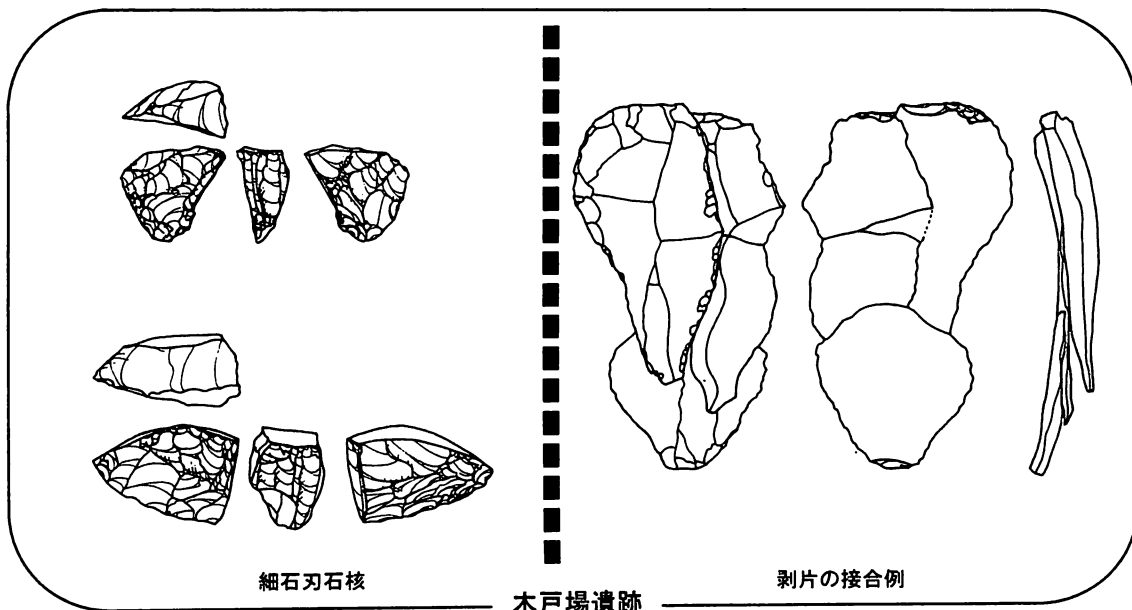


図3: 複数の細石刃石核・細石刃石核原形が製作工程を違えながら消費されていたことを示す接合例 S=1/2

表3: 相模野台地の細石刃石器群(B0層準)

遺跡名	MB/MC	石材	礫器	石材	Tool/FL	石材	接合1	接合2	接合3	接合4	接合5	接合6	接合7
上草柳第1IA	103/5				2/101		2						
					0/6	2	1						
かしわ台駅前I	132/7				9/248		1	1		2	7		
	9/1	2	1	1	2/1	2							
サザランケNo.12 IIb	67/12				13/135		9				1		
			5	2	0/1	1							
用田鳥居前I 文ブロック1	63/1				0/128						1	1	
					0/2	2							
用田鳥居前I 文ブロック2	121/3				0/138		1			1	2		
			1	1	0/13	2						1	1
上野1・Ⅲ・I群	203/6				19/214		1					2	
			1	1	4/55	5	1					1	
上野1・Ⅲ・II群	96/5				27/120						1		
	1/0	1	2	1	1/48	3							1
代官山II	6/3				2/339			1				1	
	6/1	3			9/71	5						1	1
台山ユニット2	287/8				10/252								
	1/0	1	1	1	12/151	5							1
上野1・Ⅲ・Ⅲ群	4/0				1/23								
			14	2	0/504	2							10
草柳中村	11/0				14/68							2	
					1/1	1							
杉久保蓮谷	29				0/17								
					1/4	2						1	
三ノ宮・下谷戸 Ⅲ文ユニット2	6/1				3/21								
	1/0	1			0/0								
栗原中谷	4/0				0/5							1	
					0/1	1							1
用田鳥居前I 文ブロック3	1/0				0/7								
					0/9	5							
台山ユニット1	27/3				9/29								
	1/1	1	2	2	4/35	7	1						
長堀北Ⅲ	6/0				6/33								
	1/0	1			1/26	6							
三ノ宮・下谷戸 Ⅲ文ユニット1	750/31				114/1131		1	1		4			
	68/4	8	8	5	68/1598	16						3	7
上草柳第3中央	91/6				2/64		1						
	5/2	1			14/229	6			1			3	1
報恩寺	63/6				16/117		1						
	5/7	1	10	2	26/298	5				1		4	6
上草柳第1IB	42/2				4/101								
	2/3	3	1	1	7/107	5	1					3	1

注: 上段は黒曜石、下段は非黒曜石資料

MB/MC: 細石刃の点数/細石刃石核の点数

Tool/FL: 剥片石器の点数/剥片・碎片の合計点数

石材は、非黒曜石石材の種類を合計したもの(上段=黒曜石は空欄)

接合1~7は、接合例の点数、1~7の内容は次のとおり。

1: 細石刃石核+調整剥片

6: 剥片+剥片

2: 細石刃石核+細石刃

7: 剥片+残核(礫器含む)

3: 細石刃石核+調整剥片+細石刃

4: 調整剥片+調整剥片

5: 細石刃+細石刃(調整剥片+細石刃含む)

ところで、上草柳第1遺跡第I文化層AブロックとBブロックの関係は、この点についてのひとつの局面を示す例である。Aブロックはもっぱら細石刃製作に集中し、Bブロックでは細石刃の製作と礫器製作もしくは細石刃製作とは連動しない剥片剥離作業が行われている。また、報告者である堤氏も注意しているが、より単純な石材種（個別別資料数）構成を示すAブロックに対し、石材種（個別別資料数）がAブロックよりも多いBブロックという状況で、両ブロックをあわせて考えれば、より④のパターンをよく示す例である。報告中で0b2とされた個別別資料（産地推定分析では産）はブロック間で接合しており、近接した時間で両ブロックが形成された可能性が高い。ただし、ブロック間接合はその1点のみであることや、黒曜石の個別別資料がおおよそ産地推定分析で産地に対応する傾向に基づけば、ほとんどの個別別資料がそれなりの数で共有されるわけではない点から、時間的なズレも想定可能ではある。いずれにしても、黒曜石の消費に応じての、チャートや頁岩といった石材による補完を行ったと考えることができる。

その点で、①のパターンを示す場合にはかしわ台駅前I文やサザランケNo.12Ⅱb文のように、搬出された資料の存在をうかがわせる接合例、④のパターンを示すなかでは、三ノ宮・下谷戸Ⅲ文、報恩寺、上草柳第3地点中央、上草柳第1地点I文Bブロックで、細石刃製作にかかわる接合例のほかにも、非黒曜石で細石刃製作と関連しないような接合例を含む点に注目したい（図4・5）。こうした例は、一部の遺跡やブロックでまさに黒曜石に大きく依存する石器製作が行われる一方で、別の遺跡やブロックでは黒曜石消費の一局面で非黒曜石石材による代替が行われた事例と考えていいだろう。

踏み込んだ解釈をすれば、①のパターンを示す場合には、黒曜石の消費がもっぱらである状況＝その場で使い切る黒曜石製細石刃石核と次の遺跡やブロックへと持ち運ばれる黒曜石の存在が確認できることから、黒曜石消費のはじまりもしくは比較的早い段階として捉えることができる。一方、④のパターンでは黒曜石の消費自体は、出土点数・接合例ともに少ないことから①のパターンよりも少ない度合いであり、逆に非黒曜石利用の細石刃製作および剥片石器製作の痕跡は接合例の存在からよりはっきりと捉えられる。したがって、黒曜石の消費に応じた補完石材としてもたらされた、各種非黒曜石石材の消費の基点あるいは中心となった遺跡・ブロックであると捉えることができるだろう。

同様の事例は武蔵野台地においても確認できる状況である。横田遺跡、新山遺跡、柳戸遺跡、西之台B遺跡、下里本邑第2地点の石器群などは、細石刃製作に黒曜石のみを利用した石器群として捉えることができるし、逆に、非黒曜石利用で細石刃製作の接合例と細石刃製作とは関連しないと思われる接合例のセットは、下耕地遺跡やもみじ山遺跡ブロック1号、同ブロック2号などで確認できる。また、黒曜石多用ながら、少数のチャート製細石刃（もしくは細石刃石核、その打面再生剥片）を伴う事例は決して少なくなく、廻沢北遺跡、下里本邑遺跡（礫床）、神明山南遺跡、田無南町遺跡、はけうえ遺跡、新橋遺跡、御殿山遺跡、東京天文台構地内遺跡などで確認できる。ここでは出土状況から、相模野台地の石器群のようなデータを示すことはできないが、非黒曜石の接合資料を手掛かりとした場合、黒曜石消費を補うようなかたちで非黒曜石製石器が製作・利用されていると捉えることができる状況は変わりがない。

4 先行石器群との比較：本州地方を中心に

最後に、これまでに確認してきた遺跡のあり方を、先行する石器群のそれと比較していきたい。冒頭でも触れたが、先行研究の多くは、細石刃石器群＝外来の石器群としての解釈・評価が多い一方で、先行する石器群における研究ではたとえば山下秀樹氏によるブロック数と出土石器数の相関関係で、南関東と東北日本では違いがあることの指摘（山下1991）、さらに遺跡間関係についての議論では、ナイフ形石器の大別型式に対応するような違いが指摘されてきており（島田2000、ただし会田1993、山口1994などに基づく）、ナイフ形石器の大別型式の分布とほぼ重なりあう細石刃石器群の型式分布と、これまでに述べてきた遺跡のあり方からすれば、先行石器群との比較は、細石刃石器群の型式分布を理解するうえで不可欠のものとする。すでに、佐藤宏之氏によって「ナイフ形石器に槍先形尖頭器が介在する過程は、連続的

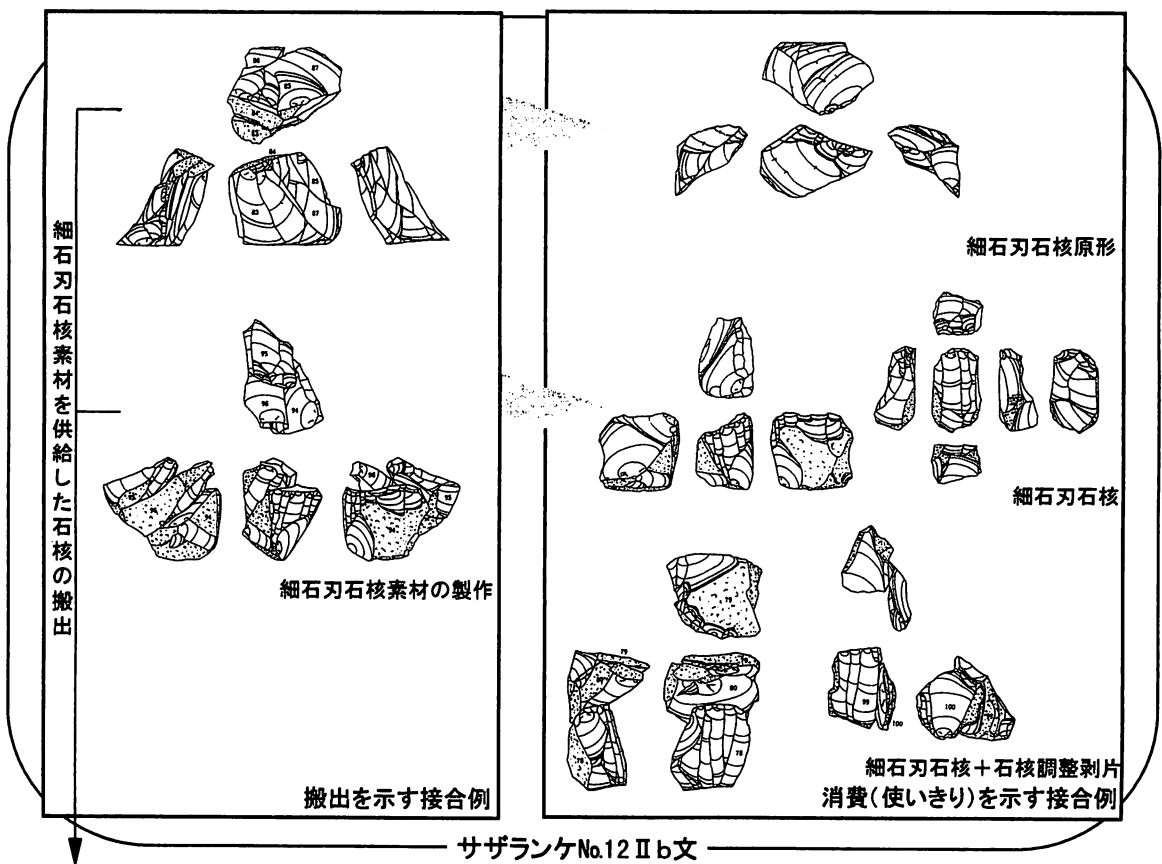
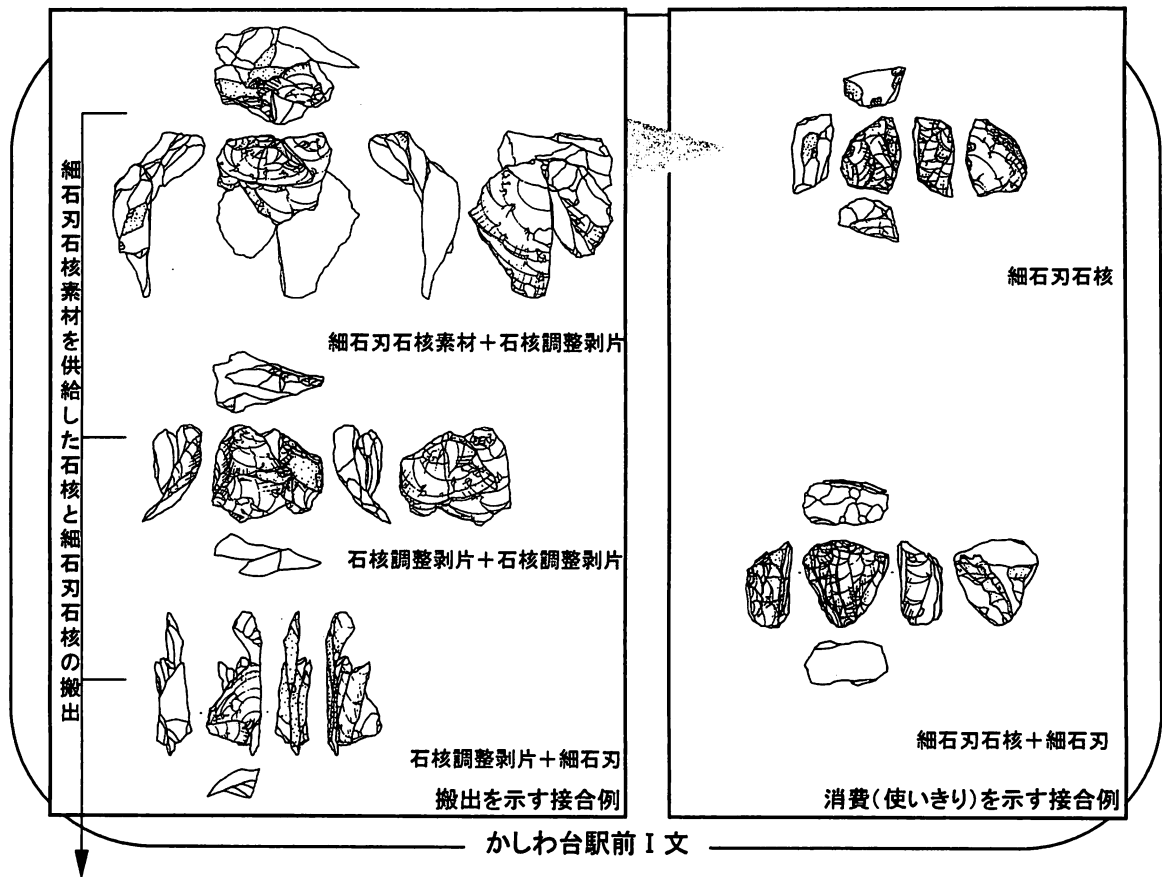
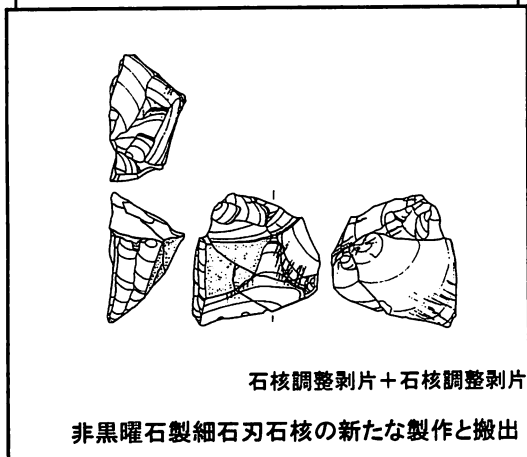
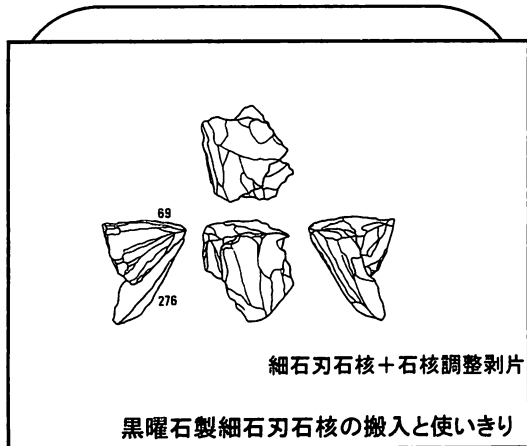
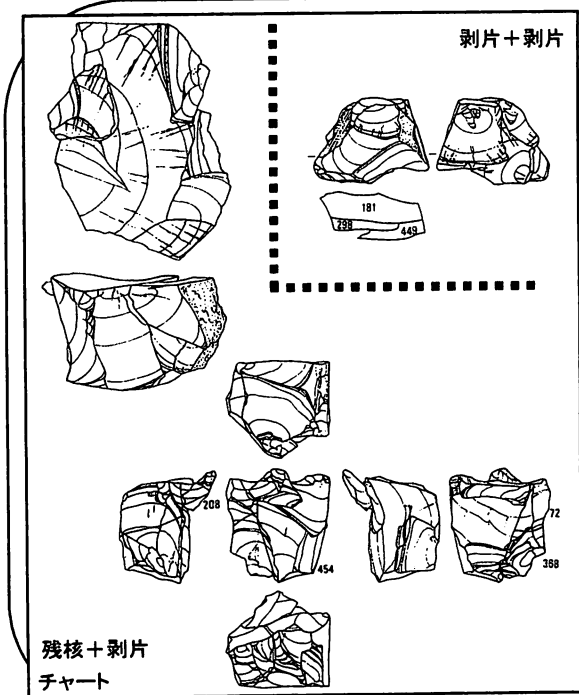
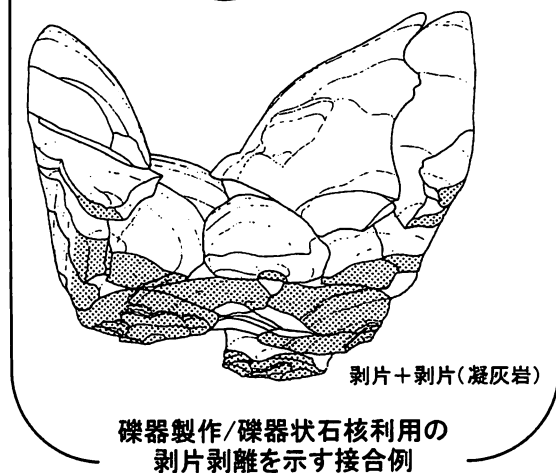
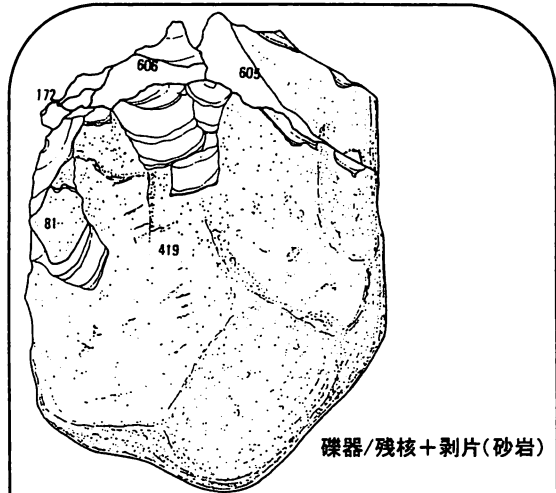


図4: 南西関東における黒曜石消費の事例(1) S=1/2



細石刃製作を示す接合例



細石刃製作と関連しない石器製作を示す接合例

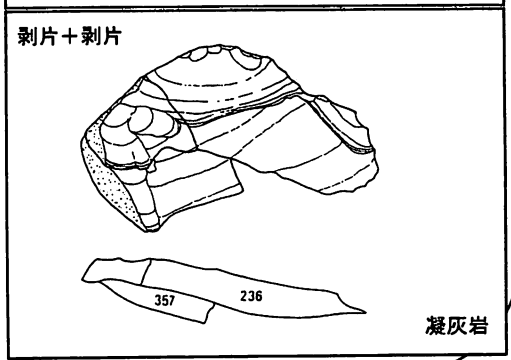
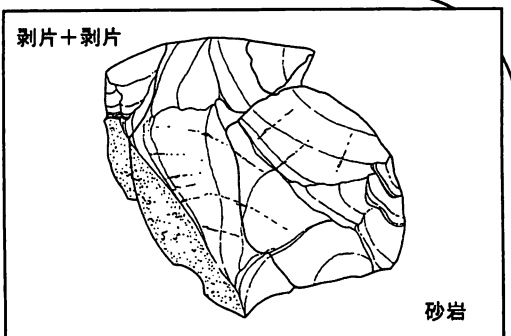


図5: 南西関東における黒曜石消費の事例(2)と非黒曜石石材消費の事例(報恩寺遺跡を例として)S=1/2

かつ漸進的であるが、細石刃の出現は（中略）一見すると伝統の断絶と見えるが（中略）行動論上の視点からみれば連続的である」と指摘されているが（佐藤 1993）、実際に比較した事例がないため、ここでその比較をすることは無益ではないだろう。

4-1 本州地方日本海側～古利根川以北

ここでは、東山型ナイフ形石器、杉久保型ナイフ形石器の石器群について、触れていきたい。既に会田氏や沢田氏の先行研究によって、お仲間林遺跡を実例とする原産地遺跡において多量の石刃／縦長剥片の製作と搬出、搬出先では彫器あるいは石刃／縦長剥片のエッジ再生が確認できる一方で、搬出先での新たな石刃／縦長剥片の製作はほとんど行われなことが指摘されている（会田 1993、沢田 1994 など）。実際に、残核を含む接合例はお仲間林遺跡に多量に確認できるほかは、小出Ⅳ遺跡、横道遺跡、中土遺跡に確認できる程度であり、杉久保型ナイフ形石器の石器群においては、むしろ神山型彫器の刃部再生にかかわる接合例が多数確認できる以外では、ほとんど接合例がないといってもいい状況である。こうした状況を石器組成とあわせて考えると、お仲間林遺跡を除いて、多くの場合は石刃／縦長剥片製作が行われたとしても作業量としてはかなり少ないと予測できることから、お仲間林遺跡などで製作された石刃／縦長剥片を一定数搬出・携行するなかで、原則新たな石材補給を行わず、石刃／縦長剥片そのものやそれらを利用した彫器の刃部再生を行いながら、生産活動が可能となる石器装備を維持するという姿を捉えることができる。石材組成上は黒曜石が最多ながら、津南町の下モ原Ⅰ遺跡と井尻 A 遺跡のあいだで確認された遺跡間接合は、異なる段丘面を往復するような順序で複数の接合例が確認された事例であるが、いずれも彫器と彫刻刀面作出削片であることが、上記した特徴を如実に物語っているといっていだろう。問題は利用石材だが、上ノ平遺跡 A 地点にも凝灰岩製の、より初期工程の石刃／縦長剥片製作を示す接合例が存在することもあわせて、適宜石材補給を行ったとみるべきで、中土遺跡にも同様の接合例がある。また、横道遺跡においても原石の表皮を打ち剥がした状態の接合例もある。しかし、それにしてもこうした事例が決して多くはないこと、そしてそれが東山型ナイフ形石器、杉久保型ナイフ形石器、湧別技法を持つ細石刃石器群と、編年的な標識資料を越えて同様に観察されることが重要なのであり、東北日本における硬質頁岩多用の石器群の大きな特徴といえそうである。

4-2 南西関東

再度、相模野台地でのあり方を確認すると、前章で設定した4つのパターンにおいて、①の場合には必ず黒曜石利用の細石刃製作に関連する接合例を含むこと、④の場合には非黒曜石製の細石刃製作あるいは剥片石器製作を示す接合例が含まれ、石器群組成に占める黒曜石の比率は①よりも低い状況であった。この点をして、入手機会が限られる黒曜石に細石刃製作の大部分を依存する石材利用において、それら黒曜石の消費に応じた補完的な石材利用と考えた。同時に、接合例のあり方から、①には黒曜石の消費だけでなく搬出が確認でき、④には黒曜石の搬出を確実に示す接合例が存在しない一方で、非黒曜石の搬出を示す接合例を含むことが確認できた。

ところで、細石刃製作もしくは剥片石器製作に利用された非黒曜石石材をみると、相模野台地の石器群では、チャート、凝灰岩、ホルンフェルス、砂岩、安山岩などが比較的利用頻度が高い。これらの石材は、先行する石器群においても利用頻度が高い石材なので、この比較に重点をおきたい。

さて、そうした石材利用の極相といえる砂川期においては、島田和高氏の分析によって、「遺跡形成にあたって常時、搬入および消費されて」いる石材で、複数種の石材（黒曜石など含む）がそれぞれの遺跡で消費量を違えながら、「第1石材」「第2石材」「補助石材」として循環的に組み合わさることが指摘された（島田 1998）。そして大形流域遺跡が「地区内石材」の消費の基点になる傾向もあわせて指摘された（島田 前掲）。

細石刃石器群の場合は黒曜石がとりわけ高頻度で利用される＝「地区内石材」の消費をトレースすることが難しいため、単純な比較はできない。が、既にみたように複数の細石刃石核がそれぞれ黒曜石・非黒

曜石の双方から構成される④のパターンにおいては、搬入された黒曜石製細石刃石核の消費に応じて、非黒曜石利用の細石刃・剥片石器双方にわたる石材消費の一端が、接合例と石材種から想定した。これに対し、もっぱら黒曜石消費がはっきりと認識できる①のパターンでは、黒曜石の搬入、消費そして搬出を、接合例に基づき想定した。これは、黒曜石の消費は主に①のパターンを示す遺跡やブロックを基点として、1回の細石刃製作活動での使いきりを含みながら、次の遺跡・ブロックへと持ち越され、④のパターンを示す遺跡では非黒曜石利用による補完をみせながら使い切られる。そして④のパターンを示す遺跡・ブロックでは、非黒曜石利用の各種石器の製作が開始され、場合によっては次の遺跡・ブロックへと持ち越される（したがって、非黒曜石製の石器には一部に搬入品を含むことにもなる）、という遺跡のあり方として捉えることが可能である。

非黒曜石石材を循環的に多用していた砂川期と比較すると、細石刃石器群においては黒曜石が高頻度で利用されるため、黒曜石の消費の始まりと非黒曜石の消費の始まりとが大きくズレて現れる状況として違いを指摘できる。言い換えれば砂川期のような循環的石材構成ではなく、黒曜石消費を中心に置きながらも実際に非黒曜石による補完は、黒曜石消費のターミナル的な部分で初めて現れてくるのであり、そのズレの接点が④のパターンを示す遺跡やブロックとして残されているといえるだろう。そして、石器製作構造が細石刃製作と礫器製作の大きく二つの構成要素からなり、細石刃製作と関連しない剥片石器の製作（非黒曜石利用）がおおむね補完的であるという特徴から、非黒曜石利用の剥片石器製作の工程が遺跡間で横断的に捉えられない原因と考えられる。同時に、こうした遺跡群を形成する地形内で入手が難しい黒曜石に利用石材を依存するということが、島田氏の言う砂川期における大形流域遺跡のようなブロック数や出土点数に著しい格差を持つような遺跡を形成しない要因にもなっていると思われる。だが、④のようなパターンを示す遺跡・ブロックが、あくまでも非黒曜石の消費という点においては、その基点とも思える石材構成と接合資料のあり方を示すことから、砂川期における大形流域遺跡に相当するような遺跡との位置付けを与えることができるかも知れない。南西関東の相模野台地における細石刃石器群の極相での遺跡構成は、砂川期での地区利用のあり方に黒曜石依存という特徴が上書きされ、結果、循環的な石材消費と補給から、非黒曜石石材補給とそのタイミングがあくまでも黒曜石消費の程度に応じたレベルにとどめられた、と捉えておきたい（注5）。

4-3 道東

川西 C 遺跡にみられる En-a 下層の石器群は、遺跡内で石刃／縦長剥片生産を行った痕跡はない。同様に、広郷型ナイフ形石器が検出された広郷 8 遺跡も、検出された残核の形状がサイコロ状で、上白滝 7 遺跡で検出された接合例から判断するに、一連の剥離工程を行っていたとは考えにくい。したがって、原産地での全工程が現れる状況と原産地とはいえない遺跡での部分的な工程の現れ方、加えて川西 C 遺跡で石材補給を行っていないあり方は、とりわけ札滑型の遺跡のあり方によく似た状況ではある。ただし、川西 C 遺跡では白滝産黒曜石は検出されず、置戸産と十勝三股産黒曜石から構成されていた（近藤・藁科 1998）。

一方で、南町 2 遺跡スポット 1 出土石器群は、細石刃様剥片やスクレイパーの形態が嶋木遺跡出土石器群と類似する。石材は美曼を含む十勝系黒曜石（藁科・東村 1995）、安山岩、メノーである。接合資料はいずれの石材でも含むが、剥片が一様に小形であることから、安山岩製スクレイパーの接合例のような、刃部再生にかかわるものである可能性もある。いずれにしても、嶋木遺跡や共栄 3 遺跡等も含めて、今後該当石器群の遺跡構成にかかわる分析をしたうえで、検討する必要があるが、黒曜石産地別構成による限り、白滝産黒曜石はこれら先行石器群ではほとんど利用されない傾向がある。暁遺跡第 1 地点の残核型式に応じた産地構成とあわせて考えても、白滝産黒曜石の利用は、細石刃石器群、それも札滑型の採用と密接に関係しているように思われる（木村 1995）。その点もあわせて、今後の課題としておく。

5 まとめ

以上、北海道から関東地方までの細石刃石器群のある姿を切り取って、その石器製作構造、遺跡構成、先行石器群との比較を検討してみた。分析上扱いやすい石器群のみを取り扱った問題点に加え、接合例に対する過大評価は否定できないが、結論としては、以下のようにまとめられる。

本州地方日本海側～古利根川以北の細石刃石器群は、細石刃と剥片石器の製作が一体化したコンパクトな石器製作構造を示し、原則石材補給を行わないで、そのコンパクトな石器製作構造を複数の細石刃石核原形によって具現化していると捉えた。遺跡構成では、原産地的あるいは相対的に大規模な石器製作の痕跡がみられる遺跡と、出土石器数が少なく、石器製作が低調な遺跡からなり、先行する東山型ナイフ形石器群や杉久保型ナイフ形石器群とよく類似する遺跡構成を示す。

南西関東の細石刃石器群は、主に細石刃製作と礫器製作によって石器製作構造が成り立っている。石材は、信州系と神津島系黒曜石の安定供給を前提とし、非黒曜石石材の消費がみられる場合は、おおよそ持ち込まれた黒曜石製石器・細石刃石核の搬出が観察できないことから、黒曜石消費のターミナルにおいて非黒曜石石材の補給を行うと捉え、先行石器群の遺跡構成を下敷きにしながらも、安定した黒曜石供給によって変質しているとした。

北海道については、主に十勝平野のあり方から、札滑型細石刃石核と峠下型細石刃石核が、石材入手の状況に応じて選択されていた可能性を指摘した。先行する石器群との比較検討は、今後の課題としておく。

本稿は、2000年1月に明治大学大学院に提出した修士論文「関東以北の細石刃石器群の遺跡構成」を元にしてしている。この4年間で、修士論文執筆時に比べて状況は著しく様変わりし、改めて述べる必要のない部分のほうが多い状況ではあったが、本稿において論旨は変更していない。

最後に、末筆ではありますが、執筆の機会を与えてくださり、遅々として進まない原稿を暖かく待ってくださった堤隆氏に、深くお礼を申し上げます。

註

- 1：石狩低地帯以西のいわゆる道南地方については、柏台1遺跡の調査成果から、不定形剥片石器群との横断的な比較が必要と考えられ（佐藤2003）、本稿ではひとまず分析対象に含めないことにする。
- 2：ただし、山田哲氏が指摘するように、満足する細石刃剥離打面が形成された後にも、そうした構造性を発揮したかどうかは検討すべき問題である（山田前掲）。暁遺跡第1地点スポット5出土の接合資料は、打面形成以後の側面調整剥片がRFになることを示す接合例であるが、RF等の接合自体はほとんどない。札滑型の細石刃製作においては満足する打面が得られた後に打面再生などをほとんど施さず、もっぱら細石刃剥離を行う状況を考えても、札滑型の潜在的な製作構造を過大評価することは危険である。また、峠下型については、ここでは削片と細石刃石核の接合を目安にはしたが、削片が抜けきらない場合が多いことに加え、細石刃剥離が進行した場合に、削片との接合面が小さくなるから、接合そのものが難しくなると思われる。
- 3：これは遺跡近傍での石材採取ということのみならず、遺跡から遠方の石材産地へ容易にアクセスできたか、それらが容易に入手が可能な状況だったと理解しておく。
- 4：なお、大網山田台No8遺跡と東峰御幸畑西遺跡では、非硬質頁岩の接合例がみられる。佐野氏の指摘にあるように、これらの接合例は遺跡近傍で入手し、遺跡で石器製作に用いられたと考えられるが、現状では少数であり、どの程度の頻度で組み込まれていたのかということになると判断が難しいが、上記した時差をもたせた消費のなかで、おそらくは限定的に採用されたものであろう。今後、接合資料の有無は問わず、こうした資料を集めて検討する必要がある。
- 5：近年の黒曜石産地推定分析の積み重ねにより、信州系黒曜石、神津島系黒曜石、伊豆箱根系黒曜石の3者が、それぞれ利用されている状況が明らかになってきた（望月・堤1997、堤2003など）。産地の構成には、神津島系と信州系が共存しないなどの特徴が指摘されている（望月・堤前掲）。この結果から、信州から神津島にいたる広範な範囲に、黒曜石原産地

および非黒曜石石材の産地を含みつつ、日常的な活動と季節的な移住の範囲を持つ、との見解が示された（仲田 2003a・b、堤 2003）。黒曜石の産地構成と、先にふれた4つのパターンを合わせてみると、特に際立った組み合わせは存在しない。このことは、どのような入手方法であっても、相模野台地内での消費に応じて、面的に広がる非黒曜石石材による補充を行っていたことを示すことになる。

引用文献

- 会田容弘 1993 「頁岩製石刃石器群の比較研究—山形県新庄盆地の石器群分析を中心として—」『考古学雑誌』79-2、1-30 頁
- 安藤政雄 1979 「日本の細石核」『駿台史学』47、152-183 頁
- 安藤政雄 1984 「日本の細石器文化」『駿台史学』60、133-159 頁
- 安藤政雄 1985 「先土器時代の石器と地域」『岩波講座 日本考古学5文化と地域性』、28-60 頁
- 稲田孝司 1996 「恩原に居住した旧石器時代の回帰遊動集団と植民集団」『恩原2遺跡』、182-231 頁
- 織笠 昭 1984 「細石器文化組成論」『駿台史学』60、71-93 頁
- 加藤博文 1996 「モーピルトゥールとしての両面調整石器—縄文化にむかう技術組織の変動—」『考古学雑誌』、26-44 頁
- 加藤 学 1999 「荒屋型彫器の地域間対比—素材剥片の検討を中心として—」『新潟県考古学談話会会報』20、1-11 頁
- 加藤 学 2003 「いわゆる荒屋型彫器の形態的検討」『日本の細石刃文化』II、25-52 頁
- 北沢 実 1996 「帯広市暁遺跡出土遺物の原産地について」『北海道旧石器文化研究』1、28-30 頁
- 絹川一徳 1996 「M文化層の石器組成と石器装備の維持・補給について」『恩原2遺跡』、145-154 頁
- 木村英明 1995 「黒曜石・ヒト・技術」『北海道考古学』31、3-64 頁
- 栗島義明 1993 「細石刃文化と石材環境」『細石刃文化研究の新たな展開』II、185-191 頁
- 栗島義明 2003 「石材環境と技術適応」『日本の細石刃文化』II、69-82 頁
- 小林達雄 1970 「日本列島に於ける細石刃インダストリー」『物質文化』16、1-10 頁
- 近堂祐弘・藁科哲男 1998 「帯広市川西C遺跡出土の黒曜石剥片の原産地分析と水和層年代」『帯広・川西C遺跡』、115-119 頁
- 桜井美枝 1992 「細石刃石器群の技術構造」『東北文化論のための先史学歴史学論集』、441-462 頁
- 佐藤宏之 1992 「北方系削片系細石器石器群と定住化仮説—関東地方を中心に—」『法政大学大学院紀要』29、55-83 頁
- 佐藤宏之 1993 「細石刃石器群の行動論的分析のための視点」『細石刃文化研究の新たな展開』II、299-307 頁
- 佐藤宏之 2003 「北海道後期旧石器時代前半期の様相—細石刃文化期以前の石器群—」『古代文化』55-4、3-16 頁
- 佐野勝宏 2002 「北方系細石刃石器群を残した人類の行動形態」『考古学研究』49-1、38-58 頁
- 佐野勝宏 2003 「北方系細石刃石器群の移動形態」『日本の細石刃文化』II、122-131 頁
- 沢田 敦 1994 「上ノ平遺跡A地点出土旧石器について」『磐越自動車道関係発掘調査報告書上ノ平遺跡A地点』、92-108 頁
- 沢田 敦 1996 「第X章 まとめ」『磐越自動車道関係発掘調査報告書上ノ平遺跡C地点』、100-113 頁
- 島田和高 1998 「中部日本南部における旧石器地域社会の様相—砂川期における地区の成り立ちと地域の構造—」『駿台史学』102、1-49 頁
- 島田和高 2000 「ナイフ形石器からみた「砂川」の空間性・歴史性」『シンポジウム砂川—その石器群と地域性—』配布資料
- 島田和高・山科 哲 1998 「明治大学考古学博物館収蔵資料（旧石器）の再整理・再評価」『明治大学博物館研究報告』3、23-67 頁
- 白石典之 1993 「細石刃文化の出現過程」『細石刃文化研究の新たな展開』II、3-11 頁
- 鈴木忠司 1971 「野岳遺跡の細石核と西南日本における細石刃文化」『古代文化』23-8、175-192 頁
- 田村 隆 1989 「大林遺跡・先土器時代」『佐倉市南志津地区埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 堤 隆 1987 「相模野台地の細石刃石核」『大和市史研究』13、1-43 頁
- 堤 隆 2003 「細石刃石器群の石材需給とセトルメントシステム—中部・関東地方を中心とした一考察—」『日本の細石刃文化』II、152-170 頁

- 寺崎康史 1999 「北海道細石刃石器群理解への一試論」『先史考古学論集』8、71-88 頁
- 仲田大人 2003a 「相模野細石刃石器群の技術構成」『考古論叢神奈川』11、1-38 頁
- 仲田大人 2003b 「細石刃石器群の技術とその背景：素描－相模野台地を中心として－」『日本の細石刃文化』Ⅱ、83-101 頁
- 永塚俊司 1997 「荒屋系細石刃石器群における一つの定点」『人間・遺跡・遺物』3、90-117 頁
- 萩谷千明 1994 「Ⅳ期 細石器文化」『第2回岩宿フォーラム予稿集 群馬の岩宿時代の変遷と特色』、37-42 頁
- 橋本勝雄 1998 「関東細石器考」『千葉県立中央博物館研究報告』5-2、117-135 頁
- 東村武信・藁科哲男 1995 「帯広市宮本遺跡他出土の黒曜石製遺物の原材産地分析」北沢 実編『帯広・宮本遺跡 2』帯広市教育委員会、65-74 頁
- 望月明彦・堤 隆 1997 「相模野台地の細石刃石器群の黒曜石利用に関する研究」『大和市史研究』23、1-36 頁
- 山口卓也 1994 「二上山を中心とした石材の獲得」『瀬戸内技法とその時代』、185-198 頁
- 山下秀樹 1990 「ナイフ形石器文化後半期の遺跡の規模」『朱雀』3、1-29 頁
- 山田 哲 1999 「北海道の前半期細石刃石器群についての研究－常呂郡訓子府町緑ヶ丘 B 遺跡石器群の再検討－」『先史考古学論集』8、1-70 頁
- 山原敏朗 1997 「彫器の形態・技術・機能」『先史考古学論集』6、1-30 頁
- 山原敏朗 1998 「北海道帯広市暁遺跡の細石刃製作技術について」『北方の考古学』、1-22 頁
- 山原敏朗 2002 「帯広市上似平遺跡 A ブロック出土の細石刃に関する考察」『旧石器考古学』63、51-65 頁
- 藁科哲男・東村武信 1995 「帯広市南町 1、2 遺跡出土黒曜石製遺物の原材産地分析」『帯広・南町遺跡』、97-104 頁

東京都瑞穂町狭山遺跡石器組成の再検討

国武 貞克

1 はじめに

東京都瑞穂町狭山遺跡は、地元研究者による表面採集資料が注目され（大場ほか 1967）、吉田格により昭和 43 年、44 年にはじめて発掘調査が行われた。B 地点とされた立川面上の地点では、多量の石槍と両面体調整剥片、細石刃核、細石刃、ナイフ形石器などが検出された（吉田ほか 1970）。とりわけ、舟底形石核と報告された 2 点の細石刃核は、武蔵野台地で唯一例の削片系細石刃核の可能性が指摘され、それに共伴する石器群が長く問題とされてきた。

吉田格による調査から 33 年経った平成 14 年に、昭和 43 年・44 年に検出された同じ石器集中部の残りの部分を含む隣接地点が、東京都埋蔵文化財センターにより発掘調査された（内野ほか 2003）。狭山遺跡の石器組成を問題とする場合、この新調査は検証のための絶好の機会であったが、33 年前の調査と同じく、安定した層位から石器が出土しないという問題にぶつかったようである。その結果、多くの石器は原位置遊離資料として扱われた。

ところが、筆者が実見した限りでは、この原位置遊離とされた未報告資料中に、狭山遺跡の石器組成を検討する上で重要な石器が幾つか含まれていることが判明した。そのため、小稿ではそれらを提示するとともに、それらと新旧両資料の出土位置関係等を検討して、狭山遺跡の石器組成を推定するための一資料を提示することにした。

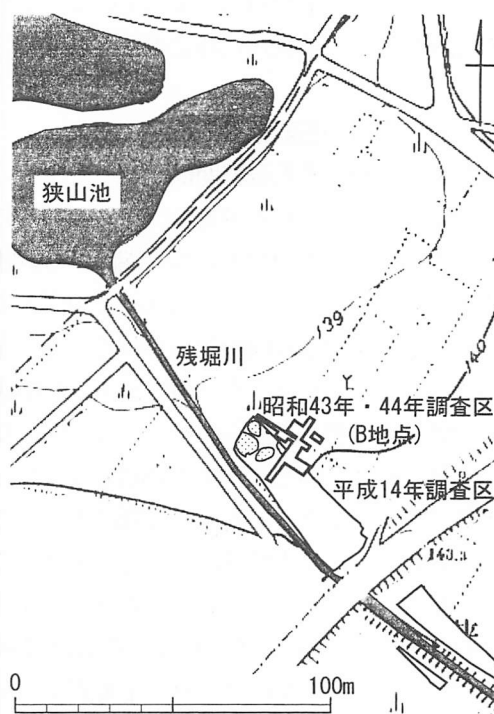
2 狭山遺跡の立地と新旧の発掘調査

狭山遺跡は武蔵野台地の扇頂部に位置する狭山池に近接した立川段丘面上に立地している（第 1 図）。遺跡の範囲は狭山丘陵を北東に控え、東は同丘陵から流れる小河川に、北西は狭山池に、南は小規模な残丘である円福寺裏山とそれに続くボウズ山（現在は消滅）に画された南北約 120m、東西 170m とされている。遺跡の南縁には、狭山池を水源とする残堀川が、残丘北縁に沿って東流している（第 2 図）。

昭和 43 年・44 年調査では B 地点とされた調査区を検討対象とするが、この調査区では出水が激しい上に、調査区の北西側、つまり狭山池側に向かって自然の落ち込みが検出されたことから、過去の狭山池の汀線であったと推定された。そしてこの自然の落ち込みの範囲内（つまり汀線ラインよりも狭山池側）では、再堆積ロームに



第 1 図 狭山遺跡の位置



第 2 図 狭山遺跡の調査範囲

粘土層が複雑に入り込んだ地層が堆積しており、石槍や細石刃核等はこの範囲から特に多数出土している（第5図）。汀線と推定された自然の落ち込みのラインと現在の狭山池の岸は約80m離れている。石槍48点、ナイフ形石器6点、細石刃核6点、細石刃28点、搔器2点、削器2点など合計94点が検出された（吉田ほか1970）。

平成14年調査では、昭和43年、44年調査区と一部重複しながら主にその南側を、北西から南東方向に調査された（第2図）。主な製品は石槍66点、ナイフ形石器11点、細石刃核7点、細石刃5点、彫器1点、搔器1点、削器5点などである。ローム層から出土した点数は238点であるが、この他に約2000点の石器がローム層外から検出されている。ローム層から検出された石器は5箇所のブロック（第1～5集中）を形成していた。検出されたこれら5箇所の石器集中は、昭和43年、44年調査で汀線と推定された自然の落ち込みを南側へ延長したラインよりも狭山池側で検出されている。したがって出土傾向は昭和43年、44年調査と同じである。

ローム層外から検出された石器とは、後世の遺構覆土中、あるいは遺構外の堆積土から出土した石器ということになるが、その多くは5箇所のブロックが検出された範囲のグリッド名（4-2L～8-2K）で回収されている。この範囲は古墳時代の1号溝以外は後世の遺構は検出されていない。したがって、5箇所のブロックが検出された範囲は、ローム層より上の層位はほとんどが攪乱を受けたという判断が下されたということになり、2000点近い石器がグリッド（4m四方）一括出土として取り上げられた（もっとも攪乱がどの範囲にどの程度及んでいたのかは平面図に示されていないため分からない）。そのためか層位の詳細な記録は残されず、昭和43年、44年調査において汀線とされた自然の落ち込みのラインも追跡されていない。また堆積環境の分析も公表されていない。第2図にみられるように、昭和43年、44年調査のトレンチと大きく重複するが、そのトレンチの痕跡も検出されなかったという（内野ほか前掲）。

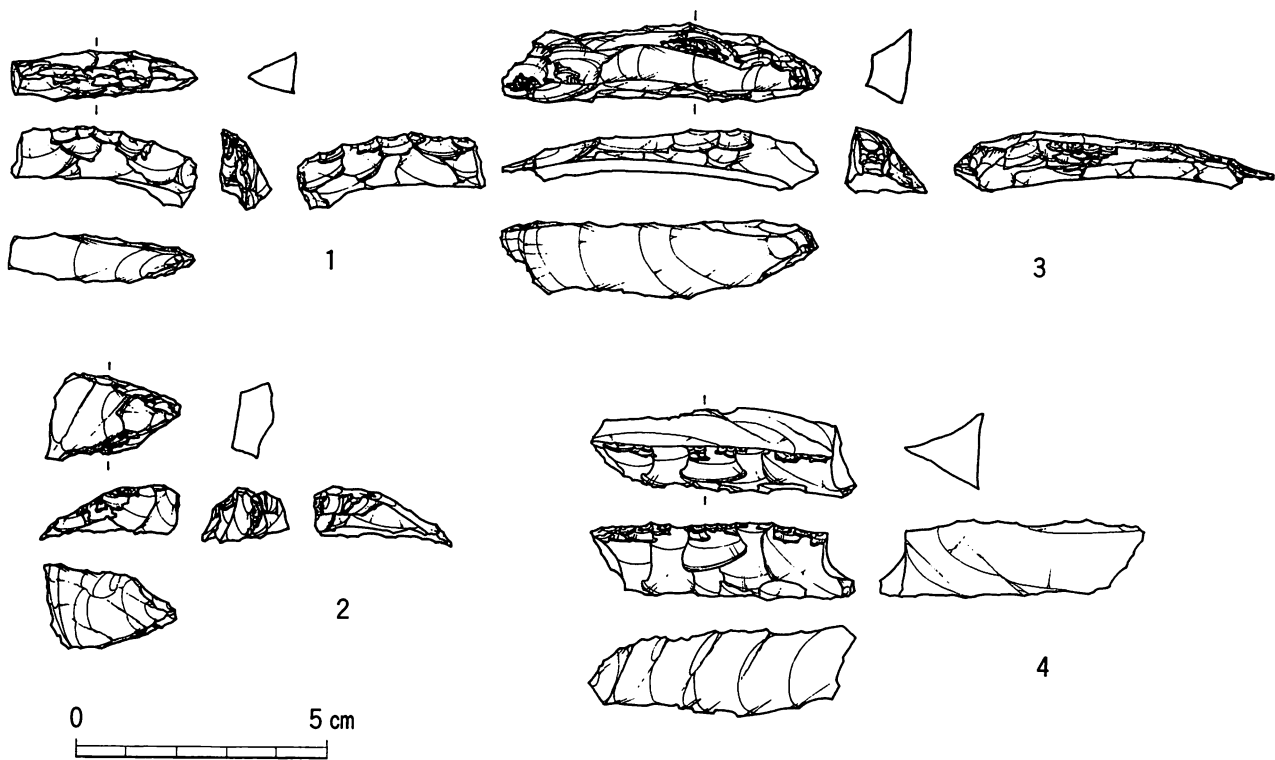
このように平成14年調査は、昭和43年、44年調査と比べて調査精度に大きな格差があり、単純に比較して検討することが困難である。しかしながら後でみるように、細石刃石器群と石槍石器群の双方が検出された石器集中の大半が平成14年調査区（第3集中）に含まれたため、この付近からグリッド一括で取り上げられた組成上注目すべき石器については、取り上げグリッドを参照して検討に加えるべきである。平成14年調査資料のうち主な製品は、第1集中と第4集中で石槍と細石刃が1点ずつ検出されているのみで、それ以外は全て第3集中出土とグリッド一括資料に含まれている。したがって、以下では平成14年調査資料を扱う場合、第3集中出土資料とグリッド一括資料に特に着目する。

3 狭山遺跡の石器組成

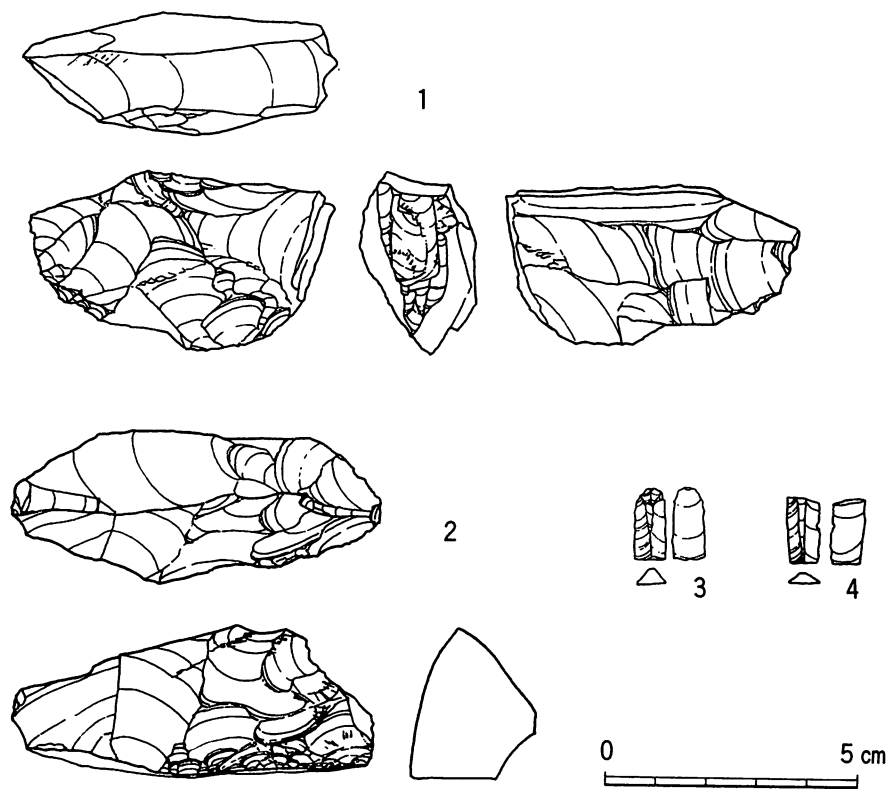
1) 削片系細石刃石器群関係

第3図は平成14年調査のグリッド一括の未報告資料中から抽出された、細石刃核の削片と考えられる石器4点である。1は両面加工石器の端部から剥離されており、先行する削片の剥離は行われていない。平らな打面が作出されている。2は1と同様に、両面加工石器の端部から剥離されているが、既に先行して削片が剥離されており、広く平坦な打面が認められる。この先行する打面から、主に左側面において打面縁辺が細かく調整されている。先行する打面と右側面に、小さな槌状の剥離が少なくとも4枚認められることから、この削片の剥離に先立つ頭部の調整と考えられる。この削片の長さは、幅から推定される細石刃核の長さと比較すると短いため、細石刃核の打面全体を更新する剥離ではなかったと推定される。3も1、2と同様に両面加工石器から剥離された削片である。また、2と同様に既に先行して削片が剥離されている。先行する打面からは、主に右側面において打面縁辺が細かく調整されている。また、この削片の剥離に先立って、左側面から先行する打面に対して調整加工が施されており、削片剥離に先立つ打面調整と考えられる。4は、1～3と異なり、片面加工の石器から剥離された削片である。左側面において器体を被う平坦な加工が認められ、特に縁辺には微細な剥離が観察される。これに対して、左側面は素材の主要剥離面が残置されている。打面部と末端部ともに折損しているが、1～3と比べると大きな細石刃核であったことが推定される。

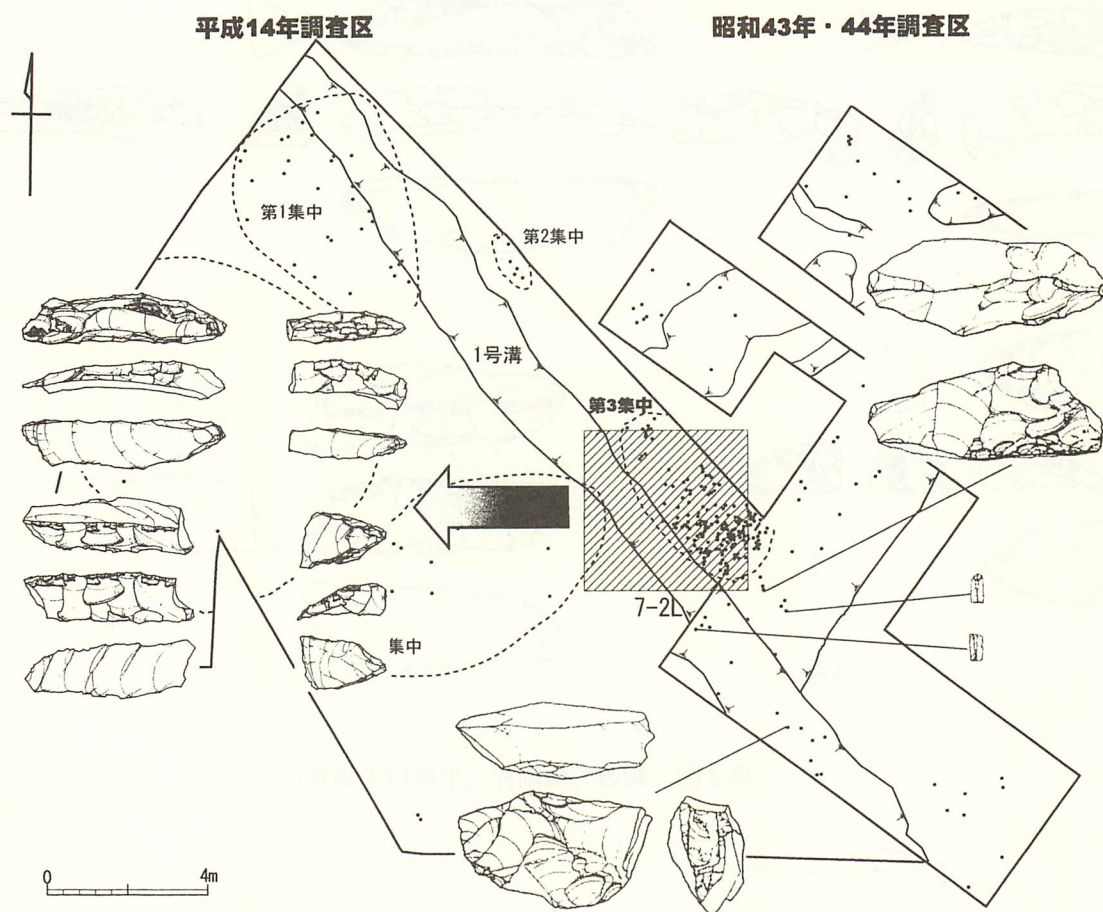
以上の4点の削片からみて、昭和43年・44年の調査に検出された舟底形石核（第4図）から推定されていた



第3図 細石刃核削片 (平成14年調査)



第4図 「船底形石核」と細石刃 (昭和43年・44年調査)



第5図 削片系細石刃石器群の出土位置関係図

ように、この石器群が削片系細石刃石器群を含むのは確実であると考えられる。そこで、上の4点の削片と昭和43年・44年調査検出の削片系細石刃核の出土位置関係を検討してみる。

第5図は、昭和43年・44年調査区と平成14年調査区を合成したものである。これにより平成14年調査において第3集中とされた石器集中部は、昭和43年・44年調査において検出された石器集中の中心部分に該当することが理解できる。この石器集中部の南端において昭和43年・44年調査で削片系細石刃核のうちの1点（第4図2）が検出されている。そして、もう1点の削片系細石刃核（第4図1）はこの石器集中を攪乱している古墳時代の溝（1号溝）の覆土から検出されている。一方、第3図でみた平成14年検出の4点の削片はすべてローム層外の出土ということで、グリッド一括で取り上げられている。その取り上げグリッドは4点とも第3集中地点の大部分が含まれる7-2Lグリッドである（第5図）。ただし4点のうち第3図の2と4は7-2Lグリッド内の1号溝覆土からの検出である。

平成14年調査の4点の削片は安定した層位からの出土ではないという点と、後世遺構の覆土からの検出という点からその出土位置は参考程度に留めておくべきである。それを十分に念頭においた上で、敢えて推定するならば、新旧の調査で検出された削片系細石刃石器群の関連資料は、平成14年調査の第3石器集中を構成する石器であった可能性が高いといえることができる。

昭和43年・44年調査の細石刃核と同一の石材による細石刃は2点検出されている。1点は、細石刃核（第4図3）の付近で検出されており、もう1点は1号溝の覆土であるが第3集中に隣接する地点から検出されている（第4図4）。

第3図の1～3に示した削片の石材と同一の石材による細石刃は、未報告資料も含めて認められない。しかしながら、後でみる石槍の調整剥片と区別することが出来ないものの、両面体調整剥片の中には第3図1～3の削片と同一の石材によるものが認められる。したがって、削片系細石刃核の器体調整剥片が含まれる可能性は否定できない。

2) 野岳型細石刃石器群関係

ところで、昭和43年・44年調査では、野岳型の細石刃核が4点検出されていた(第7図1～4)。平成14年調査でもこれに関連する資料が検出されている(第6図1、2)。第6図1は、大変小形のものであるが、剥片の小口に作業面を設定して、両側面は上下からの調整により完全に剥離に覆われている。ただし、底面は元の素材剥片の形状を残しており、舟底形ではなく平らである。その平らな底面と背面に礫面が残置されている。打面は、作業面側からの縦方向の剥離によって作出されている。ただし、打面作出後に打面から両側面への調整剥離が顕著に施されている。第6図4は、折損した厚手の剥片を素材としており、折面が打面に設定されている。打面は1と同じく、作業面側からの縦方向の剥離により作出されている。素材形状が舟底形であるためか、側面の調整はまったく施されていない。ただし底面の稜線が表裏から調整されている。

彫器として報告されている第6図2もまた細石刃核である可能性がある。厚手の剥片を縦に用いて、腹面側からの横方向の剥離により打面部が作出されている。チャート製であるが、武蔵野台地の場合この石材による細石刃核には同様の製作技術によるものが多数認められる(永塚2003)。

この他に、未報告資料中から打面再生剥片も抽出されている(第6図3)。作業面が石核全周を廻るもので、打面全体を更新したものである。打面調整もまたほぼ全周から施されている。

次に、これら野岳型細石刃核の関連資料の分布を検討してみたい(第8図)。昭和43年・44年調査では、3点の野岳型細石刃核の出土位置が明らかにされている。このうち2点は、平成14年調査の第3石器集中の東と北東に外れる地点で1点ずつ出土している(第8図)。残りの1点は、第3石器集中を南東に大きく外れる地点からの出土である。平成14年調査では、第3石器集中の北半部の集中度の低い範囲から、上にみた3点が近接して出土している。

したがって野岳型細石刃核の関連資料の分布は、平成14年調査の第3石器集中の北半部が中心で、それより北及び東方向に広がっていた可能性が指摘される。第6図では2以外は透明度の高い黒曜石であるが、同じ石材の細石刃は昭和43年・44年調査では、南西部の1号溝の覆土からもまとめて検出されているものの、特に第3石器集中の北東部及び東部にまとまっている。また、平成14年調査では細石刃は、すべてグリッド取り上げで未報告資料も含めて20点(18点黒曜石で2点チャート)検出されているが、第3石器集中を含む7・2Lグリッドからは1点も検出されていない。このことも、野岳型細石刃石器群が第3石器集中の南半部にみられる密集部を構成していない可能性を示唆するものと考えられる。

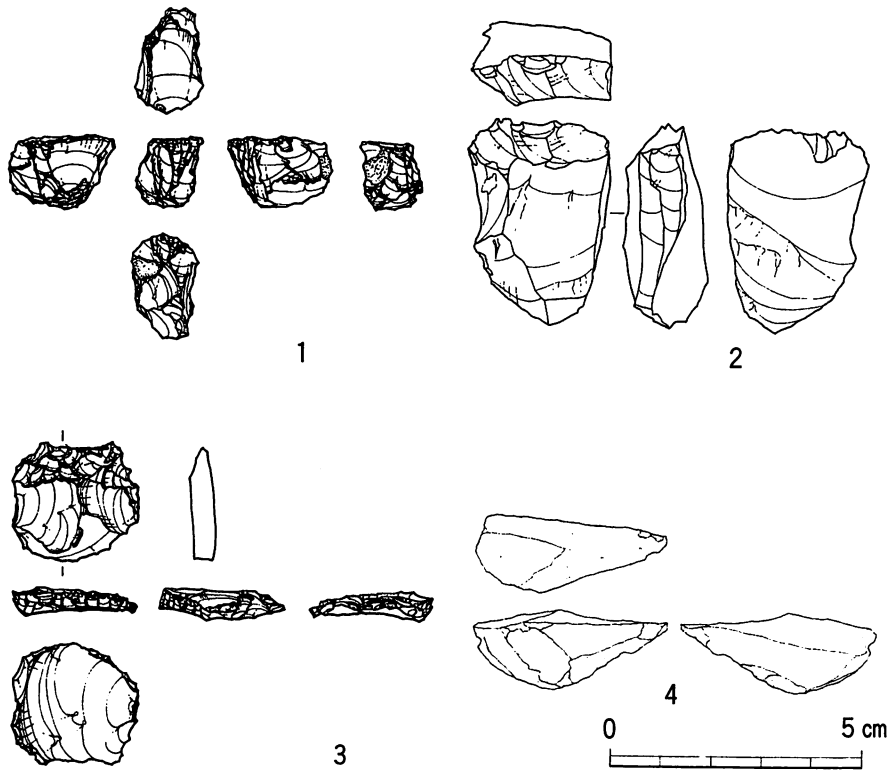
3) 石槍関連

石槍は昭和43年・44年調査分で48点、平成14年調査分で未報告資料を含めて66点の計114点が検出されている。形態は稀に細身のものもあるが多くは大型幅広の木葉形のものである(第9図)。形態が不揃いである点から未製品や加工途上の破損品が多いと考えられる。

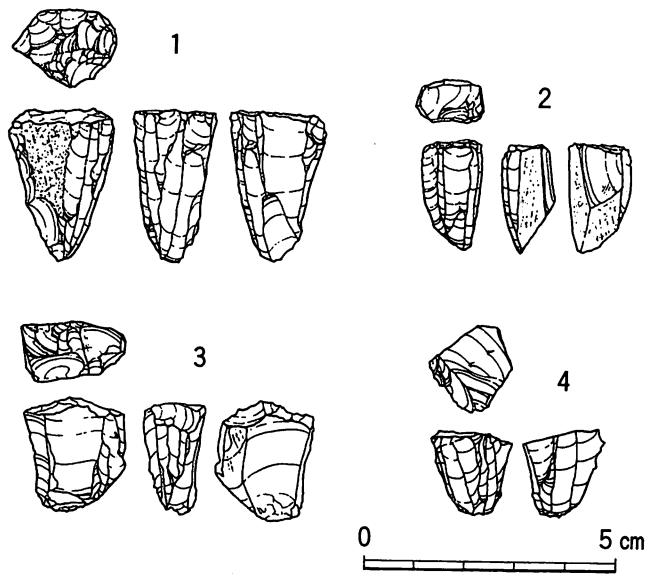
これらの分布を第10図に示した。最も集中しているのは平成14年調査の第3石器集中の南半部で、とりわけ昭和43年・44年調査区との境に密集している。昭和43年・44年調査区では、第3石器集中に接する範囲に最も多く、その他に第3石器集中の東部にも分布が連続している。また、第3石器集中から6m以上離れた北東部と南部にも、まとめて分布している。

したがって、石槍の第3石器集中の南部から昭和43年・44年調査区にかけての範囲に分布の中心があるといえる。第3石器集中の南半部の未報告資料は大半が両面体調整剥片であることから、同集中の南半部の密集部は主に石槍の製作関連資料によって構成されることが確認される。

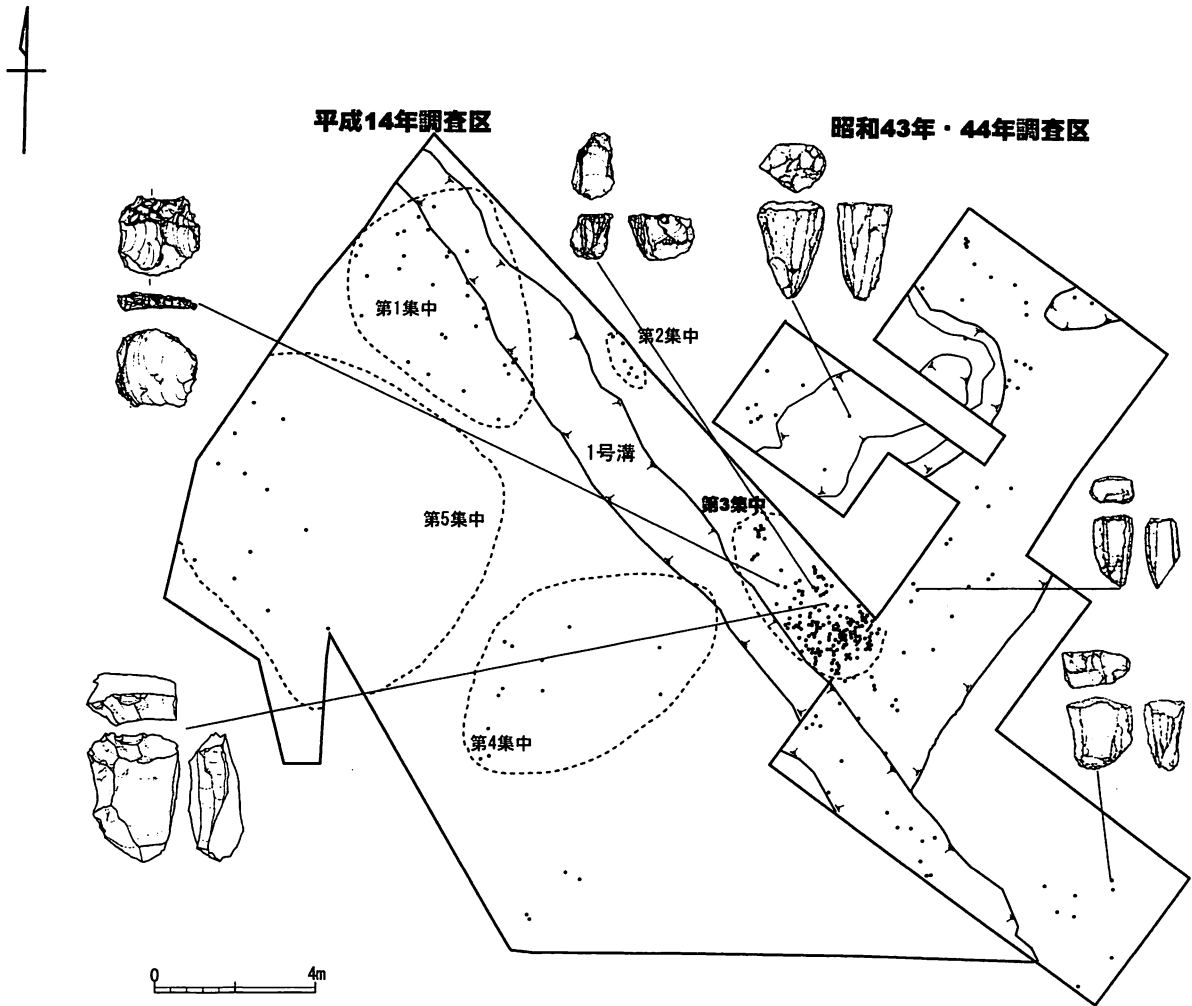
4) その他



第6図 野岳型細石刃核と打面再生剥片（平成14年調査）



第7図 野岳型細石刃核（昭和43年・44年調査）



第8図 野岳型細石刃石器群の出土位置関係図

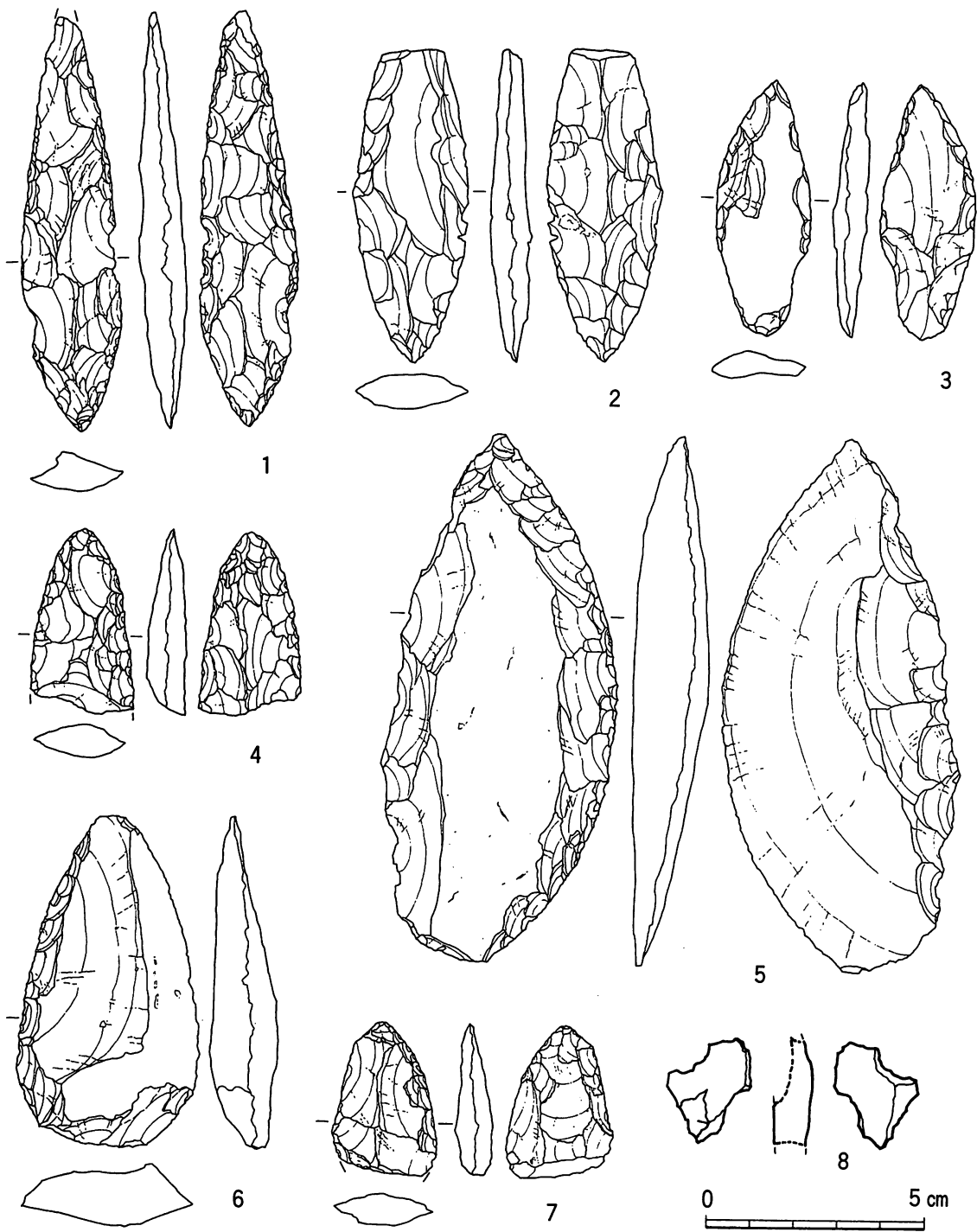
特筆すべきことに土器がローム層中から検出されている(第9図8)。胎土に繊維を含むもので、残存部の最大の厚みが8mm程度のやや厚いものである。わずかに残った表面には細かい刻みがみられる。これが意図的な紋様か否かは、大部分が剥落しているため不明である。この土器は、第3石器集中の南半部の密集部から出土している。

他にはホロカ型細石刃核が1点検出されている(第12図2)。打面は方向の異なる2枚の大きな剥離によって形成されており、打面から側面の縁辺部にかけて細かい調整が多数施されている。石核の器体は上下から調整されて舟底形に整形されている。この細石刃核は第4石器集中を含む6・2K・2Lグリッドで取り上げられている(第13図)。第4石器集中の主な石器はハンマー1点と細石刃1点が報告されている。

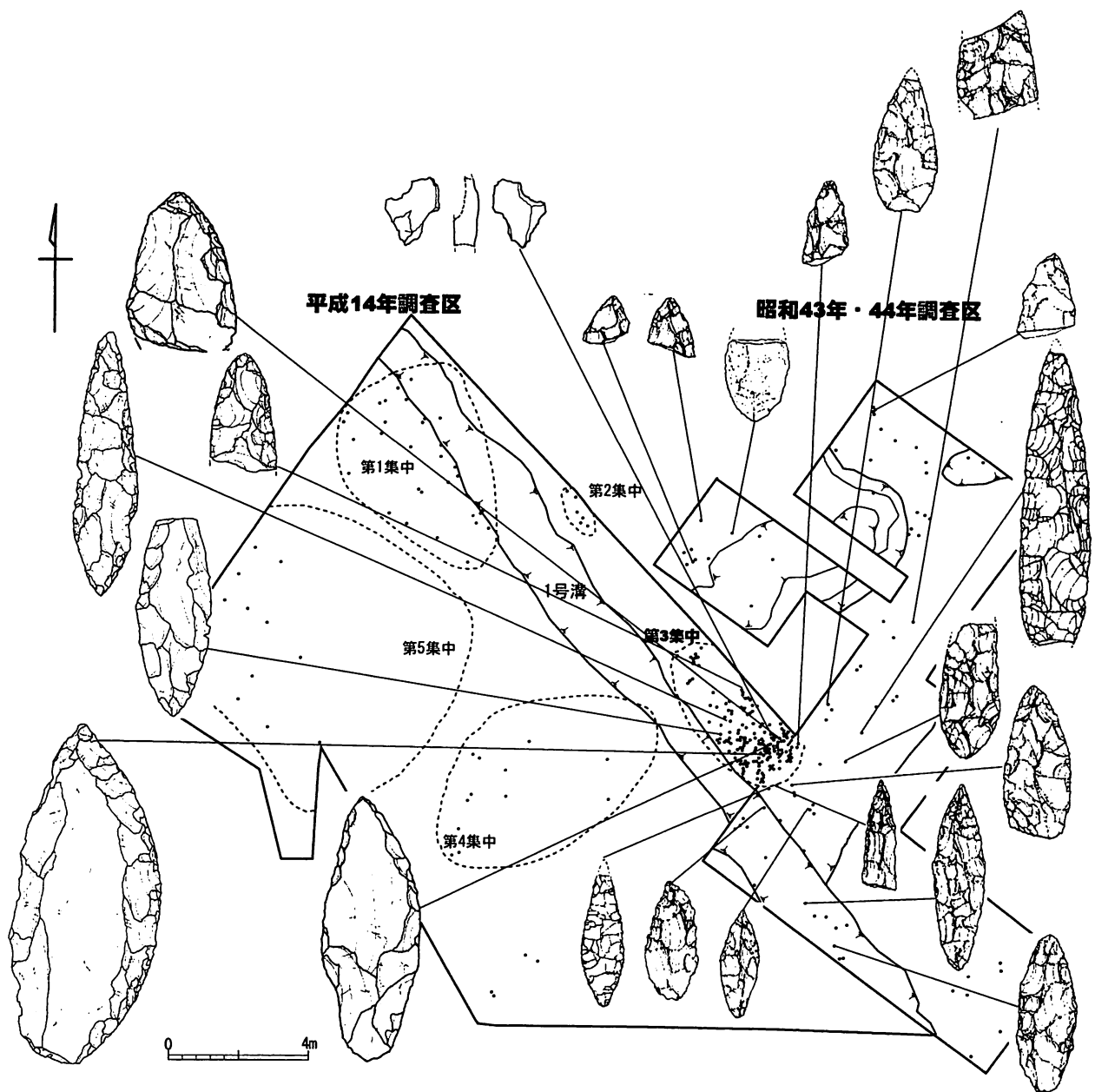
ホロカ型細石刃核が検出された6・2K・2Lグリッドでは、石刃石器(第11図1~4)と石刃核(第12図3)もまとめて検出されている(第13図)。石刃は、4点とも打面調整が顕著に施されているものである。石核の形態に沿って、正面からみて右側縁側にねじれた形態をしているものが多い。1と2は削器に加工されている。すべて幅2cm、長さ5cmを越えるものである。石刃核はこれらよりも大形のもので、少なくとも長さ10cm以上の大形の石刃が連続剥離された痕跡をもつ。打面は1枚の広い剥離で作出され、ほとんど調整されておらず、この点で4点の石刃石器とは技術的に異なっている。

なお、第3集中の南半部の密集部においても1点の石刃が検出されている。その石刃は6・2K、2Lの石刃と同様に顕著に打面調整が施されているものである(第12図1)。

他に平成14年調査で、ナイフ形石器終末期と推定される信州産黒曜石による涙滴形のナイフ形石器がまとまった点数検出されている。これらはすべてグリッド取り上げか後世の遺構覆土から検出されているが、その検出



第9図 石槍と土器 (平成14年調査)



第10図 石槍と土器の出土位置関係図

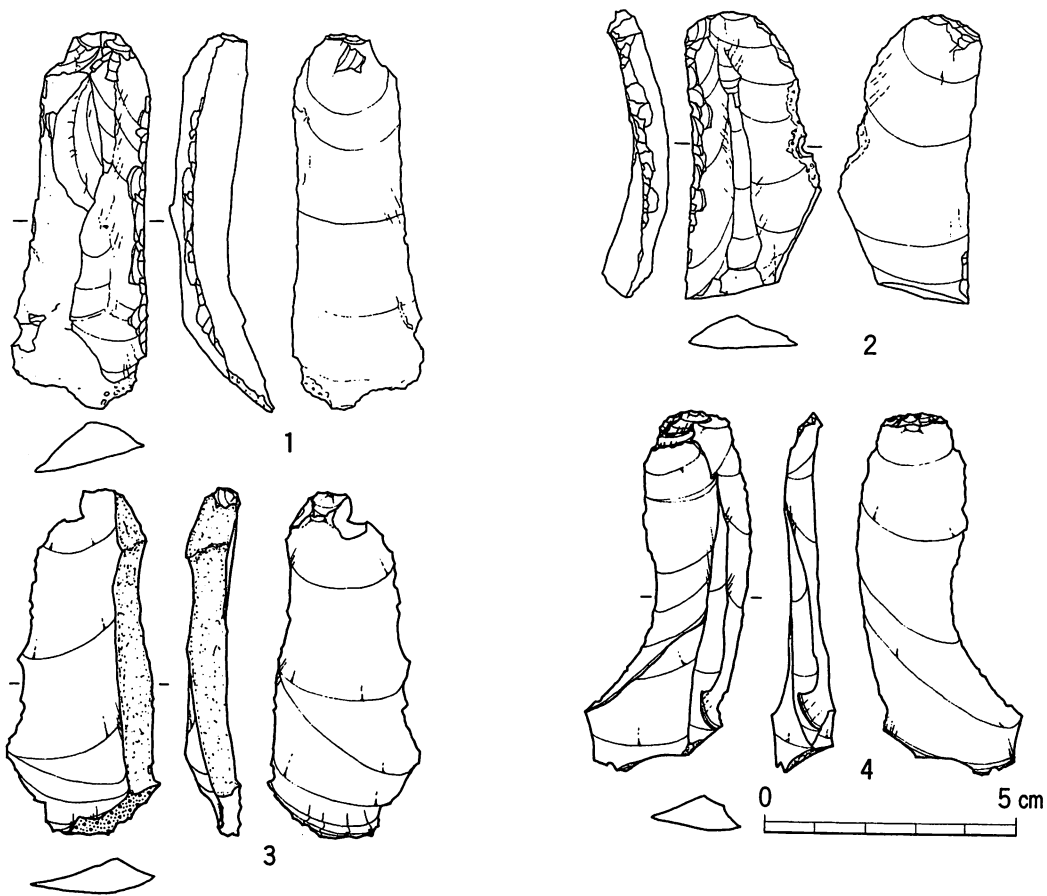
地点は第1から第5集中がある範囲から南へ約12m離れた地点（主に8-2Jグリッド周辺）に集中している。昭和43年・44年調査でも同様の石器が5点検出されているが、第3集中とは南北に大きく離れている。

4 それぞれの石材組成

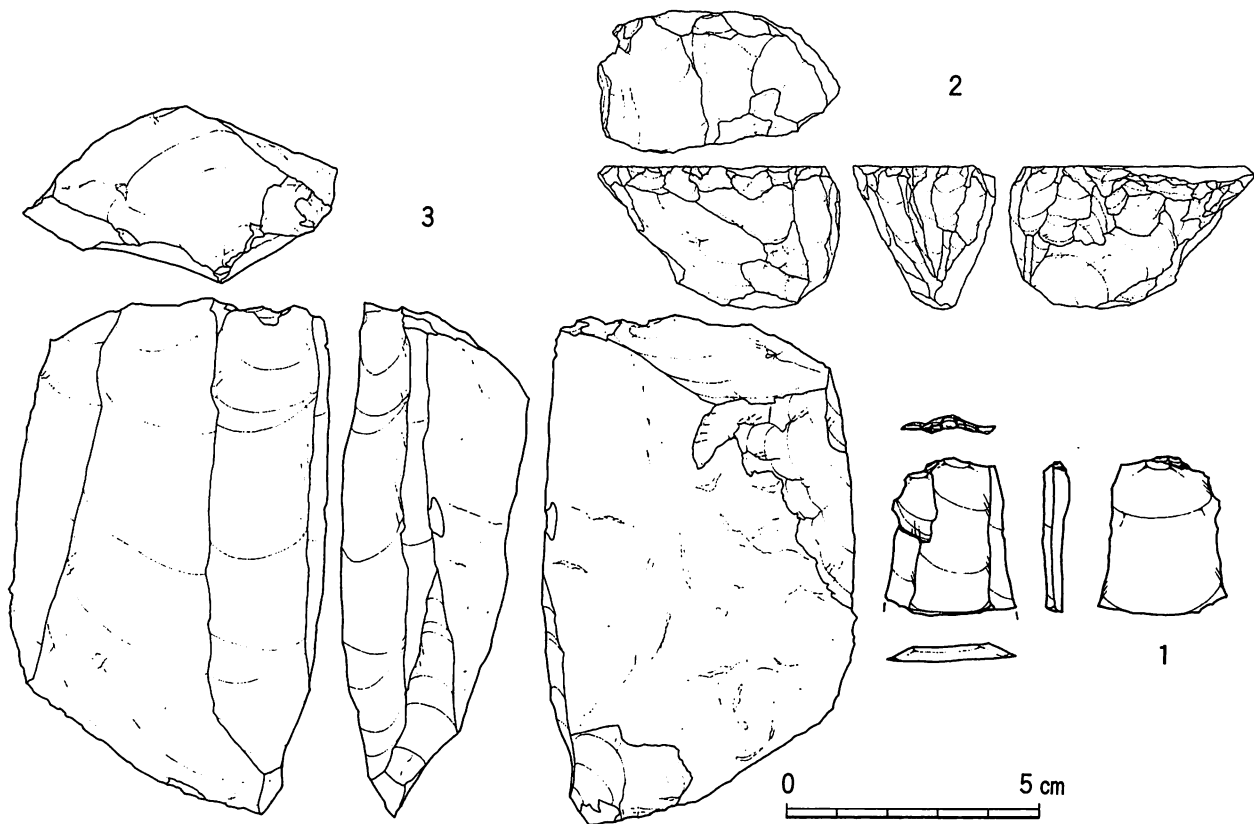
1) 削片系細石刃石器群の石材

削片系細石刃核関連資料の石材は2種類に分けられる。まずひとつは、中生代珪質頁岩である。これは昭和43年・44年調査の2点の細石刃核（第4図1、2）と平成14年調査の削片のうちの1点（第3図4）である。昭和43年・44年調査の2点の細石刃核は、母岩レベルで同一の石材である可能性が高い。これと同一の石材による細石刃が2点検出されている。これに対して、平成14年調査による削片（第3図4）は母岩レベルでは異なる石材である。

もう一種は、第三紀の珪質頁岩であり、平成14年調査の3点の削片がそれに該当する（第3図1~3）。この



第11図 その他の石器1 (平成14年調査)



第12図 その他の石器2 (平成14年調査)

珪質頁岩は、これまでの石材調査知見によれば、中新世中期の五日市町層群秋川層に由来する可能性が極めて高い。

五日市町層群秋川層は、狭山遺跡から約 12 km離れた五日市盆地の秋川を中心とする地域に狭く分布している（第 14 図）。五日市町層群は砂岩や泥岩、凝灰岩の堆積が繰り返す秋川層と、それを不整合に覆う網代層に分かれている（五日市盆地団体研究グループ 1981）。秋川層は層相によって 7 枚の部層に分かれるが（第 14 図）、その中でもとりわけ館谷泥岩部層には、直径 5cm 程度から 3～4m に至る様々な大きさのノジュールが豊富に包含されている。その中の一部に、とりわけ珪質で堅硬緻密なノジュールが集中的に包含されている部分がある。ノジュールの大きさは直径 20～30cm 程度である。削片の石材は、石質や色調、斑紋のパターンなどからみて、この層準に由来するノジュールと同じ石材である可能性が高い。ただし 3 点の削片は母岩レベルでは異なると考えられる。

以上より、削片系細石刃石器群の石材はすべて近傍の産地に求められている。先述したが、秋川層のノジュールと同質の石材は両面体調整剥片にも認められるため、この石材による細石刃核の器体調整剥片が含まれている可能性がある。

2) 野岳型細石刃石器群の石材

野岳型細石刃核の関連資料は、透明度の高い黒曜石によるものが多い。細石刃は新旧の調査で合せて 48 点出土しているが、42 点が同様の黒曜石である。この他にチャートによる細石刃核の可能性のある石器は既に指摘した。チャートの細石刃は新旧の調査で合せて 4 点検出されている。

3) 石槍の石材

石槍は中生代珪質頁岩とチャートに限定されている。とりわけ前者が全体の 8 割以上を占めている。

4) その他の石器の石材

その他の石器の石材について検討する。6 - 2K、2L グリッドから検出されたホロカ型細石刃核の石材は中生代の珪質頁岩である。先にみた 4 点の石刃石器は母岩レベルで同じ石材で、第三紀の珪質頁岩である（第 11 図）。暗褐色で極めて珪質かつ均質な石材である。凝灰岩からなるノジュールの外皮を残しており、この点からみて泥岩層から産出する秋川層のノジュールではない。これまでの石材調査知見によれば、新潟県の三川 - 津川両盆地周辺に分布する天満層下部のグリーンタフ中に産するノジュールと石質や色調、風化面の特徴が類似する（田村・国武・吉野 2004）。しかし当然断定することはできず、関東地方外縁部の第三紀のグリーンタフ層に産出するノジュールという評価に留めたい。同一母岩のものはこれらの形状の整った石刃石器 4 点しかないが、4 点は接合させることができない。これはある程度まとめて石刃生産が行われた地点から、数点の石刃が抜き出されて持ち出されたためと推定される。

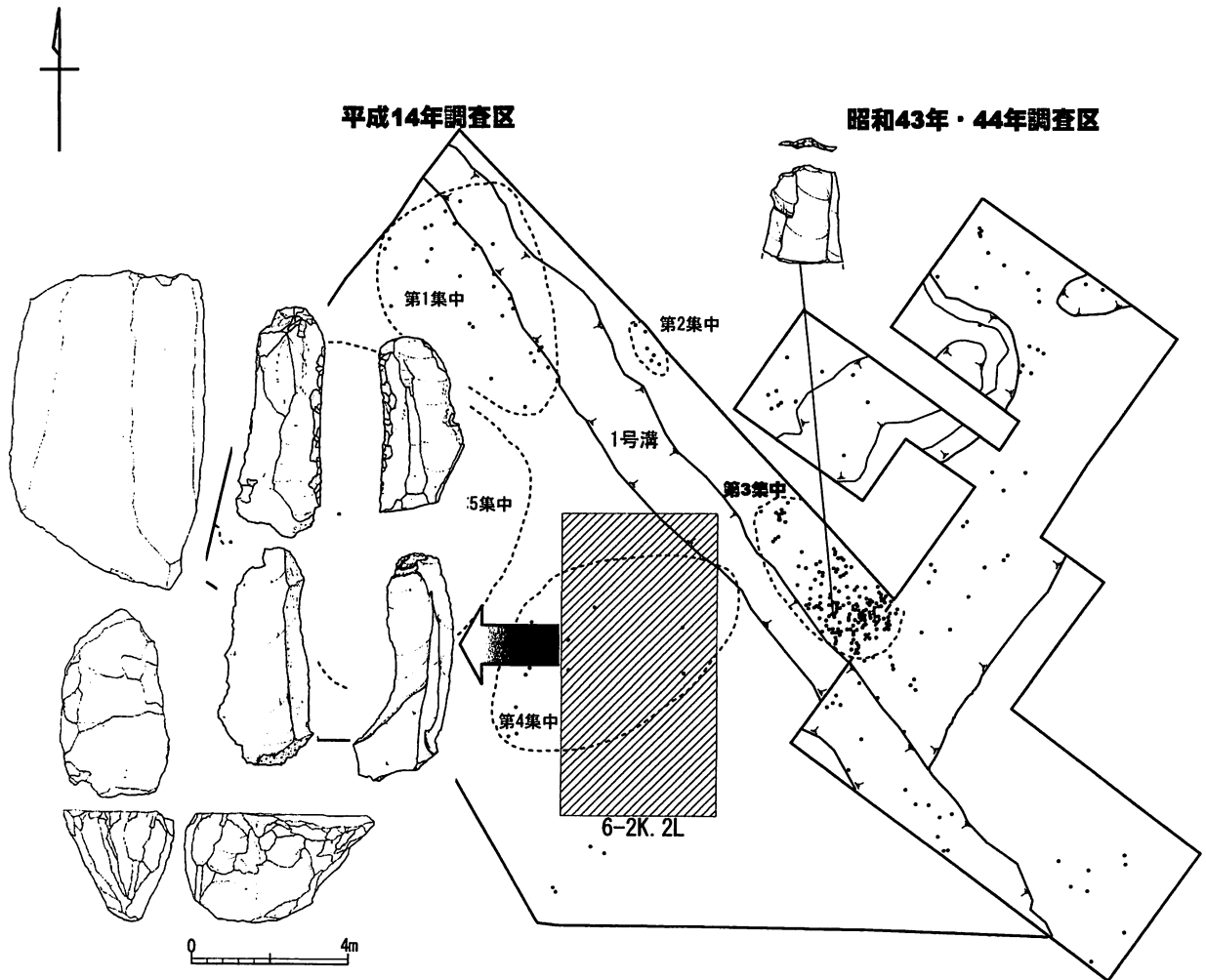
これに対して、石刃核は明らかに秋川層のノジュールを素材としている。背面に残された礫面は、泥岩層から産出するノジュールの特徴的な外皮をそのまま残している。石質や色調、斑紋のパターンからみて秋川層のノジュールである可能性は極めて高い。

第 3 集中にて検出された 1 点の石刃（第 12 図 1）の石材は中生代珪質頁岩である。

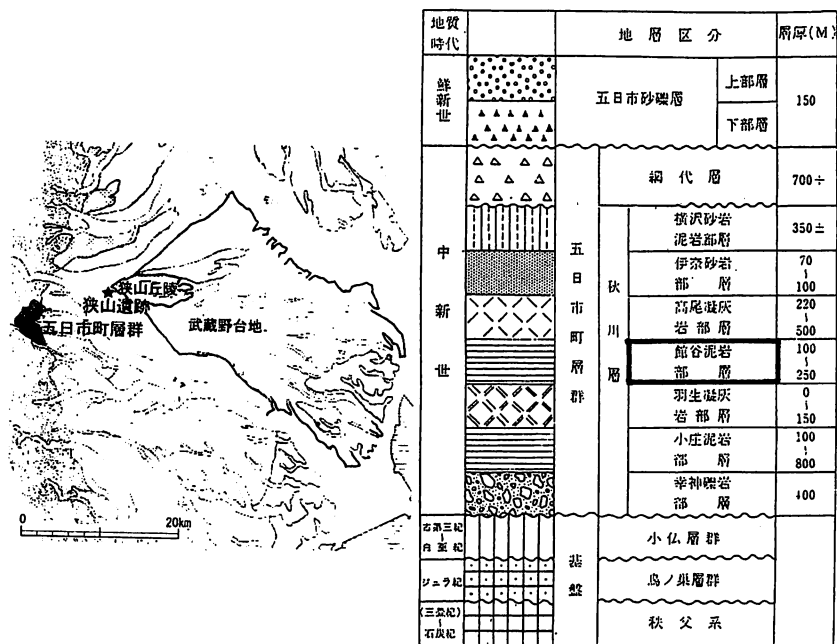
5 まとめ

平成 14 年調査の未報告資料から 4 点の削片が抽出されたことにより、狭山遺跡 B 地点の石器組成には、典型的な削片系細石刃石器群が含まれることがあらためて確認された。その石材は、周辺の石材調査の知見から、五日市町層群秋川層のノジュールに由来することが判明した。昭和 43 年・44 年調査で検出されていた中生代珪質頁岩による細石刃核と合せて考えると、近傍産地の石材を利用した削片系細石刃石器群として理解できる。

また従来から問題になっていた削片系細石刃石器群に共伴する石器については、主要な石器集中部の大部分が発掘されたことにより検討が可能となった。前項の検討をまとめると、削片系細石刃核の関連資料は第 3 集中の南端部にまとまるのに対して、野岳型細石刃核の関連資料は同集中の北半部にまとまっていた。また、第 3 集中



第13図 石刃関連資料とホロカ型細石刃核の出土位置関係図



第14図 五日市町層群の分布域と地層区分

の北部と東部にもわずかなまとまりをもっていた。石槍は第3集中の南半部に顕著に集中しており、第3集中の南部、東部、北部全体に広く分布していた。したがって、平面分布のみで検討すると、削片系細石刃核関連資料は石槍の分布とほぼ重複しており、野岳型細石刃核関連資料はその中心的な分布をわずかにずらしているという評価になる。このことから、削片系細石刃核関連資料と石槍が共伴し、野岳型細石刃核関連資料が別の機会に残されたという可能性が推定される。相模野台地における層位的な出土事例とも矛盾しないようである（諏訪間 1988）。これに加えて削片系細石刃核関連資料と石槍が共伴したと推定される第3集中の南半部において土器が検出されていることは、(近傍石材による削片系) + (石槍) + (土器) という南西関東地方の同時期石器群の事例とよく一致する（内川ほか 1993）。

ところで、問題となっている第3集中の西側の隣接地点で、ホロカ型細石刃核がグリッド取り上げ資料として検出された。これは狭山遺跡では従来知られていなかった新たな石器群である。安定した地層からの検出ではなくグリッドの取り上げであるため、共伴とするには問題が残るが、同じグリッドにおいて石刃核と石刃石器がまともに検出されていた（第11図）。ホロカ型細石刃石器群に石刃石器が共伴する例は、北関東・東関東地方で認められている（田村 2003）。これに加えて、削片系細石刃核関連資料と石槍が共伴したと推定された第3集中の南半部においても、同じ技術的特徴をもつ石刃が1点検出されている（第11図）。このため、近接して残されている削片系とホロカ型の関係が問題となる。

以上のように、狭山遺跡には、削片系、野岳型、ホロカ型の3種の細石刃石器群と石槍の石器群が残された。出土層位が安定していないため時間的な前後関係を層位から推定することが出来ないが、3種の細石刃石器群は近接しながらもわずかに地点をずらして残されている。今後これらの石器群の時間的な先後関係や共伴関係を検討する上で、狭山遺跡の石器群は例の少ない貴重な素材を提供してくれる資料といえる。

謝辞

発表の機会をくださった堤隆氏に感謝申し上げます。小稿の作成に先立って佐藤宏之先生にご指導いただいた。五日市町層群にノジュールが多数包含されている事実は田村隆氏のご教示によってはじめて知ることができ、現地調査に至った経緯がある。また、平成14年調査の未報告資料を見学、作図、掲載させていただいたのは瑞穂町郷土資料館の野口英雄氏、田中章男氏のご好意によるものである。記して感謝申し上げます。

図註

第3図1~4、第6図3、第9図8、第11図3,4、第12図1は平成14年調査の未掲載資料中から抽出して新たに作図したものである。第6図1は平成14年調査の報告書掲載資料を作図し直したものである。

引用文献

- 五日市盆地団体研究グループ 1981 「五日市盆地の新第三系」『地球科学』35-4 183-197頁
内川隆・高橋真実 1993 「縄文時代草創期」『勝坂遺跡第45次調査』
大場磐雄・吉田格・安藤清一 1967 『西多摩北東地区における考古学上の調査』東京都教育委員会
内野 正ほか 2003 『瑞穂町 狭山遺跡』(財)東京都埋蔵文化財センター
諏訪間順 1988 「相模野台地における石器群の変遷について」『神奈川考古』24 神奈川考古同人会
田村 隆 2003 「林小原子台再訪—東部関東の長者久保御子柴石器群—」『考古学』I 1-51頁
吉田格・肥留間博 1970 『狭山・六道山・浅間谷遺跡』東京都瑞穂町役場
永塚俊司 2003 「南関東地域の細石刃文化」『日本の細石刃文化』II 八ヶ岳旧石器研究グループ184-233頁

下野-北総回廊をめぐる細石器石器群¹の生態学的一考察

田村 隆

下野-北総回廊という概念についてはすでにいくつかの論文でふれた(田村 2003、田村・国武・吉野 2003 同投稿中)。本論では、この枠組みからする細石器石器群の初等的な観察によって、既存の、先験的な地域概念の解体を改めて確認することにしたい。また、この過程でまったく新しい地域概念を提案するとともに、一見異なった石器群が、ある位相(特定の観点ともいってよい)からすると、完全に同型的にみえることも示したいと思う。いうまでもないが、これは安斎によって提唱された構造論的な視点に負うものであるが(安斎 2003 第Ⅱ章)、同時に、私たちが十年以上前から提唱してきた旧石器考古学における社会・生態学的なパースペクティブの理論的大枠と具体的研究の端緒を示したい。

地域的な枠組みをどう考えるのか

一般に、後期旧石器時代の人口は遊動的な生活を維持し、台地から台地へと移動線を延ばしていったのだから、たかだか恣意的な地域概念、あるいは近代的な行政概念にすぎない台地間の比較などに何の意味もないであろう。例えば、半年前の生活域とただ今の生活域が比較され、その違い(当然石材は変化し、したがって石材消費戦略も異なるであろう!)が地域差であると評価されてこなかっただろうか。あるいは、地域集団の錯綜した重複が段階差や地域差に還元されてこなかっただろうか²。

筆者らは後期旧石器時代における遊動領域を構築するにあたり、古地形学的な布置と、そこに不均等に配された諸岩体を所与とする景観の中の遺跡という、すぐれて生態学的な視座に定位してきた。詳しくは前掲論文にゆずることとして、ここではその概要をのべるにとどめよう。

はじめに、関東平野を俯瞰することからはじめる。関東平野南部は荒川及び中川低地を境に大きく東西に分かれる。西側は関東山地から派生する台地群が南北につらなるのに対して、東部関東は南北に狭長な台地が並存している。なかでも、旧鬼怒川と旧利根川にはさまれた幅の狭い、また低い台地はやがて関東地方最大の台地である下総台地と陸続する。この栃木県宇都宮市北部から下総台地に至る幅数キロから十数キロという低平な台地を下野-北総回廊とよぶ。この回廊は後期更新世をつうじて各種ほ乳類の移動経路となり、したがって狩猟・採集民の主要往還路でもあった。なお、回廊の東西を限る低地は広く、また深く浸食されており、さらに、頻りに流路が移動したことから、大きな障壁となっていたとみられる。

下野-北総回廊南部に広がる下総台地は房総半島のほぼ北半を占めるが、その基本骨格は Y 字型の分水界によって構成されている。すなわち、房総丘陵を南北に貫く丘陵中央部分分水界は、千葉市南部土気地区周辺で東西に分岐し、西側の太平洋沿いに下総台地西部分分水界が、また、東側九十九里沿いに土気-銚子分水界が位置する。印旛沼低地はこれら二つの分水界の中央に抱かれているが、そこにはこれら主要分水界から小分水界が派生する。また、下総台地西部分分水界は下野-北総回廊に陸続する。後期旧石器時代の遺跡は、主要分水界及び派生分水界に沿うようにほぼ下総台地の全域に分布している。要するに、下総台地にあっては、西部関東の諸台地のように主要河川に沿う移動パターンは想定できない。ここでの移動経路は分水界システムである。

下総台地の北側は現在の栃木県の範囲になるが、鬼怒川低地と思川低地に東西を画された宝木台地(小山台地ともいう)とよばれる。宝木台地には殿山、薄市、多功南原、三ノ谷東、谷館野北、同東、本郷前、寺野東、八幡根東など後期旧石器時代の遺跡が高密度で分布している。宝木台地は宇都宮市の北側で山がちの地形となり、

これは宇都宮丘陵として区分されている。宇都宮丘陵の北端は鬼怒川によって断ち切られるが、そこはすでに高原山の南麓と指呼の間にある。このように、房総丘陵、下総台地、宝木台地、宇都宮丘陵はほぼ南北に連なり、そこにはほとんど障壁のない往還路が形成されていた。ここで下野・北総回廊と呼ぶのは主に宝木台地に相当するが、厳密にその範囲を確定できるといったものではなく、その南北の一部も含める場合がある。

ギャザリング・ゾーンとはどのような概念なのか

はじめにギャザリングという概念を明確にしておきたい。狩猟・採集民のことを英語でハンター・ギャザラーということは誰でも知っている。ハンターというのは狩猟民であり、ギャザラーとはたいてい採集民のことをいう。採集民が主に採集の対象とするのはさまざまな植物や岩石・鉱物であることも常識だろう。動物遺体の利用もギャザリングである。この意味で、ギャザリング・ゾーンというのはギャザリング行動の展開される範囲という程度の意味となる。特に石器石材が議論される場合には特定石材が採集される場所ということになるだろう。したがって、ここには特定岩体ばかりでなく、その岩体由来する石材の分布範囲も包括されるが、後者の範囲の特定は一般に困難である。

この程度の素朴な理解でもさしあたり何も問題は生じないのであるが、せつかくの機会なので、すこし補足しておこう。インゴルドは狩猟・採集とは単なる生業のパターンではなく、特殊な生産の様式であると規定している (Ingold 1988)。インゴルドがいたかったのは、狩猟・採集とは狩猟・採集行動ばかりでなく、狩猟・採集のための道具の生産や管理、食料の分配や、さらには場面場面での協業など、さまざまな部門が統合された複合的な行動様式を形成しているが、それは対自然的かつ人間間的な関係の総体であり、そのような関係を再生産するシステムである、ということになるだろう。

ところで、生産様式とはどのように理解されるのだろうか。インゴルドは狩猟・採集の一般理論を考察するにあたり、ゴドリエにならって、R (Resources : 資源=労働対象)、I (Instrument : 道具=労働手段) そして M (Men : 人間=労働主体) という三つの契機を導入し、これら3契機の関係から生産様式を説明している (図1)。一般に、生産関係とは生産諸力と生産諸関係の結合体であると定義されているが、生産諸力とは RIM を生態系との関係で考察することであり、生産諸関係とは RIM を所有関係との関係で考察することである (今村 1993, ゴドリエ・山内訳 1986)。つねに三つの契機が関与するから「諸」が付されることが理解されるだろう。

ところで、ギャザリングという用語はギャンブルによって導入されたものである (ギャンブル・田村訳 2001)。ギャンブルは旧石器時代の世界とは、所与の生態系における無数の結節と、そうした結節を結ぶルート重複・相互関係であると考えた。この結節とは主体 (M) と他の主体の、あるいは動物や植物との、そして岩石や水など (R) との出会い場所であり、言葉や身振りが交換され、また、道具 (I) が行使される場所でもあった。こうした結節環をギャザリングというわけだが、これは単なる場所的なものではなく、狩猟・採集世界における RIM の生態的布置として理解し直さなければならないだろう。そこには固有のリズム (動作の連鎖)

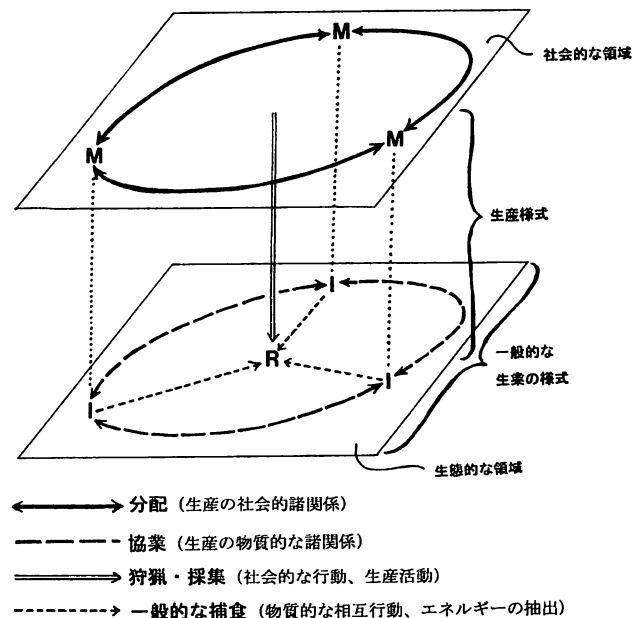


図1 分配・協業及び狩猟・採集・一般的補食の相互関係 (Ingold 1998 による)

があり、「習俗としての景観」に織り込まれ、またそれを歴史的に形成することにもなるのである。

一方で、ギャザリングは RIM の所有関係（人と人との関係＝ネットワーク関係）の相で考察されなければ片手落ちというものだろう。いかなる M も所与の集団（バンド、部族、分節的リネージュ等）の一員であり、他集団とかかわりながら生活は営まれるし、そうした関わりの中で R の意味も不断に変容するであろう。また、関わりと一口に言っても、そこには言語と身振り、さらに一連の道具が介在しなければならない。生態系内結節環におけるこうした媒介的な社会的ネゴシエーションをギャンブルは「社会的な場面性」とよんだ。さらに、個々の場面性の意味が沈殿し、累積することによって社会的全体性ともいえる「社会的景観」が形成され、また、「社会的景観」によって「社会的場面性」の意味が規定されるのだと考えた。こうして、RIM の社会的布置が明確になるが、それらの重層的な関係態として生産の様式性が規定されることになる。

私たちがギャザリング・ゾーンという場合も、ほんとうはこうした理論的な射程が前提とされている。つまり、石材資源のギャザリングとは、いつもすでに、特殊な生産様式の内部でのみ考察されなければならないのである。また、遠近法的に認識される石材の質的あるいは量的変化（石材と石材消費戦略の変容・変態）は、とりもなおさず習俗と社会という二つの景観（実は一つの景観の観相のちがいであるが）の変化や転態と照応するであろう（だから図 1 は 2 層構造になっている）。ギャザリング・ゾーンとは全体的な景観を構成する石材景観ともいえるが、むしろ、全体的な景観によってはじめて表象される空間性ということができる。従って、ギャザリング・ゾーンの変化や変異は、さまざまな抽象度をもつ生産様式の歴史的な水準に照応している。

ギャザリング・ゾーン (GZ) の設定

下野北総回廊を中心に描かれるギャザリング・ゾーンは、千葉県史編纂事業に伴う現地調査の成果にもとづいて、筆者と国武貞克、吉野真如の三人によって構築されたものである（田村・国武・吉野 2003、投稿中）。それは次のような 5 帯 16 地域構成となっている。以下、本論では GZ Ia などといった略号表記をおこなう。

GZ I 房総半島内部の地域であるが、4 か所かに分けられる。

I a 万田野層や長浜層など上総層群上部の砂礫層である。チャート、泥岩、砂岩、ホルンフェルス、黒色緻密質安山岩、流紋岩質溶結凝灰岩、玉髓などが非常に多くの種類の石材がとれるが、硬質岩類は小型扁平なものが多い。村田川以南の遺跡で常用されている。

I b 嶺岡層群の珪質頁岩岩体周辺である。嶺岡山地は地滑り地帯であり、露出が悪いが、各種の珪質頁岩が分布する。珪質頁岩は大崩礫岩にもたくさん含まれているが、そこには現在岩体の所在を確認できないものもある。少量ではあるが、珪質泥岩質のノジュールも選択されている。印旛沼周辺までは分布するが、やはり丘陵中央分水界から派生する諸台地での使用頻度が高い。

I c 藪層や地蔵堂層など下総層群下部の砂礫層の分布範囲である。礫種は I b と類似するが、一段と小型化している。礫層から洗い出された礫は、九十九里平野を流れる諸河川につくる段丘を構成する砂礫層として再堆積しているが、これが石器石材として使われている。使用は土気-銚子分水界周辺の遺跡に限定される。

I d 銚子半島である。愛宕山層群のチャートと夫婦ヶ鼻層の黒色緻密質安山岩が使われているが、チャートはジョイント部が縦横に発達して角状に破碎しやすく、黒色緻密質安山岩もやや粗粒であることから、その使用は土気-銚子分水界西部限定的である。

GZ II 宇都宮丘陵～宝木台地周辺の地域である。姿川や田川などの主要河川沿いに半蔵山安山岩が大量に分布するため、下野安山岩ベルトと呼んでいる。他に大谷層や長岡層の流紋岩質溶結凝灰岩も豊富に分布する。また、南部では足尾帯のチャートや珪質頁岩、ホルンフェルス、砂岩などが加わる。黒色緻密質安山岩は下野-北総回廊を経て下総台地にも大量に搬入されている。

GZ III 鬼怒川低地の下野-北総回廊対岸及び渡良瀬川～中川低地对岸地域を包括する。

III a 西荒川上流域の寺島累層の分布域周辺である。寺島累層上部の凝灰岩層には珪質泥岩質ノジュールが大量に含まれる。このノジュールは色調の変化に富むが、斑紋や縞目などの特徴からある程度識別することが可能で

ある。この石材は後期旧石器時代前半期から、主に石刃素材として多用されている。ここには便宜的に日光男体山の黒曜石産地も含めておく。

IIIb 高原山である。黒曜石と鹿股沢層産の珪質泥岩質ノジュールを産出する。黒曜石は古くから知られていたが、鹿股沢層産頁岩層上部の凝灰岩層中に多量に包含される珪質泥岩質ノジュールも重要である。黒曜石は後期旧石器時代初頭から使われている。ノジュールも石刃素材や両面多石器素材となる。他に、赤瀧鉱泉周辺では碧玉（特に良質な赤玉石）を産出する。

IIIc 那珂川及び久慈川流域である。黒色緻密質安山岩の岩体が各所に散在している。他に、荒川層群大金層の珪質泥岩質ノジュールや中川層群の碧玉（ジャスパー）や流紋岩質溶結凝灰岩、浅川層の珪質頁岩や玉髓（メノウ）などがある。他に八溝山地からは黒色珪質頁岩が大量に産出する。これらの石材の一部は茨城県東部に広く分布する第四紀の見和層構成礫となっており、これを浸食する各河川の沿岸や海岸などに露出する。

III d 渡良瀬川～中川低地以西の関東山地から足尾山地を一括する。各種の石材が分布するが、房総半島との関わりが多少なりとも認められるのは利根川上流部に多量に分布する赤谷層の黒色頁岩と上州武尊産黒色緻密質安山岩である³。西関東産の石材についてはほとんど調査をおこなっていないので詳細をのべることはできない。東京都の五日市町層群からは珪質泥岩質ノジュールや珪質頁岩、珪化凝灰岩が産出することを確認しているので、今後の調査が必要であろう。東丹沢の石材については搬入を想定していない。

GZIV 岩代高地～福島盆地に至る山がちな地域である。

IVa 只見川の流域を包括する。只見川上流域の布沢層、大塩層の凝灰岩には多量の珪質泥岩質ノジュールが包含されている。特に布沢層の産出量は特筆される。また、叶津川流域は古くから碧玉産地として有名であるが、只見川流域にも岩体がある。

IVb 阿賀川流域、会津盆地西部地域であるが、広範囲に分布する譚峠層及びその並行層からは珪質泥岩質ノジュールが産出する。また、会津盆地西縁部に分布する漆窪層には例外的に良質な珪質頁岩層がある。著名な塩坪遺跡はこの岩体に接している。

IVc 福島盆地である。飯坂温泉周辺に分布する飯坂層からは珪質頁岩や珪質泥岩質ノジュールが産出する。摺上川上流でも珪質泥岩質ノジュールが採集できるが詳細は不明である。ただし、米沢寄りの山地を構成する泥岩、頁岩は石器石材には不適である。

GZV 越後山脈～三国山脈の北側及び関東山地以西の広大な領域を含む。また、関東山地の南側の地域と島嶼部も含めておく。だいたいのゾーンとは峠によって連絡している。

Va 阿賀野川流域、特にその支流である常滑川に注ぐ柴倉川流域である。天満層に多産する珪質泥岩質ノジュール及び珪質頁岩が重要である。この石材は阿賀野川流域の石刃石器群に多く使われている。IVb とは分水界をへだてて指呼の間にある。

Vb 信濃川流域である。(i) 五十嵐川上流域、(ii) 破間川上流域、そして (iii) 湯沢地区という3地域に分かれる。(i) 及び (ii) に分布する七谷層上部凝灰岩層には珪質泥岩質ノジュールが含まれている。(iii) では古い方から白板層、清津層、上野層という珪質頁岩や珪質泥岩質ノジュールを含む層が堆積している。特に、上野層十二峠凝灰岩部層から産出する珪質泥岩質ノジュールは注目される。この石材は色調が黒色～暗褐色で光沢があり、肌理も極細粒緻密であるなど石器石材として理



写真1 GZIVa 珪質泥岩質ノジュールを多産する福島県只見町大滝沢における布沢層下部凝灰岩層の露頭

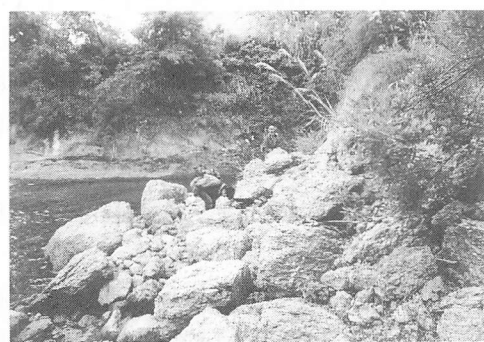


写真2 GZVb 新潟県中里村笹沢近傍の清津川に転落する上野層十二峠凝灰岩部層珪質泥岩質ノジュール(チョコレート頁岩)群

想的な資質を備えているばかりでなく、長径1メートル以上の巨大なノジュールがふんだんにあり、その産出量も膨大である。チョコレート頁岩と呼んでいる石材の一部であると考えられる。著名な荒屋遺跡の石材の一部はこれらの岩体に由来するものと考えられる。なお、(ii)はIVaと、(iii)はIII dとそれぞれ峠越えて連絡している。

Vc 信州の黒曜石原産地を包括する。星ヶ塔、小深沢、麦草峠、男女倉などの産地が判別される。黒曜石以外の岩石の搬入については想定していない。

Vd 畑宿、柏峠や神津島などの黒曜石原産地を包括する。この産地の黒曜石も少量ではあるが搬入されている。やはり黒曜石のみの搬入であろう。

下野-北総回廊南部の細石器石器群(1)

この地域の細石器石器群については永塚が的確に要約している(永塚 2003)。永塚の指摘事項は以下のとおりである。

(1) 細石器石器群には野辺山型細石核をとまなうものと、「荒屋系細石刃石器群」の両者があり、それぞれ特徴ある分布や石材利用状況を示している。

(2) 野辺山型細石核をもつ石器群の剥片生産は三つの構成が区別され、それは後期旧石器時代全般に認められる強固な枠組みを逸脱するものではない。

(3) 細石器石器群の編年は定まっていない。小型石槍石器群との関係も明確ではない。

(4) 野辺山型とは評価できない細石核を出土した東金市稲荷谷遺跡や、膨大な資料を出土した成田市十余三稲荷峰遺跡などの解釈が求められている。

(5) 「荒屋型彫刻刀型石器を伴う削片系の細石刃石器群」の資料的な蓄積が著しい。

(6) 遺跡分布には注目すべきパターンが認められる。すなわち、全般的な遺跡分布には疎密の差が認められ、これは調査事例の多寡に還元できない可能性がある。また、野辺山型細石器石器群と「荒屋型彫刻刀型石器を伴う削片系の細石刃石器群」とに分布の差は認められない。

(7) 石器石材の使用状況には地域別の変化が観察される。黒曜石は北西部に多く、非黒曜石石器群は南西地区に多い。嶺岡産珪質頁岩は南側の産地寄りの地域に多い。

(8) 細石刃の生産に使われている石材を遺跡ごとにみると黒曜石と非黒曜石とが伯仲している。

(9) 石器石材の原産地については基本的なデータが十分とはいえない。

(10) 野辺山型細石器石器群と「荒屋型彫刻刀型石器を伴う削片系の細石刃石器群」とは固有の石器組成を示すが、技術構成という視点で見ると大きな懸隔は認められない。

永塚の指摘は以上十項目にまとめられ、これにつけ加えるべきことはないが、いくつか気づいた点を補足しておきたい。まず、永塚による遺跡ごとの完全なデータの提示があり、分布図も付されているので、これを参考に改めて本地域の石器群を一覧表示した(表1及び表2)。

前記(1)及び(7)から、細石器石器群は、細石核の技術形態学的な分類によれば、野辺山型と札滑型(荒屋型彫刻刀型石器を伴う削片系の細石刃石器群)に二分され、また、消費石材による分類では黒曜石と非黒曜石に二分された。ここでは、この二つの分類基準を一つにまとめた分類を試みたい。(2)による構成基準に準拠すれば、

細石器石器群 A 構成1が各種珪化岩を素材とする野辺山型となるものである。ここでは、さらに2種に分類しておく。

A1 嶺岡産珪質頁岩及び上総丘陵の礫層起源の円礫によるもの

A2 チャートや珪質頁岩など嶺岡産珪質頁岩によらないもの

細石器石器群 B 構成1が黒曜石を素材とする野辺山型となるもの

細石器石器群 C 構成1がチョコレート頁岩を素材とする札滑型となるもの

表1 下野—北総回廊南部細石器石器群の石器組成

	文化層 集中地点	細石核 母核	細石刃	端削器	側削器	彫器	加工・使用痕 付き剥片	剥片	石核	打割器 敲打具	その他	石器群 類型
1	木苅峠 第5ユニット		2			1		178	2		1	小型石槍
1a	第10ユニット		29			1	9	2586	1		3	小型石槍
2	復山谷 Aブロック	9	27					146	1	1	1	野辺山型
2a	Fブロック	3	4					91			1	野辺山型
2b	WⅢ8ブロック	4	20		1			42		1		野辺山型
3	向原 A44地点	7	25	1			13	7	1	2		野辺山型
3a	D00地点	8	34				7	3		2	1	野辺山型
4	船尾白幡	7	22		1	1	8	149				野辺山型
5	一本桜南 第29ブロック	10	3		2		6	139	6			野辺山型
6	石頭第2 第10ブロック		2				3	18	2		1	野辺山型
6a	第12ブロック	8	22			1	22	162	12	1	1	野辺山型
7	地国穴台 E44地点	1					1	18	1			野辺山型
8	石揚 4ブロック	1	1					17			1	野辺山型
9	大林 第1ブロック	32	40	4	11	1	44	354	20	2	2	野辺山型
9a	第2ブロック	4	1				1	1			1	野辺山型
9b	第3ブロック	9	3				7	56	6		3	野辺山型
10	大割 第7文化層	16	29	2	3		23	197	7	1	15	野辺山型
11	油作第1	5	17	1	1		6	43			1	野辺山型
12	星谷津 第1ユニット	3	39					96	1		2	野辺山型
13	岩山中袋 第6ブロック	3					4	10	1			野辺山型
14	天神峰最上 第3b文化層	17	25	2	5		32	208	6	3	7	野辺山型
15	取香和田戸 第1文化層	3	9		1		3	24				野辺山型
16	三里塚馬場 Aブロック	1	21		1			26	4		2	野辺山型
17	塚越	5	12					54			1	野辺山型
18	草刈場北 第1ブロック	6	9					49		1		野辺山型
19	荒久 第1ブロック		19				4	15	1		3	野辺山型
20	桜井平 第4文化層	6	8					4				野辺山型
21	山田台No.4B 第2ブロック	3		1	6		7	219	25		14	野辺山型
22	北河原坂第2	3	76		2	1	3	523			3	野辺山型
23	南河原坂第3 H地点		23		1		3	43	1			野辺山型
23a	I地点	2		1			7	102	7			野辺山型
24	文六第1 第5ブロック	4						16				野辺山型
24a	第6・7ブロック	3	1			1		16	1		1	野辺山型
25	大椎第1 第3地点	2	12					39	2		1	野辺山型
26	美生第6地点 第4ブロック	1	3		1			44	1			野辺山型
27	清水川台	1					2	29	1			野辺山型
28	針ヶ谷	8	1	1	1			116	15	1	2	野辺山型
29	雷南		2			1		77			1	不明
30	間野台貝塚		2		1	1	4	1	1			札滑型
31	高岡大山	1	3	2	1	1	7	22				札滑型
32	木戸場 A地点	2	2	7	10	8		61	1	1	1	札滑型
33	木戸先	2	1		1	2						札滑型
34	宮内井戸作		8				10	25			3	札滑型
35	駒井野荒迫		8				3	36				札滑型
36	東峰御幸畑西 3b	6	14	9	7	10	39	133		2		札滑型
37	山田台No.8 文化層 I	2	34	7	18		24	87	1	2		札滑型
	合計	208	613	38	75	30	302	6282	128	20	73	7769

表2 下野一北総回廊南部細石器器群の石材組成

番号	文化層		黒曜石	珪質泥岩	チャート	流紋岩	黒色緻密質	砂岩	ホルンフェルス	その他	特徴石材
	集中地点			泥岩	凝灰岩	安山岩			粘板岩	不明	
1	木苅峠	第5ユニット	149	16						19	黒曜石
1a		第10ユニット	2609	20							黒曜石
2a		Fブロック	42		24		9		21	3	黒曜石
2b		WⅢ8ブロック	65	1				2			黒曜石
3	向原	A44地点	49		1	1	1	2	1	1	黒曜石
3a		D00地点	51	1	1		1			1	黒曜石
4	船尾白幡		176				12				黒曜石
5	一本桜南	第29ブロック	118	14		1	28			5	黒曜石
7	地国穴台	E44地点	3		1			1	16		黒曜石
11	油作第1		70				1	3			黒曜石
15	取香和田戸	第1文化層	36	2			2				黒曜石
17	塚越		43	4	12		12	1			黒曜石
18	草刈場北	第1ブロック	47		1		7	4		6	黒曜石
23	南河原坂第3	H地点	70	1							黒曜石
2	復山谷	Aブロック		9	116		36		16	8	青色チャート
6	石頭第2	第10ブロック	4	5	8	2	5	1		1	チャート等
8	石揚	4ブロック	6	12			2				泥岩
9	大林	第1ブロック		19	104	38	226	49	72	2	チャート等
9a		第2ブロック		3	1	4					チャート等
9b		第3ブロック		31	3	4	32	5	1	8	チャート等
13	岩山中袋	第6ブロック	1	9	1	1	6				泥岩
16	三里塚馬場	Aブロック			43		12				チャート
19	荒久	第1ブロック	2	3	12	25				1	青色チャート
20	桜井平	第4文化層	2	11	1	1	3				泥岩
21	山田台No.4B	第2ブロック		11	95	109	5	35	16	4	流紋岩質溶結凝灰岩
23a	南河原坂第3	I地点	3	10		30	9		62	5	各種
6a	石頭第2	第12ブロック	5	31	125	5	62			1	嶺岡産珪質頁岩
24	文六第1	第5ブロック			15					5	嶺岡産珪質頁岩
12	星谷津	第1ユニット	3	113			25				嶺岡産珪質頁岩
14	天神峰最上	第3b文化層	5	138	2	13	124	5	10	8	嶺岡産珪質頁岩
10	大割	第7文化層	14	196	20		38	13	9	3	嶺岡産珪質頁岩
25	大椎第1	第3地点	3	25	13	1				14	嶺岡産珪質頁岩
22	北河原坂第2		57	265	110	2	78	2	5	92	嶺岡産珪質頁岩
24a		第6・7ブロック	6	2	7		2			5	嶺岡産珪質頁岩
26	美生第6地点	第4ブロック	2	39	6		3				嶺岡産珪質頁岩
27	清水川台	第1文化層	1	29	1					2	嶺岡産珪質頁岩
28	針ヶ谷		1	27	30	31	13	26	17		万田野産珪化岩
29	雷南		64	15						2	黒曜石
30	間野台貝塚			9			1				チョコレート頁岩
31	高岡大山			37							チョコレート頁岩
32	木戸場	A地点	1	75			15	1		1	チョコレート頁岩
33	木戸先			6							チョコレート頁岩
34	宮内井戸作		1	45							チョコレート頁岩
35	駒井野荒迫			43	2			2			チョコレート頁岩
36	東峰御幸畑西	3b		166		2	26	24	2		チョコレート頁岩
37	山田台No.8	文化層 I	1	123	2	37	2	5	5		チョコレート頁岩
	合計		3710	1566	757	307	798	181	253	197	7769

下野-北総回廊南部の細石器石器群（2）

この分類を始点として観察をすすめてみる。はじめに各石器群の数を確認する。本論の表は永塚の集成表とはとなり、必ずしも全石器群を網羅したものではないが、一般的な傾向を把握するためには十分であろう。

まず、各石器群の出現頻度についてみると、石器群 A がもっとも多く、全石器群の半分以上を占めている。ついで石器群 B、石器群 C となる。石器群 A を石材消費パターンから二分すれば、意外なことに各石器群数には大きな懸隔はなく、むしろ拮抗の態を示しているようにみえる。いい方を変えれば、この地域の細石器石器群は石材消費戦略を異にする、少なくとも四つの石器群から構成されていることになる。それでは、この石器群を分断する石材消費戦略とはどのようなものであったのだろうか。

石器群 A1 確認し得た石器群は 11 石器群であるが、未確認のものもあるので、今後さらに増加するであろう。分布の一般的な傾向は（7）で指摘されているが、丘陵中央部分水界から派生する台地上に多くの遺跡が立地する。ここから分岐する分水界に沿っても遺跡が点在するが密度は希薄化する。この下総台地西部分水界と土気-銚子分水界に位置する遺跡は一般に資料数が多いが、丘陵中央部分水界では遺跡間に較差が認められる。また、各分水界の分岐点には北河原坂第 2 遺跡のように石材消費の著しい遺跡が位置することにも注意したい。

残念ながら石材消費の実態をうかがうことのできる報告が少ない。下総台地西部分水界の四街道市大割遺跡第 7 文化層（渡辺 1991）では、石器素材として 56 母岩が識別されているが、著しく構成 1 に偏った構成であり、多数の母岩が搬入されている反面、全体に 1 個あたりの資料数が少ない。また、珪質頁岩 4、5、12 などのように同一の母岩で細石核と一般的剥片用の石核がつくり分けられている例や、細石核の生産過程で生じる剥片がカリングされる例が少なからずある。一方、丘陵中央部分水界から派生した台地上にある清水川台遺跡（佐久間 1983）では、6 母岩が識別されているにすぎないが、礫面付き剥片の接合資料が 3 個体もある。

同じく丘陵中央部分水界に立地し、万田野層産の硬質円礫を多用する長柄町針ヶ谷遺跡（道澤 2002）では、小型の円礫の外皮を除去し細石核・石核母核を量産している。黒色緻密質安山岩や凝灰岩によって構成 2 が、砂岩やホルンフェルスで構成 3 が形成されているが、この素材も万田野層産である。なお、針ヶ谷遺跡の母岩数は 43 個体であり、資料数の割には多いが、これには理由がある。一つは、構成 1 及び 2 の素材が比較的小型の円礫であることであり⁴、もう一つは、構成 3 の素材が近傍で容易に入手できることである。永塚が判断を留保した稻荷谷遺跡（吉田 2002）も小型円礫を選択的に使う遺跡であろう。ここでは、サポート＝小型扁平な硬質円礫の形状が細石核の形態を強く規制しており、野辺山 b 型（佐藤 1974）と考えるべきである。

石器群 A2 この石器群は下総台地西部分水界及び土気-銚子分水界に濃密に分布する傾向がある。石器群 A1 とは一部が重複するが、基本的には分布域を異にするというべきであろう。ただし、石材分析が不十分であり、詳しい検討がはばまれている。例えば、構成 1 に多く使われているチャートや泥岩など硬質岩類の由来についてはほとんどわかっておらず、その一部が GZ 1a 起源である可能性を否定できない。資料数百点未満の小規模な遺跡が多いが、少数の大規模遺跡がある。この傾向は石器群 A1 と類似するが、零細な遺跡が目立つ。

今のところ、豊富な資料が出土し、かつくわしく内容が報告されているのは佐倉市大林遺跡第 1～第 3 ブロック（田村 1989a）のみである。他の石器群をこれと同一に論じることはできないが、とりあえず、この石器群を代表させておこう。第 1 ブロック構成 1 は主に青色系チャート（三畳紀やジュラ紀の古期珪質頁岩を含む）、凝灰岩、珪質泥岩等を素材としている。それぞれ複数の母岩からなるが、1 母岩あたりの資料数は僅少であり、きわめて限定的な消費が想定される。遺跡内では全く消費されていない母岩も多い。チャート 15 や 16 のように細石核作出にともなう剥片のカリングが顕著であり、小型刃器の生産が細石核母核生産に組み込まれている。また、凝灰岩の円礫を粗く加工した細石核母核が複数搬入されており、チャートと珪質頁岩の消費にともなうバックアップとみられる。

珪質泥岩はその特徴から GZ IIIa に由来するノジュールであろう。凝灰岩やチャートなどは GZ I a にも同種石材が含まれるが、凝灰岩については GZ IIIa～GZ II 各所でも採取可能であり、青色系チャート及び古期珪質頁岩

についても、それらが足尾山地産であるとすれば、下野-北総回廊西側の思川低地にふんだんに分布している。

第1ブロック構成2は黒色緻密質安山岩の大型のサポートが使われている。推定される原石の大きさから、その採取場所はGZⅡ、すなわち下野安山岩ベルトであろう。構成3は砂岩とホルンフェルスを使うが、やはり消費は限定的である。これらの石材もありふれており、採集場所を特定することはできないが、構成1及び構成2の素材採取場所でも容易に採取可能であることから、ここではそれらの原石群といっしょにもちこまれたものと考えておく。

第2ブロックと第3ブロックも第1ブロックと同じような特徴を示している。第2ブロックは資料数が少なくて特徴がはっきりしないが、第3ブロックの石器組成及び石材構成は第1ブロックとよく類似している。ただし、両ブロックともに構成1+構成2という形態をとり、構成3を欠落している。各ブロックは接近せず、またブロック間には同一の母岩と確認されるものはないので、継起的に形成されたものと考えられた。この場合、同じ台地の特定の場所が、同じようなルートの一部に繰り返し組み込まれ、その都度、ことなる使われ方をされたものと解釈されるであろう。すなわち、各ブロックの存続期間D、居住人員数P、そこで遂行された仕事の種類と頻度Bの積DPBを考えると、その大きさはブロック2、ブロック3、ブロック1の順に増加する。

石器群 B 印旛沼低地西岸及び土気-銚子分水界中央部に二つの分布上の核が抽出される。このエリアには他の石器群類型も存在するが、本石器群の特定エリアへの収斂度は高いように見える。これ以外にも、いくつか顕著な特徴がある。まず、集中地点の資料数の両極化がきわだっていることがあげられる。すなわち、大半の遺跡が総数百点未満の、どちらかといえば小さな遺跡であるのに対して、未報告ではあるが、十余三稻荷峰（空港No.67）遺跡という関東地方最大規模（いいかえればDBPの抜きんでた）の遺跡があり（森本1992）、その遺跡間較差は特筆に値する。次に、使われている石器石材の単調性が指摘できるだろう。本論で検討した12石器群のほぼ6割の石器群が黒曜石占有率80%以上となっている。このことは、石器群構成2及び構成3の頻度も高くないことを意味しているばかりでなく、石器群Aにおける黒曜石の使用頻度が著しく低率であることを示している。黒曜石の原産地推定はあまりすすんでいない。

石器群 C やはり印旛沼低地周辺に集中し、一部は印旛沼に注ぐ溪谷を遡行している。本石器群の特徴は大きく三点ある。一つは石器組成における調整剥片の出現頻度がきわめて低いことであり、裏を返せば、道具の頻度が高いことになる。次に、石器群の様式性がきわめて高い点があげられる。（札滑型）分割両面体といい、横断刻面（荒屋型）彫器といい、さらに撥形（角二山型）端削器といい、「型」が付される道具が多く、その様式性には強固なものがある。最後に、石器群Bと同じように、いや、それ以上に、石器石材の単調性が著しい点に注目したい。石器石材の大半はチョコレート頁岩であり、GZⅢa・Ⅲb～GZⅣa・Ⅳbとの密接な関係を指摘しないわけにはいかない。

セトルメントパターン

ここで設定した下野-北総回廊南部の石器群は、基本的には回廊及び回廊南部地域（GZⅠ・Ⅱ）をギャザリング・ゾーンとするグループと、関東地方を取り囲む山地の外側の地域（GZⅢ・Ⅳ）をギャザリング・ゾーンとするグループに分けることができる。そして、前者の分布が濃密であることも確認した。石器群A1は丘陵中央分水界から分岐する丘陵・台地に広く分散しており、集中的な母岩消費が継的に反復された場所と、それをとりかこむきわめて限定的な消費地点が識別された。また、下総台地西部分水界や土気・銚子分水界にも進出しているが、そこでも限定的とはいえ、集約的な石材消費が反復された。こうした様相から、GZⅠa・Ⅰbを焦点とするヒナギクの花弁状の往還パターンが導かれることになる。その分布範囲は、今のところ長径およそ80キロメートルの圏域となっている。

一方、石器群A2の分布範囲は、すでに述べた理由から、必ずしも分明とはいえないが、下総台地西部分水界及び土気・銚子分水界に分布する。もっとも多くの資料を出土した大林遺跡の事例から、各遺跡はGZⅢaにおける珪質泥岩や凝灰岩、GZⅡにおける黒色緻密質安山岩とチャートの一連の消費過程と理解することが可能であ

り、栃木県小山市寺野東遺跡 D 地点第Ⅲ文化層（森嶋 1998）は結節環の存在を具体的に示す重要な遺跡と評価されるだろう。この場合、本石器群の分布範囲は南北およそ 120 キロメートル以上になることが予想されるが、西荒川の珪質泥岩岩体から北総台地北端までは 80 キロメートルほどで到達する。ここに二つのキャッチメントが仮設されたが、両者は印旛沼周辺や土気結節環近傍などで交差し、集団間で恒常的な交換がおこなわれていたばかりでなく、接触をくり返しながら移動経路がさらに延長されたこともあったと考えられる。

ところで、石器群 B とは黒曜石の消費過程にほかならないが、そのあり方はこれまで述べてきた石器群 A とはまったく違っている。石器群 A がいくつかのギャザリング・ゾーンにおける石材採取と、その反復消費という、いわばしっかりと台地に根をおろした過程であったのに対して、石器群 B を構成している単位石器群の多くは、黒曜石の一過的な消費によるものと考えられる。これは、黒曜石の入手がたいへん間歇的であり、相当の時間的な間隙をおいて、短期間に集中的に消費されたり、隣接集団間で原石の分配がおこなわれたことを示唆しているのだろう。いいかえれば、石器群 A の消費サイクルの内部に、時間的な間隔をおいて黒曜石が組み込まれる過程で一過的に形成された石器群が石器群 B と定義される。ただし、この黒曜石の将来過程については、これを具体的に推察する手がかりがない⁵。

石器群 C が成立するためには、細粒緻密かつ均質、さらに相当の大きさを兼ね備えた石材が大量に存在しなければならない。この成立条件から、本州各地にある珪質泥岩や碧玉などを豊富に産出する地域では、ほぼ共時的に固有の両面体石器の消費システムが定着した。常識的に考えて、この過程はほとんど時間差をもち、また、その技術知は隣接地域でも共有されていたはずである⁶。今回、分析の対象とした地域に即していえば、一次的な石材消費エリアは GZⅢ及びⅣa・Ⅳb であったと考えられ、石器群 C は両面体消費過程の末端に位置づけられることになる。福島県笹山原 No.16 遺跡（會田 2001）は岩代高地における消費過程を、埼玉県白草遺跡（川口 1993）は南漸過程における中間的限定的消費遺跡と評価される。この過程で、印旛沼の周辺はさまざまな石器群荷担者が交差するきわめて重要な情報交換ゾーンとなった。

各石器群に即して、その形成主体のおおざっぱな移動形態について予測を述べた。下野—北総回廊とその南側に大きく広がる台地と丘陵には、その南端及び北端に石器石材が偏在していた。一般に石器群の消費類型と人口とは実体的に対応しないが、ここでは二つの石材原産地をそれぞれ反復的に往還する二つの循環過程が存在し、これに別の消費過程が間歇的に貫入するパターンが抽出された。さらに、こうした循環過程と並んで、下野—北総回廊の北側に連続するさらに大きな循環過程も抽出された。この二つの循環の関係についてはよくわからないことが多いが、仮に時間的な新旧関係を認めるにせよ、その部分的な並存を否定することは困難であり、両過程はある期間並存し、交差した可能性を残しておきたい。

石器群の構造的な理解

前項までにおいて細石器石器群を 4 群に分類し、デザイン論的な観点（田村 1998）から各群の特徴を瞥見し、さらにその分布傾向からうかがわれるセトルメントパターンにまで言及してきた。すでに述べたように、ここで設定した各群がどのように時間軸に配されるのか、残念ながら、今のところ信頼のおける変遷案は提示されていない。相模野台地における層位的な出土状況を一般化できないことはすでに永塚により指摘されており（永塚 2002）、また、断片的に知られるこれ以外の地域における層位的な判断を敷衍することも困難であろう。さらに、目障りな単線的段階論者や曖昧な細石刃文化主義者は埒外に追いやるとしても⁷、小型石槍石器群との関係についても諸説あり、当分決着しそうもない。狭い幅の中にモザイク状にさまざまな石器群が配置され、とても清楚に理解できない、といった状況なのだろう。そこで、ここでは視点を転じて、遠近法的に石器群の構造的な透視し、今後の編年的研究への前提条件を整備しておきたい。

まず、ここに抽出された石器群と同型的な関係態におかれる石器群がすでに提示されていることを確認したい。下野—北総回廊南部、下総台地における小型石槍石器群にはいくつかの石材消費戦略を分節基準とする石器群が知られている（田村 2001b, 2003）。その盛期における変異については、例えば次のような分類が可能である。

石器群 a GZ I の各種珪化岩を消費する石器群である。特に GZ I b の珪質頁岩が選択的に消費される。(田村 2001) における尖頭器石器群 C2 及び尖頭器石器群 E2 が含まれる。趨勢として、前者から後者へという時間的な変化が推察される。富里町東内野遺跡や南河原坂遺跡の諸地点などが含まれる。集中地点の大きさや廃棄物量から DPB の大きな遺跡がある。

石器群 b GZ II a (高原山) の黒曜石を多量に

消費するグループである。尖頭器石器群 B としたものの一部が相当する。印西市木苅峠が代表的な遺跡であるが、ここでは石器群 A2 (珪質泥岩製細石刃) が共伴した。多量の調整剥片の集中する集中的石材消費地点と小規模な消費地点とが階層的な秩序を形成している。

石器群 c GZ Vc (信州系) の黒曜石を消費するグループである。尖頭器石器群 E1 が相当する。船橋市西の台遺跡ユニット 1～5、市原市武士遺跡第 7 文化層 B などが典型的な遺跡である。石器群 b と同じような階層性が認められる。

石器群 d GZ III a・b～GZ IV a・b の珪質泥岩を消費するグループである。尖頭器石器群 C1 と D が該当する。印旛村平賀一ノ台遺跡、四街道市池花遺跡第 3 文化層などがあげられるが、遺跡数は必ずしも多くはない。しかし、石器群多様度が高く、DPB の大きな遺跡がある。

今のところ石器群 b のように高原山産黒曜石を多量に消費する細石器石器群は知られていない。しかしながら、すでに検討したように、石器群 A2 のギャザリング・ゾーンは完全に石器群 b と重複していることを考慮すると、小型石槍石器群と細石器石器群との間には表 3 のように完全な対応関係が得られることがわかる。そのように考えれば、細石器石器群は尖頭器石器群とは、ある位相で同型的であるということができよう。

両系列(石器群)の関係については、石器群 A2 と石器群 b との部分的な交差関係が認められるものの、ここではこれ以上に説得力のある議論を展開することはできない。しかし、ここで抽出された石器群の同型性という視座は、細石器石器群の歴史を考察する上で貴重な示唆をあたえてくれるはずである。

この問題は後期更新世における遊動的な狩猟・採集民の生産様式の地域性と歴史性という大きなテーマに抵触している。RIM 三相における R、とりわけ石材資源の不均等分布は、その領有をめぐる特殊な力関係と固有のネットワークを再生産していたはずである。ここで抽出された構造的な同型性はこうした再生産構造そのものの歴史的な水準を指し示すものであろう。この同型性を醸成した地域的な枠組みにおいては、石器群相互の時間的な推移と変換という現象の背後に、地域開発戦略の累積と相互に重複するネットワークを透視することが可能である。しかし、残念ながら、このネットワークの歴史的な展開過程については、今しばらく沈黙しなければならぬ。理論的な、あるいは方法論的な大枠は定まった。今後はさらに基礎的でピース・ミールな調査と分析を心がけることにしよう。

謝辞 石材調査関係における国武貞克氏、吉野真如氏、加納実氏の献身的なご協力に深謝いたします。秋の新潟における珪質泥岩質ノジュールの諸岩体発見によってようやく画竜、点睛を得た感がいたしました。千葉市埋蔵文化財センターの皆様には土気地区の石器群観察のご便宜をはかっていただきました。堤隆氏には掲載についてのご配慮をいただきましたが、ご期待に添えたかどうか、心もとないものがあります。

註

- 1 筆者は後期旧石器時代前半期にすでに細石器石器群は成立していた、という学史的にみても常識的な立場をとっているが(田村 2001a)、本論でいう細石器石器群とは(大方に習い)石刃製細石器(世界先史学的にはむしろ特殊な存在であろう)を組織的に

表3 細石器石器群と尖頭器石器群との構造的な同型性

尖頭器石器群	細石器石器群
石器群a	石器群A1
石器群b	石器群A2
石器群c	石器群B
石器群d	石器群C

量産する特殊な石器群をさしている。いうまでもなく、いわゆる台形状石器やらナイフ形石器などとよばれている石器類の一部には非石刃製・剥片製細石器が多数含まれている。細石器という大きな系統の中で石刃製細石器＝特殊形態を理解することが大切である。

- 2 例えば稲田孝司は、後期旧石器時代後半期には、台地や特定石材原産地周辺にはすでに部族的集団が結成されていたことを指摘し、このような部族間の交通関係という観点からさまざまな地域的な文化的事象を解釈しようとしている（稲田 2001）。残念ながら稲田のせつかくの問題提起も、分析によって立つ基盤ともいえる部族的集団やその遊動領域の設定手続きに関する配慮が不十分であり、その立論の基礎を脆弱なものとしている。
- 3 後期旧石器時代における黒色頁岩及び黒色緻密質安山岩の原石採集範囲についてはよくわからない。始良 Tn 火山灰降下直後までの古利根川の流路は加須低地から中川低地を南流し、下野一北総回廊南端部で渡良瀬川と合流していたらしい。このことから、GZ II 南端周辺と GZ III d との境界付近までは理論的に採集可能範囲と考えられる。火山活動による利根川の流路変更と両石材の供給関係の変化は今後の研究課題としたい。
- 4 袖ヶ浦市前三舟台遺跡（佐伯 1992）の縄文時代草創期石器群に使われている黒色緻密質安山岩は万田野層産かと推測されるが、報告書に図示されている資料（11 例）に基づいて、原石のサイズを推定すると、長さ 60mm～100mm、幅 40mm～60mm 程度のやや扁平な円礫であることがわかる。この円礫を挟み割りで薄くして有舌尖頭器が製作されている。
- 5 黒曜石をはじめとする石器や石器石材の移動に関する民族誌的なデータは（Torrence 1986）に多く引かれているが、縄文時代の研究には有益ではあろう。狩猟行動と石器石材に関する民族誌的・歴史的研究としては（Holen 1991）が興味深く、示唆的であった。また、派遣部隊とシーズナル・キャンプの区別は重要な視点であるが（堤 2003）、その分別の難しさについては折紙付きである（Rensink *et al* 1991）。
- 6 文物移動の実際についてはオーストラリアの民族誌がある。ここでは貝殻、石器石材、オーカー、ピトゥリ（一種の興奮剤、ブーメランなどが盛んに移動しているが、ブーメランは 1,200 キロメートル、ピトゥリでは 800 キロメートルという移動が確認されている。ピトゥリの場合、2～3 週間で 480 キロメートルを、オーカーでは 1 日あたり 30 キロメートル移動する事例がある。さらに、モロンガという儀式は 25 年間という歳月を費やして 1,600 キロメートルを移動・交換されたという記録がある（Lourandos 1997）。こうした事例からも、旧石器考古学的な遠近法的時間軸からすれば、ほとんど瞬間的に列島規模での複雑な情報伝達がおこわれていたと考えて何らさしつかえはないであろう。各地域集団は共時的に技術知を共有していたはずである。したがって、共同体間の温度差を先験化する傾斜編年＝拡散図式は遠近法的な錯視にすぎない。
- 7 「細石刃文化」という用語＝概念については佐藤の批判するとおり多くの困難がある（佐藤 2003）。今や古典的な（＝時代遅れの！）クラークの定義においてすら、文化とは型式学的なカテゴリーの複相的（多価的）な組み合わせとされており（Clarke 1978）、細石刃のような特徴文物によって（単相的・単価的に）定義されるものでは決してない。クラークのようにノーマティブな立場に立つ場合でも、「細石刃文化」とはむしろカルチャー・グループあるいはテクノ・コンプレクスに相当する概念といえるだろう。ただし、筆者がすでに再三指摘しているように（田村 1998）、このような型式学的なカテゴリーによってのみ構築された概念体系は棄却されるべきである。

引用参考文献（表 1 及び表 2 出典含む）

- 會田容弘 2001 「福島県会津市笹山原 No.16 遺跡」『第 15 回東北日本の旧石器文化を語る回予稿集』144～149 頁
- 天野努 1973 「地国穴台遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』（財）千葉県都市公社 387～463 頁
- 有沢要ほか 1993 『高岡遺跡群Ⅱ』（財）印旛郡市文化財センター
- 安斎正人 2002 『旧石器社会の構造変動』同成社
- 稲田孝司 2001 『遊動する旧石器人』岩波書店
- 今村仁司 1993 『アルチュセールの思想－歴史と認識－』講談社学術文庫 講談社
- 宇田川浩一 2000 「船尾白幡遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古 1』千葉県 194～195 頁
- 太田文雄 1994 『石揚遺跡』（財）千葉県文化財センター
- 大原正義 1978 『佐倉市星谷津遺跡』（財）千葉県文化財センター

- 落合章雄 1998 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』(財)千葉県文化財センター
- 落合章雄 1999 「石頭第2遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』(財)千葉県文化財センター 7~82頁
- 加納実・国武貞克・吉野真如 2003 「房総の石器石材—白滝層の珪質頁岩—」『史料研究財団だより』第14号 千葉県史料研究財団 5~6頁
- 川口潤 1993 『白草遺跡Ⅰ・北篠場遺跡』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 菊池健一 2002 『川崎遺跡・草刈場北遺跡・味噌草野遺跡』(財)千葉市文化財調査協会
- ギャンブル C. (田村隆訳) 2001 『ヨーロッパの旧石器社会』同成社
- 桑原護 1994a 「大椎第1遺跡旧石器時代」『土気南遺跡群Ⅵ』(財)千葉市文化財調査協会 86~105頁
- 桑原護 1994b 「北河原坂第2遺跡旧石器時代」『土気南遺跡群Ⅵ』(財)千葉市文化財調査協会 386~405頁
- 小谷龍司 1998 『富里第2工業団地土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査』(財)印旛郡市文化財センター
- ゴドリエ M. (山内和訳) 1986 『物質と観念』叢書・ユニベルシタス 法政大学出版局
- 小林清隆 1982 『三里塚馬場遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 佐伯秀人 1992 『千葉県富津市前三舟台遺跡』(財)君津郡市文化財センター
- 酒井弘志 1998 『宮内井戸作遺跡Ⅰ地区』(財)印旛郡市文化財センター
- 榊原弘二 1999 『主要地方道千葉竜ヶ崎線埋蔵文化財調査報告書』(財)千葉県文化財センター
- 佐久間豊 1983 「旧石器時代」『清水川台遺跡発掘調査報告書』(財)君津郡市文化財センター 10~20頁
- 佐藤達夫 1974 「無土器(先土器)文化の石器はどのような変遷をみせたか」『日本考古学の視点』上(斎藤忠編) 48~55頁 日本書籍
- 佐藤宏之 2003 「細石刃石器群研究のパースペクティブ」『日本の細石刃文化Ⅱ』八ヶ岳旧石器研究グループ 276~280頁
- 鈴木定明 1978 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅵ』(財)千葉県文化財センター
- 鈴木道之助 1974 「木刈峠遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』(財)千葉県都市公社 45~124頁
- 高木博彦 1973 「向原遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』(財)千葉県都市公社 285~361頁
- 高梨正 1969 「山砂利・砂の語るもの」『君津市史自然編』君津市 108~111頁
- 田村隆 1982 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅶ』(財)千葉県文化財センター
- 田村隆 1989a 『佐倉市南志津地区埋蔵文化財発掘調査報告書1』(財)千葉県文化財センター
- 田村隆 1989b 『千葉市荒久遺跡(1)』(財)千葉県文化財センター
- 田村隆 1994 『大綱山田台遺跡群Ⅰ』(財)山武郡市文化財センター
- 田村隆 1998 「移行の論理」『先史考古学論集』第7集 1~48頁
- 田村隆 2000a 「木刈峠再訪」『千葉県史研究』第8号 千葉県 84~113頁
- 田村隆 2000b 「地国穴台遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古1』千葉県 190~191頁
- 田村隆 2001a 「重層的二項性と交差変換—端部整形石器範疇の検出と東北日本後期旧石器石器群の生成—」『先史考古学論集』第10集 1~50頁
- 田村隆 2001b 「尖頭器石器群の石材消費戦略」『千葉県文化財センター研究紀要』22 49~63頁
- 田村隆 2003 「林小原子台再訪—東部関東における長者久保—神子柴石器群—」『考古学』Ⅰ 1~51頁
- 田村隆・国武貞克・吉野真如 2003 「下野-北総回廊外縁部の石器石材(第1報)—特に珪質頁岩の産状と分布について—」『千葉県史研究』第11号 (1)~(11)頁
- 田村隆・国武貞克・吉野真如(投稿中) 「下野-北総回廊外縁部の石器石材(第2報)」『千葉県史研究』第12号
- 堤 隆 2003 「細石刃石器群の石材需給とセトルメントシステム—中部・関東を中心とした—考察—」『日本の細石刃文化Ⅱ』八ヶ岳旧石器研究グループ 152~164頁
- 寺門義範 1993 「文六第1遺跡」『土気南遺跡Ⅳ』(財)千葉市文化財調査協会 43~306頁
- 永塚俊司 2000 『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』第1分冊 (財)千葉県文化財センター
- 永塚俊司 2001 『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ』(財)千葉県文化財センター

- 永塚俊司 2003 「南関東地域の細石刃文化」『日本の細石刃文化Ⅰ』ハケ岳旧石器研究グループ 184～233 頁
- 新田浩三 1994 『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ』第1分冊 (財)千葉県文化財センター
- 野口淳 1996a 「H 地点の旧石器時代石器群」『土気南遺跡群Ⅴ』(財)千葉市文化財調査協会 207～228 頁
- 野口淳 1996b 「I 地点の旧石器時代石器群」『土気南遺跡群Ⅴ』(財)千葉市文化財調査協会 229～255 頁
- 浜崎雅仁 1994 『美生遺跡群Ⅲ』(財)君津都市文化財センター
- 蜂谷孝之 1998 『干潟工業団地埋蔵文化財発掘調査報告書』(財)千葉県文化財センター
- 林田利之 1991 『油作第1遺跡発掘調査報告書』(財)印旛都市文化財センター
- 林田利之 1992 『駒井野荒追遺跡』(財)印旛都市文化財センター
- 林田利之 1992 『平成3年度富里町埋蔵文化財発掘調査報告書』富里町
- 林田利之 1994 『木戸先遺跡』(財)印旛都市文化財センター
- 古内茂 1973 「船尾白幡遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』(財)千葉県文化財センター 113～124 頁
- 古内茂 1981 「No.5 遺跡 先土器時代」『木の根』(財)千葉県文化財センター 13～29 頁
- 道澤明 2002 『針ヶ谷遺跡』(財)総南文化財センター
- 森本和男 1992 「コンピュータによる細石器遺跡の分析」『研究連絡誌』第34号 (財)千葉県文化財センター 3～29 頁
- 森嶋秀一 1998 『寺野東遺跡Ⅰ(旧石器時代編)』(財)栃木県文化振興事業団
- 矢本節朗 1995 『土木保守管理センター等埋蔵文化財調査報告書』(財)千葉県文化財センター
- 矢戸三男編 1987 『佐倉市向山谷津・明代台・木戸場・古内遺跡』(財)千葉県文化財センター
- 吉田直哉 2002 「小野山田遺跡群稲荷谷遺跡」『第8回石器文化交流会発表要旨』37～43 頁
- 吉林昌寿 1999 『間野台貝塚(第2次)』(財)印旛都市文化財センター
- 渡辺修一 1991 『四街道市内黒田遺跡群』第1分冊 (財)千葉県文化財センター
- Clarke, D. 1978 *Analytical Archaeology (second edition)*, Columbia University Press.
- Holen S.R. 1991 Bison Hunting Territories and Lithic Acquisition among the Pawnee: An Ethnohistoric and Archaeological Study, in A. Montet-White and S. Holen (eds.), *Raw Material Economie among Prehistoric Hunter-Gatherers*, University of Kansas. 399-411.
- Ingold, T. 1988 Notes on the foraging mode of production, in T. Ingold, D. Riches and J. Woodburn (eds.), *Hunters and Gatherers I, History, Evolution and Social Change*, BERG.
- Lourandos H. 1997 *Continent of Hunter-Gatherers, New Perspectives in Australian Prehistory*, Cambridge University Press.
- Rensink E. and Kalen J. and A. Spieksman 1991 Patterns of Raw Material Distribution in the Upper Pleistocene of Northwestern and Central Europe, in A. Montet-White and S. Holen (eds.), *Raw Material Economie among Prehistoric Hunter-Gatherers*, University of Kansas. 399-411.
- Torrence R. 1986 *Production and Exchange of Stone Tools*, Cambridge University Press.

細石器文化と海上渡航

池谷 信之

1 はじめに

国内で独特な発達をみたナイフ形石器群とは異なり、列島内における細石刃石器群の成立には北海道と朝鮮半島の2つのルートが介在したものとみられている。

しかし最寒冷期はともかく、細石器段階になれば対馬海峡（東水道・西水道）には既に海水が流入しており、海上渡航の問題を避けて通ることはできない。いっぽう削片系細石核で特徴づけられる北方系細石刃石器群の北海道への流入は、最寒冷期前後にまで遡上することが確実視されており、北海道はサハリンの北端を介して大陸とに陸係されていたものとみられる。しかしここから東北北部への波及は、本州における細石器の登場と大差のない段階まで下るとされ、その時点では津軽海峡は確実に開口していたものと考えられる。

川口潤はこの北方系細石刃石器群の東北地方への波及の前に、極めて大きな障壁として津軽海峡が立ちはだかっていたことを説いている（川口 2003）。川口によれば、北海道最南端の細石刃文化期の遺跡である新道4遺跡や湯の里4遺跡があくまで北海道的であるのに対して、東北北部の細石器文化は少なからず北海道的要素が欠落するという。それが端的に表れるのが北海道産黒曜石で、青森県内の細石刃文化期の遺跡から出土する黒曜石は深浦産をはじめとする青森県内の黒曜石であり、北海道産が含まれていないことを指摘している。さらに北海道で認められる細石刃核のうち、本州側にもたらされたのは札骨型・白滝型・幌加型に限定されるという石核の型式学的な所見も加えている。川口は「北海道から本州へ渡ってきた」として単純に説明されることの多い北方系細石刃石器群の波及が、実は極めて限定的なものであったとし、したがって渡航の手段は舟ではないと考えている。

この川口の所説は、本州側からみて都合な要素が取り上げられて「移動」や「伝播」が語られている現状に対し、細石核型式とその石材の両面からの効果的な警鐘となっており、本州における北方系細石刃石器群の評価に再検討を迫るものとして評価できよう。

しかし私がここで問題とするのは、その後の論旨の展開である。近年の化学的な黒曜石原産地推定の進展に伴い、旧石器時代の「神津島産黒曜石」の分析例が飛躍的に増加しつつある（望月・池谷 1994 など）。神津島と伊豆半島との距離は最寒冷期でも約 40 kmあり、推定に誤りがなければ、旧石器時代に舟が存在したことを間接的に示す。

これに対して川口は以下の論拠を挙げて旧石器時代の「神津島産黒曜石」に疑問を投げかけている。①伊豆半島周辺（海域）に神津島類似の未知の黒曜石産地が埋もれている可能性。②黒曜石分析法への不信—かつて藁科哲男によって神津島産として同定されていた青森県内出土の黒曜石が、後に北海道豊泉産であることが判明した例があること。③旧石器時代の舟の製作技術や航海技術などの問題が解明されていないこと。そして「旧石器時代の舟が想定できるものであれば、細石器文化期の津軽海峡を挟んだ地域間の黒曜石や石器製作技術の往来はより緊密なものであってもいいように思われる。」と結んでいる。

本論ではこれら①から③までの問題の一つずつ取り上げ、川口の所論とは逆に、細石器文化に舟が存在した可能性が高いことを述べていく。

2 伊豆沖海底火山の可能性

いうまでもなく黒曜石は流紋岩質またはデイサイト質のマグマが急冷されることなどにより、結晶化が妨げられて生成する。島弧における火山のマグマは、カルクアルカリ岩系列の場合を除けば、玄武岩質→安山岩質→(デイサイト質)→流紋岩質へと次第に変化する傾向があることが知られている(守屋 1992)。第1図に示した伊豆半島の第四紀の火山も、箱根火山に代表されるように数十万年に及ぶ活動のステージの後半から終末にかけて、デイサイト質ないし流紋岩質マグマを噴出させる傾向を認めることが

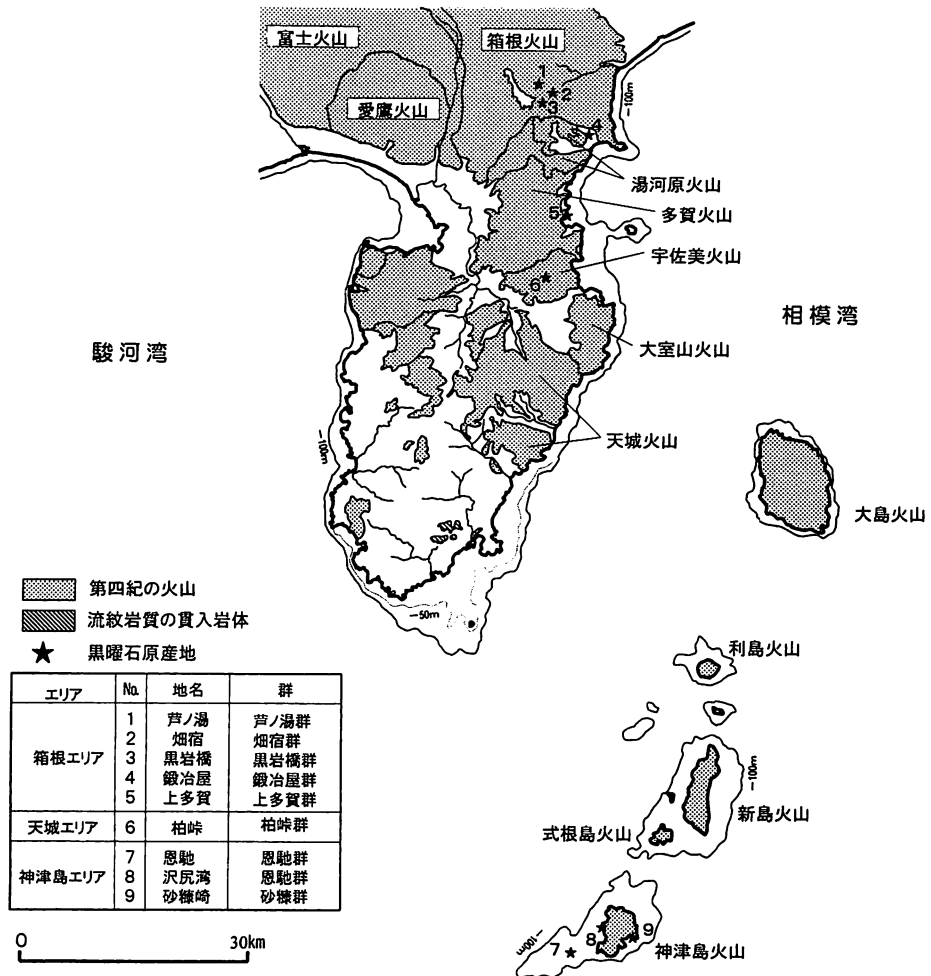
できる。またこの地域の火山が古くから火山学の主要なフィールドであったこともあり、黒曜石を生成可能な流紋岩質・デイサイト質溶岩の噴出する範囲は、かなり正確に地質図上に記載されていると考えてよい(倉沢 1971・土 1986 など)。したがって地上に露出している火山や貫入岩体中に、大規模な黒曜石の露頭が隠されている可能性は極めて低いものといえよう。

それでは細石器段階には地上にあった火山が海中に没しているという可能性はないだろうか。伊豆半島の第四紀火山を載せる基盤は、かつて伊豆地塊が亜熱帯付近にあった約200万年以上前に、海底火山の活動によって堆積した凝灰岩類である(小山 1993)。第1図で空白域となっている伊豆半島の南部から西部にかけては、こうして形成された湯ヶ島層群や白浜層群が地上付近に現れている。第1図にはまた、この時代の海岸線として想定しうる下限と上限である-100mと-50mの等深線もあわせて示してみたが、伊豆南端から連なる浅海域も、起伏の少ない海底地形からみて同じ凝灰岩類が続いているものとみられる(註1)。

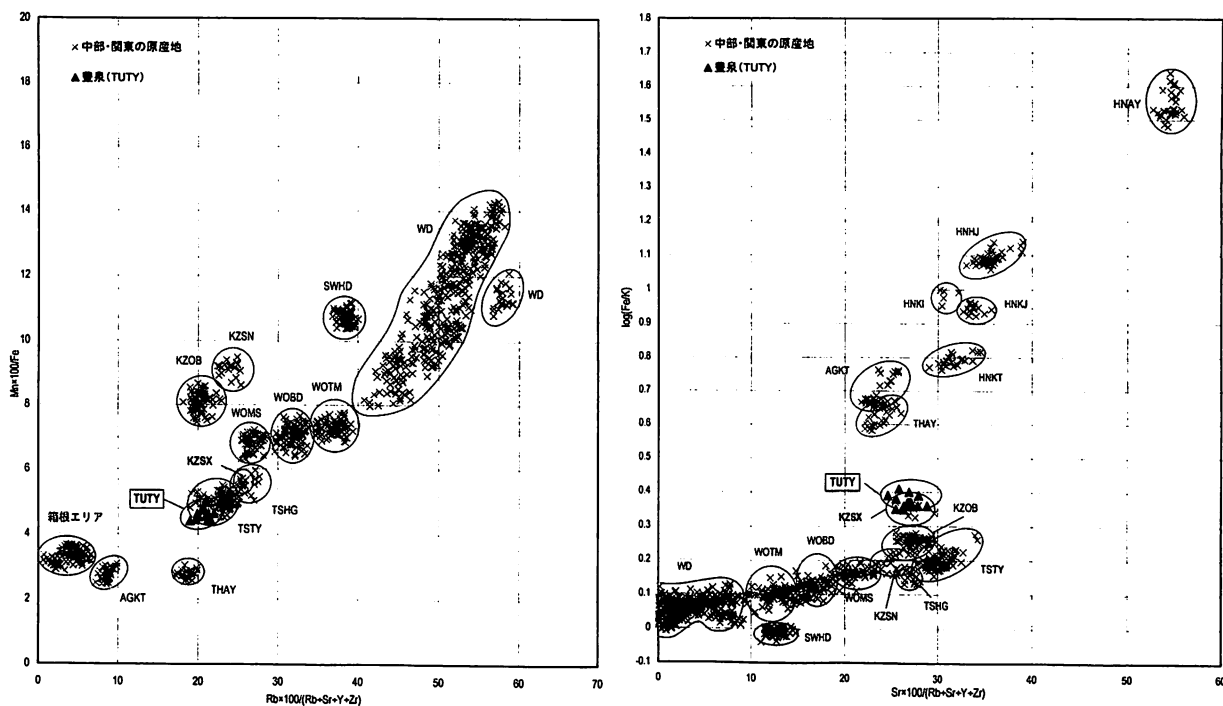
これ以外の伊豆半島西北海岸や東海岸は、多賀火山や宇佐美火山などの山腹がそのまま海底に没して急深の海岸が続いており、-100mまでの狭い範囲に神津島と類似する化学組成を示す火山が存在することは考え難い。

なお、15万年前以降、東伊豆周辺からその海底にかけて、小規模なマグマの上昇によって単性火山が形成される活動が現在まで続いている(東伊豆単性火山群)。これらの噴出物は玄武岩質が主体であるものの、一部に流紋岩質となるものがある。その中の一つであるカワゴ平火山は発泡質で軽石に近い黒曜石を噴出させているが、その年代は約3100年前である(嶋田 2000)。

わずかに残る可能性は湯ヶ島層群・白浜層群を突き抜けてくる流紋岩質の貫入岩体である。実際に下田付近に



第1図 伊豆半島周辺の第四紀火山と黒曜石産地



第2図 中部関東地方の黒曜石原産地と北海道豊泉産黒曜石の関係

露出している貫入岩体は、地元で「大賀茂」と呼ばれている豆粒状の黒曜石をわずかに産出している。しかしこうした小規模な貫入岩体では、神津島黒曜石のような多量の供給量を説明しにくい。

愛鷹・箱根山麓では細石器段階に神津島産黒曜石主体となる（池谷・望月 1998）。範囲を東京から伊豆にまで広げて縄文時代をみていくと、前期には箱根エリアや天城エリアの比率が漸増するものの、神津島産黒曜石の供給は草創期から中期中葉までほぼ途絶えることがない（池谷 2003）。さらにこの間の「神津島産黒曜石」と分析された黒曜石を観察すると、斑晶や透明度、節理面の状況などの外観に変化を認めることはできない。

仮に川口が主張するように旧石器の「神津島産黒曜石」が、伊豆半島周辺に埋もれた別の産地から供給されたとするなら、「埋もれた神津島産」から「神津島の神津島産」への移行が縄文時代のどこかで行われていることになる。しかもその移行は黒曜石の外観でも区別がつかず、原産地組成の推移にも断絶をはさまないという奇跡的なものだったということになってしまう。

3 神津島産と豊泉産黒曜石の原産地推定を巡る問題

川口が挙げた2つめの根拠、黒曜石の化学分析の信頼性を巡る問題についてここでは検討してみる。筆者は2003年7月に蛍光X線分析装置（セイコーインスツルメンツ社製SEA2110）を自宅に設置し、これまで中部・関東の黒曜石原産地を中心に計測を行っている。第2図にはその結果によって得られた原産地の判別図を掲載した。測定方法や判別図に用いた元素などについては紙数の関係からここでは省略するが、共同研究者である望月明彦の方法（保坂・望月・池谷 2001 など）に準拠しているの、詳しくはそちらを参照されたい（註2）。

同時に望月研究室より北海道豊泉産黒曜石（TUTY）を借用して計測し、図上にプロットしておいた（第2図▲印）。豊泉産黒曜石（TUTY）は左の判別図では一部が蓼科冷山群（TSTY）と重複するが、神津島恩馳群（KZOB）や同砂糠崎群（KZSN）とはかなり離れた位置にプロットされている。問題は右の判別図であるが、ここではKZSX（砂糠崎X群）とした一群と一部が重なっている。KZSX（砂糠崎X群）は池谷が行った最近の神津島砂糠崎における踏査で発見した原石群で、広い砂糠崎の中でその噴出地を限定できていないため暫定的に「X群」を付けている。しかし左の判別図を参照すればこれら2つの原産地を区分することは可能で、この2つの判別図を用いるかぎり、神津島産黒曜石と豊泉産黒曜石は問題なく分離できると考える。

筆者の手元には藁科哲男が神津島産と推定した青森県内の出土の黒曜石のデータがない(参考文献不詳のため)。したがってこれ以上は推定の域を出ないが、藁科の原石データにすでに KZSX (砂糠崎 X 群) が含まれ、最も化学組成の近い KZSX (砂糠崎 X 群) と誤判別した、あるいはたまたま原石の風化が激しく(註 3)、本来の計測値が得られなかったなどの原因が考えられる。

こうした神津島黒曜石の最大到達範囲を更新するような重要な分析結果については、当然のことながら複数の方法でクロスチェックする慎重さが必要であると考え。ただしこれは分析者ではなく、分析を依頼する考古学研究者側に求められることではあるが。

筆者が望月明彦に依頼して分析を行った土手上遺跡 BBV 層出土石器 (愛鷹・箱根旧石器時代第 1 期) には、472 点の神津島産黒曜石が含まれていた (池谷 1994)。府中武蔵台遺跡の X 層上部で検出され (鎌木・東村 1984) その存在が注目されて以来、初めての旧石器時代の神津島産黒曜石のまとまった検出例であったが、この結果は引き続き行われた中性子放射化分析でも追認されている (戸村・興水・池谷 1994)。望月の分析結果が伏せられて分析者に渡されたのはいうまでもない。

4 細石器段階の海上渡航の可能性

a. 細石器段階の津軽海峡を漕ぐには

ここでは旧石器時代の航海の可能性を論じる前に、手こぎの舟で当時の津軽海峡を漕ぎ渡ることを想定したとき、克服しなければならない幾つかの条件を、筆者の約 10 年あまりのシーカヤックでの経験も含めて挙げておこう。

1. ハイポサーミア (低体温症)。水中では陸上の同じ温度と比較すると、約 25 倍のスピードで体温が奪われるとされている。現在でも津軽海峡の真冬の海水温は 5 度前後まで下がるが、この水温では約 30 分で意識不明となり、90 分で死亡するといわれている。流水の浮かぶ零度に近い海では意識不明までわずかに 15 分である。数年前に 12 月の伊豆南端を漕いだ筆者のグループが、最後尾で転覆して脱艇した仲間をしばらくの間置き去りにするという「事故」があった。先を行っていた者には助けを求める声が届かなかったが、「遭難者」は寒さのせいであつという間に声が出なくなった、とその時の状況を語っている。温暖といわれる伊豆の海でも、冬季にはこうした状況になる。転覆しなくとも現在よりもさらに水温の低かった津軽海峡をデッキのないオープンな舟で漕ぐときには、水しぶきが奪う体温は無視できないものがある。

2. 流水。細石器段階の平均気温を現在よりもさらに 2 度～3 度低かったとすれば、参考になるのは北海道北部の気象条件になるだろうか。アムール川河口から流れ出す淡水が引き金となってオホーツク海に供給されている流水は、サハリン北端が陸系されていることによって旧石器時代には日本海に流れ出したものと考えられているが (佐藤 2003p.279)、少なくとも冬季には開口していた津軽海峡にまで到達していたものと予想される。革張りのカヤックは何枚かの皮が縫い合わせられてフレームに張られており、流水との接触はその繋ぎ目に致命的なダメージを被る可能性がある。

3. 海流・潮流。海流は黒潮などのように地球規模の海水の対流 (渦流) およびそれから派生する流れを指し、潮流は潮の満ち引きや風などによって生じる局所的な流れをいう。海流のおおまかな方向が年間を通して一定であるのに対して、潮流は 24 時間の中でも方向が変化する。

今の津軽海峡には黒潮から派生した対馬海流の先端部が西から東へ流れ (津軽海流)、三陸沖まで到達している。しかし最終氷期以降の太平洋側の黒潮の位置 (大場・安田 1992)、日本海の塩分低下 (多田 1997p.296) を考慮すると、黒潮の末端が津軽海峡まで到達していたとは考えにくい。むしろ横断に際して障害となるのは、今でも津軽海峡を船の難所としている潮流であったと思われる。鳴戸・関門・来島という日本の三大急潮流がいずれも瀬戸内海にあるように、潮流は閉塞された海域の出口で速度が強まる傾向がある。現在の津軽海峡 (水深 130m) は下北半島先端の大間と戸井の間が最も狭く、その距離は約 19 km であるが、海岸線を仮に 100m まで下げると約 8 km の幅まで狭まる。同様な事態は対馬海峡 (水深 130m) でも起きており、南北の両端を閉塞された日本海

の海水は、干潮時には太平洋側へかなりの速度で流れ出し、満潮時には逆に太平洋側から日本海側へ激しい潮流が流れ込んでいたことであろう。来島海峡の潮流の最大速度は 18 km に達するといわれる。場所も気候環境も異なるが当時の流速を予測する一つの目安にはなる。

4. 波浪。頂点がゆるやかなカーブを描く振幅の長いうねりは、手漕ぎの舟にとってもさほどの障害とはならない。しかしうねりと潮流や風の方向が異なる場合、あるいは潮流どうしがぶつかり合うと、頂点がブレイクした「三角波」が生じる。三角波に追われて進む場合、推進力の乏しい手漕ぎの舟はその頂部付近で失速状態になりやすく、斜めに波間に落とされて転覆する原因となる。こうした条件ではより速力が出る細身の舟を選ぶ、サーフィンの技術を身につけるなどの対応が必要となる。

津軽海峡は現在でも津軽海流と複雑な潮流が生み出す三角波が、壁のように行く手に立ちはだかっていることがあるという。この津軽海峡をシーカヤックで横断するイベントが毎年開かれている。図3は2000年に行われた第5回大会に参加した友人が撮影したものである(註4)。当日は大潮であったため、微風ながらこれだけの三角波が立っていた。カヤックのままに転覆する直前の写真も見たが、舟が45度以上の角度で立ちあがり、船首は海中に刺さっていた。

5. 風。シーカヤックの場合を例にとると、風速10mを超えると人間の体じたいが舟から突き出た帆のように風を受けることになり、筆者のような平均的なレベルのパドラーには対処が困難となる。

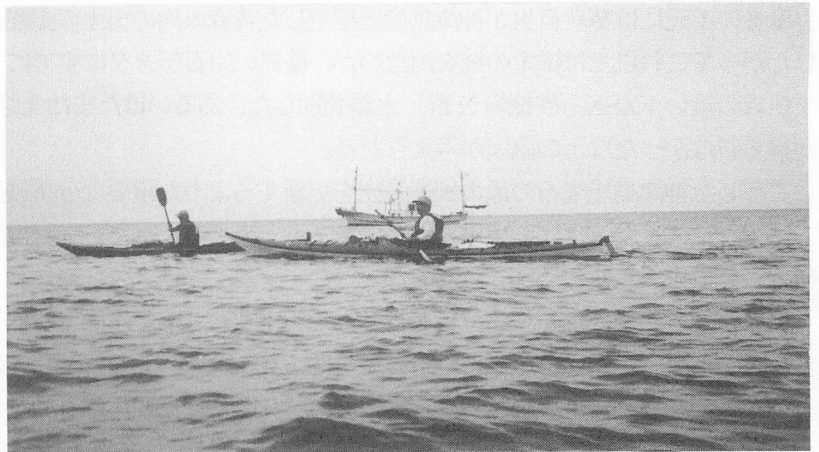


写真1は午前10時すぎに西から撮影。右端に龍飛崎がわずかに見える。
写真2は伴走船の上から、写真3はカヌーからウエストレベルで撮影。手前に船体の一部が映る。
写真2の中央やや上には波にカヌーが隠れ肩より上しか見えていない人物がいる。

第3図 津軽海峡横断イベント

6. 舟の巡航速度。グラスファイバー製で重量が 20 kg強と軽く、スピードが出るようになった現代のシーカヤックでも巡航速度（対地速度ではない）は約 8 km/h が限界である。津軽半島側からの津軽海峡横断を想定したとき、強い海流ないし潮流が西から東に流れていれば、船首は松前半島南端ではなくより東の海上に向けなければならない。その分だけ実際に漕ぐ距離は増えていく。紹介した第 5 回の横断イベントでは、龍飛岬西側の小泊港を出てまっすぐに北北西の位置にある松前港を目指した。しかし海流が予想以上に強いために大きく東に流され、最後は東から西に向かう反転流に乗ってようやく吉岡港に辿りついている。小泊港と吉岡漁港の直線距離は約 40 km であるが、実際に漕いだ距離はその 1.5 倍以上、所要時間は 9 時間 40 分であった。

津軽海峡横断についてこれ以上具体的な姿を想定するのは難しいが、厳冬期は 0 度近くまで下がる海水に流氷が浮かび、干満によって激しく潮流が出入りし、潮目には三角波が立ちただかっていたことであろう。この環境では立木等につかまって漂流したとしても生きたままどり着く可能性は極めて低い。成功する確率の高い横断をするならば、冬季を避け小潮など潮流の弱まるタイミングをねらうのが賢明である（註 5）。

b. 細石器段階における航海の可能性

細石器段階の津軽海峡はまさに大きな壁であった。その環境は当時の伊豆南端～神津島付近に想定される海況（池谷 2003p.126）よりもさらに一段と過酷なものである（註 6）。「旧石器時代の舟が想定できるものであれば、細石器文化期の津軽海峡を挟んだ地域間の黒曜石や石器製作技術の往来はより緊密なものであってもいいように思われる。」という川口の仮定は、海況によって異なる航海の難易度が考慮されていない。

確かに川口が指摘したように、旧石器時代の舟や航海技術についてはまったく不明である。また日本で縄文時代以降に登場する丸木舟は、旧石器時代の石器類では削り出すことがほとんど不可能であり、その航海の想定をより難しくしていることも事実である。しかし、約 5 万年前にはロンボク海峡を渡って「サフル大陸」に人類が到達していることから（ベルウッド 1989・1998）、旧石器時代の航海の可能性をまったく捨て去ることはできないし、最近ではウォレスラインを越えたフローレス島で 80 万年前というフィッシュントラック年代を示す石器の出土が報告されている（Morwood et al 1998）。

したがってここでは、北方民族の舟や気候環境などを考慮に入れながら、細石器段階にありうる舟の姿をあえて想定してみたい。前項で少し触れたように、極東から北米にかけて高緯度地方には地域によってパイダルカやウミアックなどとも呼ばれる革張りのカヤック（以下、スキンカヤック）が存在した（註 7）。シベリアおよび北米のエスキモー、コリヤーク、チュクチ、アリュートといった北方先住民族の間に伝えられたスキンカヤックは、木製の骨材に海獣などの皮革を張り合わせたもので、原木のサイズに規制される丸木舟と比較すると、キールラインやバウ・スターン形状の自由度が高く、しかも軽量でスピードが出しやすいという優れた特徴を備えている。両足を前に出してペダルを踏み込み、膝は下からデッキに当てられて常に左右のバランスをとっている。円形をした開口部は大人一人がやっと入れるくらいに狭く、着用したアノラックの裾をコーミング（コクピット回りのフレーム）に巻き付けることで、ほぼ完全な水密構造が得られている。水温が 0 度近い極北の海での転覆は命取りになるが、こうした構造がエスキモー・ロールという危機回避の技術を発達させた。

スキンカヤックを作るためには、少なくとも骨材となる木を削りだして組み合わせる技術、革を縫い合わせる技術、漏水しないための革鞣しの技術が必要である。

木村英明の紹介したジョホスカヤ遺跡は細石器文化でも終末段階の様相を示し、その年代も 9000 年前まで下るものとみられているが、ほぞ穴のあるソリの滑走部材が出土している（木村 2001）。木村は木器をつくる技術が旧石器時代に胚胎している可能性も指摘しているが、木を削り出し組み合わせる確かな技術が存在したことは確実である。縫製については骨針がシベリアにおける細石器文化に広く認められ（木村 1997）、その技術の存在を推定することはできる。鞣しについては皮という対象物の性質上その存在を立証することが難しいが、スキンカヤックを作るのに必要な 3 つの技術のうち、年代の前後はあるものの、その 2 つはすでに北方系細石器文化の要素として存在しているのである。またスキンカヤックを構成する木の骨材は、磨製石斧が必要な丸木舟とは異なり、細石器や骨角器でも十分に削り出せると思われる（註 8）。

5 おわりに

手漕ぎの舟にとって、海峡横断は沿岸の航海とは異なった知識や技術・装備が必要である。その難易度は距離よりもむしろ海流・潮流などの海況に左右される。愛鷹・箱根山麓に神津島産黒曜石がもたらされたのは、後期旧石器初めの第1期と細石器段階（第5期）であり（池谷 1998）、伊豆と神津島の距離が最も近かったはずの最寒冷期には供給が途絶えている。これには海水面の低下によって神津島・式根島・新島・利島がほぼ陸係され、伊豆との間が海峡に近い状態となって、潮流の流速が増したことが関係しているものと思われる（池谷 2003）。

北海道産の黒曜石が早期になってようやく東北地方にもたらされるようになるのは、航海技術の向上・海水温の上昇などに加え、海水面の上昇によって海峡の幅が広がり、潮流が弱まったことが影響している。

神津島産黒曜石の存在は旧石器時代の舟の存在を間接的に物語っている。北海道を舟で出た「北方系」の住民が結果的に東北に漂着することはありえるが、当時の津軽海峡の環境を考えると、流木などにつかまった漂流では、生きたまま対岸にたどりつくのは極めて難しいといわざるをえない。そして気候環境や動物相、石器などを考慮に入れたうえで、存在したはずの細石器段階の舟を想定すれば、こうしたスキнкаヤックの原形が視界に入ってくる。それをもってしても、津軽海峡は大きな障壁であったのだろう。東北地方に到達した北方系細石器刃石器群に北海道産黒曜石が伴わないのは、少なくともその航海が反復されなかったことを示している。また東北地方で出土する札幌型・白滝型・幌加型に限定された削片系細石器刃核は、海峡を渡り得た限られた人々の技術的系譜を物語るものであろう。

註

1. 海底に堆積した凝灰岩の地上付近への露出が示すように、伊豆の南半は隆起傾向にある。
2. 和田（WD）エリアの群別（鷹山群など）には再検討の余地があり、ここでは細分せずに和田（WD）エリアとして一括して示した。
3. 黒曜石表面の風化の進行は鉄（Fe）の増加として表れることが多く、右側の判別図では本来の位置よりもより下方にプロットされる。
4. 写真は本間紀二氏・小泉源一郎氏から提供を受けた。両氏のご厚意に感謝申し上げる。
5. 2002年に行われた戸井一大間の間を手漕ぎの伝統的な和舟（準構造船）で漕ぎ渡るイベント「津軽海峡ロマンロード実証事業」では、実際に小潮の日が選ばれた。
6. これまで筆者は旧石器時代の伊豆南端～神津島に予想される海況とその航海技術上の制約から、神津島産黒曜石の供給について「伊豆沿岸をホームゲレンデとする集団の存在を想定させるを得ない」（池谷 1999p. 256）こと、また冬季における渡航がきわめて困難であることを指摘してきた（池谷 2003）。これに対して堤は南関東における信州系黒曜石と神津島産黒曜石の非共存という状況と、厳冬期に予測される信州系産地の閉鎖から、「おなじ1年のサイクルにおいても、山の石（信州系）と海の石（神津島系）」の供給シーズンが異なっていた可能性を示すとして、冬季に神津島産黒曜石の採取と供給が行われ（堤 2002 など）、「本土の集団が神津島に渡航したとみるのが妥当」と考えていた（堤 1998）。
ところが 2003 年の論稿では突然として「航海等多大な労力と危険を伴う島嶼部の神津島産黒曜石の獲得作業」に「伊豆半島を領域にもつ集団」を登場させている（堤 2003p. 161）。参照した先行研究があるならば、明示して論術するのが当然の作法であろう。いっぽうで「信州産原石の獲得の不可能な時期は、神津島産原石が獲得・供給されるという補完的なあり方」という記述にあるように、シーズンリティの着想は維持されているが、池谷が指摘し続けている冬季の渡航という問題に触れないのは、論旨の完結性を欠く。そもそも、「愛鷹・箱根から伊豆半島周辺を活動領域に含む集団」を想定するならば、その採取活動を信州系産地の閉鎖する冬季に限る必要もないではないか。伝えられる矢出川遺跡群における神津島産黒曜石の一定量の存在は、冬季における信州系原石の枯渇を神津島産原石で補ったものであろう。その場面で機能したと予測される「一般的互酬性」は、神津島黒曜石をもたらした集団が既にある程度の海洋適応を遂げていたことを想記すれば、より具体的なイメージで語る事ができる。
7. 人類学者でありシーカヤッカーでもあるディビッド・W・ツィマリーによれば、狩猟用のトラディショナルなスキнкаヤックには 2つの大きな使用目的があるという。1つは内陸の湖沼や川でカリブーを捕獲するためのもの、そしてもう一つは海獣猟のためのものである（ディビッド・W・ツィマリー 1999・2000）。カヤックは渡河や飲水のため内水に入り込んだカリブーに気づかれずに接近するために用いられており、漁撈だけがその用途でないことに注意する必要がある。

またツマイリーによればスキнкаヤックの存在を示す最も古い証拠は、アリューシャンのシューアード半島から出土した船体帆布の一部や、シベリアのイーストケープ付近の墓地から出土したウミアックタイプのカヤックの模型で、いずれも約2000年前のものであるが、パドルや投槍器などのカヤックとセットになる備品などから、その起源はさらに2千年以上遡ると推定している。

8. 近年、国内においてもトラディショナル・スキнкаヤックをハンドメイドし、自艇として使うカヤッカーが増えている。その開拓者の一人である洲澤育範は、アリュートスタイルのバイダルカの製法を現地から持ち帰っているが、骨材・パドルをキワゾリ・丸銃・槍砲という日本の伝統的な工具だけで仕上げている(洲澤1995)。

参考文献

- 池谷信之・望月明彦 1998 「愛鷹山麓における石材組成の変遷」『静岡県考古学研究』30
- 池谷信之 2003 「潜水と採掘、あるいは海を渡る黒曜石と山を越える黒曜石—環中部高地における縄文時代神津島黒曜石と信州系黒曜石の盛衰、その予察として—」黒曜石文化研究2
- 大場忠道・安田尚登 1992 「黒潮域における最終氷期以降の環境変動」第四紀研究31
- 川口潤 2003 「北海道北部地域の細石刃文化」『シンポジウム日本の細石刃文化Ⅰ』八ヶ岳旧石器研究グループ
- 鎌木義昌・東村武信他 1984 「黒曜石、サヌカイト製石器の産地推定による古文化交流の研究」『古文化財の自然科学』同朋社
- 木村英明 1997 『シベリアの旧石器文化』北海道大学図書刊行会
- 木村英明 2001 「酷寒のシベリア 人類の移住と拡散」『日本人はるかな旅1』NHK出版
- 倉沢一 1971 「伊豆半島の火山・火山岩」『伊豆半島』東海大学出版会
- 小山真人 1993 「伊豆半島の火山とテクトニクス」科学第63巻
- 佐藤宏之 2003 「細石刃石器群研究へのパースペクティブ」『日本の細石刃文化Ⅱ』八ヶ岳旧石器研究グループ
- 嶋田繁 2000 「伊豆半島、天城カワゴ平火山の噴火と縄文時代後～晩期の古環境」第四紀研究vol.39
- 洲澤育範 1995 「シーカヤックの原風景を追って」カヌーライフ1995年5月号
- 土隆一他 1986 『静岡県地質図』内外地図株式会社
- 堤隆 1998 「細石刃石器群における黒曜石利用について—信州産黒曜石を中心に—(予報)」第10回長野県旧石器文化研究交流会発表資料『シンポジウム信州産黒曜石をめぐる諸問題』
- 堤隆 2002 「中部高地における黒曜石研究の現状と課題」黒曜石文化研究1
- 堤隆 2003 「細石刃石器群の石材受給とセトルメントシステム—中部・関東地方を中心とした一考察—」『シンポジウム日本の細石刃文化Ⅱ』八ヶ岳旧石器研究グループ
- ディビッド・W・ツィマリー 1999・2000 「シベリアとアラスカのカヤック QAJAQ」シーカヤッカーNo.1～No.4
- 戸村健児・輿水達司・池谷信之 1994 「放射化分析による沼津市土手上遺跡出土黒曜石の原産地推定」第38回放射化学討論会予稿集
- ピーター・ベルウッド 1989 『太平洋 東南アジアとオセアニアの人類史』法政大学出版局
- ピーター・ベルウッド 1998 「太平洋における人類の拡散—過去、現在、未来—」国際海洋シンポジウム『海は人類を救えるか』発表要旨 日本財団
- 保坂康夫・望月明彦・池谷信之 「黒曜石原産地と石材の搬入・搬出—丘の公園第2遺跡の原産地推定から—」山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター研究紀要17
- 望月明彦・池谷信之他 1994 「遺跡内における黒曜石製石器の原産地別分布について—沼津市土手上遺跡 BBV層の原産地推定から—」『静岡県考古学研究』26
- 守屋以智雄 1992 『火山を読む』岩波書店
- M. J. Morwood, P. B. O' Sullivan, F. Aziz & A. Raza 1998 「Fission-track ages of stonetools and fossils on the east Indonesian island of Flores」Nature vol.392

九州細石器文化における地域性の分立とその評価

木崎 康弘

1 はじめに

九州ナイフ形石器文化の第Ⅰ期から第Ⅳ期まで、九州地方に明確な地域性を認めることはできない。ところが、そんな九州地方も細石器文化において地域性の萌芽を見せはじめたのである。

九州細石器文化が2つの地域に分立したのは、泉福寺（福井）型が現れる、縄文時代草創期に入ってからであった（木崎 2002）。その2つの地域を西北地域と南東地域と呼んでいる（木崎 2002）。

ところで、その切っ掛けは、言うまでもなく、泉福寺（福井）型の出現にあった。すなわち、それまでとは明らかに異なる石核工程群（木崎 1982）を背景にした細石核の出現であった。そこにどのような歴史的な意味があったのであろうか。興味深いものがあるが、その前に押さえて置かなければならないことが山積している。

そこで本論では、そのための第1歩として、細石器文化における地域性の分立とその評価を行うこととしたい。

2 土器出現段階の細石器文化

九州細石器文化が2つの地域に分立したのは縄文時代草創期に入ってからであった（木崎 2002）。その2つの地域を西北地域と南東地域と呼んでいるので、その地域の特徴を押さえることとする。

北西地域は、現在の長崎県、佐賀県、福岡県を中心とした範囲で、かつて示した九州ナイフ形石器文化の地域区分（木崎 1988）の中の北九州西部、同東部にあたっている。特に、長崎県と佐賀県では、泉福寺（福井）型細石核が多く出土している。土器を伴出した遺跡としては、泉福寺洞穴遺跡、福井洞穴遺跡、城ヶ岳平子遺跡、茶園遺跡、田崎遺跡がある。

この中で、泉福寺洞穴遺跡、福井洞穴遺跡、城ヶ岳平子遺跡では、泉福寺（福井）型細石核が石核構成の中心となっている。

南東地域は、鹿児島県と宮崎県が中心となり、それに熊本県と大分県の1部を取り込む範囲である。地域区分では、南九州が中心となり、中九州西部も1部入っている。土器を伴出した遺跡としては、政所馬渡遺跡、狸谷遺跡、上場遺跡、加治屋園遺跡、志風頭遺跡、瀧之段遺跡、瀬戸頭遺跡、横井竹ノ山遺跡、帖地遺跡、岩土原遺跡、堂地西遺跡がある。

これらの遺跡は、共通して矢出川型細石核を含み、これに船野型細石核や畦原型細石核、加栗山（加治屋園）型細石核が加わっている。また、量的に少ないが、泉福寺（福井）型細石核若しくはそれに類似した細石核を組成する場合も多い。

なお、南東地域は、加栗山（加治屋園）型細石核が分布する鹿児島県南部、畦原型細石核が分布する宮崎県南部から鹿児島県南部にかけて、単純に矢出川型細石核のみを持つか、船野型細石核を構成の1つに加える程度のその他の地域など、地域色が見られている。

3 土器出現前段階の細石器文化

土器出現段階の細石器文化において北西地域と南東地域という2つの地域性が存在していたことは、これまでに指摘したことであるが、次に比較という意味で土器出現前段階の細石器文化の様子について、同じ地域割で概観してみよう。

北西地域では、泉福寺洞穴遺跡や福井洞穴遺跡、長崎県百花台遺跡、茶園遺跡をみる。

泉福寺洞穴遺跡の第11層では、泉福寺（福井）型（以下「細石核」を略す。）が検出された。土器出現に先行しての泉福寺（福井）型の出現の可能性もあるが、さらに古い土器群と共伴する可能性も高い。福井洞穴遺跡の第4層では、矢出川型と船野型若しくは休場型が検出された。また、7層では、細石核ではないが、小刃器と船野型類似技法の小刃器用石核が出土している。百花台遺跡の第2層では、矢出川型及び泉福寺（福井）型が検出されている。川道寛氏は、この構成を新古2つの石器文化の混在と評価している（川道1997）。茶園遺跡では、矢出川型と泉福寺（福井）型が出土する第IV層よりも下位の第V層から矢出川型が検出された。

南東地域では、熊本県城馬場遺跡と同県白鳥平A遺跡、鹿児島県加栗山遺跡、同県成岡遺跡、同県床並B遺跡、同県西丸尾遺跡、同県星塚遺跡、同県榎崎A遺跡及び同県榎崎B遺跡、宮崎県船野遺跡を取り上げる。

城馬場遺跡、白鳥平A遺跡には、小型の矢出川型がある。小礫そのもの若しくは小礫の分割材を素材にしたものである。加栗山遺跡には、船野型、畦原型、加栗山（加治屋園）型、矢出川型、泉福寺（福井）型類似がある。成岡遺跡では、小型の船野型、休場型、矢出川型、泉福寺（福井）型がある。休場型及び矢出川型の素材は、小礫そのもの若しくは小礫の分割材である。床並B遺跡には、非調整打面の船野型と休場型を中心にして、矢出川型が僅かにある。また、ナイフ形石器が共伴している（堂込1993）。西丸尾遺跡には、船野型類似及び矢出川型がある。その素材は、小礫そのもの若しくは小礫の分割材である。星塚遺跡には、休場型、矢出川型及び畦原型がある。榎崎A遺跡にも、矢出川型と畦原型がある。矢出川型の素材は、小礫そのもの若しくは小礫の分割材である。榎崎B遺跡には、休場型、矢出川型、加栗山（加治屋園）型がある。細石核の素材は、小礫そのもの若しくは小礫の分割材である。船野遺跡第1地点では船野型、畦原型、矢出川型があり、同第2地点では船野型がある。

土器出現前段階の遺跡の中、泉福寺（福井）型を持つものは、泉福寺洞穴遺跡第11層や百花台遺跡、加栗山遺跡、成岡遺跡であるが、これらは、縄文時代草創期関係と考えるべきものであろう。したがって、土器出現前段階の細石器文化を特徴付けるものは、泉福寺（福井）型を持たない遺跡であろう。

これらの遺跡をみると、船野型、休場型、畦原型、加栗山（加治屋園）型、矢出川型がある。矢出川型はほぼ九州地方の全域にわたって広がり、船野型はその中心が南東地域にありつつ、九州地方一円に広がっている。これに対して、畦原型と加栗山（加治屋園）型は、南東地域に限定されている。

このように、この段階は、南東地域に僅かな地域色を示すことがあったとしても、矢出川型や船野型を石核構成の中に加えている点では、南東地域も北西地域も同じ技術基盤に立っている、ということがいえる。このように、九州地方の土器出現前段階の細石器文化は、細石核からみるかぎり、僅かな地域色を持ちながらも、等質な技術基盤にあったのである。

4 九州細石器文化における2つの地域性

土器出現前段階の九州地方では、南九州を中心に畦原型と加栗山（加治屋園）型がありはするが、全体的には矢出川型や船野型を基本とする石核構成が一般的である。このことは、九州地方全域が1つの地域であることを示している。ところが、その後の段階に至って、北西地域と南東地域という2つの地域性が分立するのである（木崎2002）。

北西地域では、それまでの細石核をすべて払拭して、泉福寺（福井）型が成立する。これに対して、南東地域では、この泉福寺（福井）型を僅かに受容しつつも、土器出現以前からの技術的伝統を保持する細石核群をそのまま残すなど、細石核の型式に大きな変化を認めることができないのである。つまり、九州細石器文化の展開には、矢出川型と船野型が基盤となりながらも、北西地域では泉福寺（福井）型が他の細石核に置き換わり、南東地域でその余波が僅かに及ぶというものである。

この2つの地域は、細石核の石核構成における違いで峻別したが、それ以外でも明らかな違いが存在する。

例えば、石鏃の出現時期が明らかに異なっている（表）。

表 九州地方縄文時代草創期の編年

	北西地域		南東地域		南九州西部	
	泉福寺洞穴遺跡	北九州東部	中九州東部	中九州西部	南九州東部	南九州西部
11層段階 (土器?)						
10層段階 (豆粒文土器)						加治屋園 帖 地
8・9層段階 (隆起線文土器)			目久保第1	狸谷Ⅲ	岩土原	瀬戸頭 志風頭 横井竹ノ山 掃除山 奥ノ仁田
5・6層段階 (爪形文土器) (押引文土器)		門田 柏原Ⅱ層	政所馬渡	里 城 白鳥平B 上 場	堂地西 椎屋形1 椎屋形2	瀧ノ段
4層段階 (条痕土器) (刺突・突瘤文土器)		柏原Ⅱ層	二日市			(貝殻文円筒形土器群)

細刃器
 石 鏃

西北地域では、泉福寺洞穴遺跡の発掘事実からは押引文土器の段階には石鏃が認められず、それとほぼ同時期の柏原遺跡では、細石器が無く、それにかわって石鏃が存在しているのである(木崎2002)。

一方、南東地域では、石鏃がさらに古い段階まで遡っている。例えば、鹿児島県掃除山遺跡では、隆起線に刻み目(太めと細めの刻み目)のある隆起線文土器と幅の広い隆帯部への細かい刺突文のある土器とともに、平基若しくは弱い凹基の二等辺三角形を呈する石鏃が出土している。また、梶ノ原遺跡では、隆起線に刻み目のある隆起線文土器とともに、弱い凹基の二等辺三角形を呈する石鏃が出土している。さらに、鹿児島県奥ノ仁田遺跡では、貝殻腹縁押捺のある隆起線文土器、隆起線に刻み目のある隆起線文土器とともに、平基若しくは凹基の二等辺三角形を呈する石鏃、平基の二等辺三角形を呈する磨製石鏃が出土している。

要するに、北西地域では、爪形文土器や押引文土器の次にくる、条痕土器や突瘤文土器の段階に至って、細石器に置き換わるようにして石鏃が出現し、またその東部でも押引文土器段階に石鏃を受容している(木崎2002)。これに対して、南東地域では、豆粒文土器段階若しくはそれ以前に石鏃を受容し、隆起線文土器の終わりの段階以降に石鏃に完全に移行しているのである(木崎2002)。

5 地域とその評価、そして集団へ

(1) 地域性の歴史的評価

九州ナイフ形石器文化第Ⅳ期の九州地方には明確な地域性を認めることができないが、この傾向は九州細石器文化の当初においても同じであった。矢出川型や船野型を石核構成の中に加えている点で、等質な技術基盤にあったのである。こうした傾向から一転、泉福寺(福井)型が登場するや、九州地方の北西地域では矢出川型や船野型を払拭する一方、南東地域では泉福寺(福井)型が1部に及んだといっても、依然として船野型や矢出川型などが残る、という2つの地域性が成立したのである(木崎2002)。そのことは、石鏃の受容でも明らかで、ここで触れ得なかった土器群の特徴でも同様であった。

では、その地域性にはどのような評価が下せるのだろうか。そこでまず、地域性の成立から細石器文化の消滅までの経過をもう一度整理しておこう。

北西地域は、泉福寺（福井）型が現れると、それまでの技術基盤を保持する南東地域と異なる歩みを遂げることとなった。豆粒文土器の前段階から泉福寺（福井）型が出現した北西地域では、その後、豆粒文土器や隆起線文土器の各段階を越えて、さらに、爪形文土器や押引文土器の段階にまで、細石器文化が継続した。そして、次の条痕土器や突瘤文土器の段階（一部の地域では押引文土器の段階に）に至り、初めて消滅し、それと置き換わるようにして石鏃が出現した。つまり、縄文時代草創期の終末期まで細石器文化が継続していたのである。

一方、西北地域に泉福寺（福井）型が現れた頃、南東地域では、引き続き、矢出川型や船野型などが残りながら、新たに石鏃を受容したのである。そして、隆起線文土器のある段階以降になると、細石器は完全に姿を消して石鏃に移行してしまったのである。

この対照的な北西地域と南東地域の2つの地域性は、石鏃の受容と細石器の消滅という2つのキーワードで、その歴史的意義が評価できるだろう。それを、現象面で表現すると、次の3つに整理できる。

1つは、西北地域で泉福寺（福井）型が現れる一方で、南東地域で石鏃が現れる、という現象である。2つは、西北地域で押引文土器の段階まで細石器文化が継続する一方で、南東地域で隆起線文土器の終わりの段階まで細石器文化が消滅する、という現象である。3つは、西北地域で押引文土器前後の段階で石鏃を受容する一方で、南東地域で土器出現前段階で石鏃を受容する、という現象である。そしてこれが地域性の歴史的評価を現象するものである。

（2）地域と集団

① 九州ナイフ形石器文化における定住化過程に見る地域と集団

地域性の評価を行った後、次にはそれを担った人々の問題が取り上げられなければならないだろう。その場合、九州ナイフ形石器文化から縄文時代までの定住化の流れを踏まえた評価が必要になる。そこでまずその流れを概観しておこう。

九州ナイフ形石器文化の集団と領域については、すでにその過程を想定したところである（木崎 2002, 2003）。それは、次のようなものである。

九州ナイフ形石器文化の九州第Ⅰ期では、基本的で単位的な集団が活動領域の特定化をおこなわず、根拠地の明確な設定をおこなわなかった時期であった。中九州から北九州を取り込んだ、極めて広い範囲に活動領域があり、そこには、周回移動をおこなう基本的で単位的な集団が複数存在していたものと考えられる。ただし、それらの集団が組織的に集合する機会は、極めて少なかったものと考えられる。こうした状況に変化が現われたのが、九州第Ⅱ期である。この時期は、気候の寒冷化に伴い、大規模な狩猟活動が行われるようになった時期であり、その結果、大単位の集団を組織化するようになったのであろう。

気候の寒冷化が極に達した九州石槍文化（九州第Ⅲ期）に至ると、各種の狩猟活動がさらに活発化した。基本的で単位的な集団が活動領域の特定化と根拠地の設定をおこない始めた時期で、活動領域及び根拠地周辺への弱い定住化がおこったものと想定できる。しかも、そうした基本的で単位的な集団が複数集まったの大単位の集団を組織化して、大規模な狩猟活動を行っていたことが想定できる遺跡も目立つようになる。ここに、社会構造上、基本的で単位的な集団と共に、大単位の集団が確立したのであろう。

こうした九州ナイフ形石器文化の展開は、集団が特定の領域や土地に定住する縄文時代文化への段階的な移行過程という歴史的な流れの方向として理解できる。特に、活動領域の特定化と根拠地への弱い定住化を見せる九州石槍文化（九州第Ⅲ期）は、定住社会である縄文時代文化の起点として歴史的に評価できる。

② 九州細石器文化の地域と集団

では、こうした縄文時代文化に向けた、九州石槍文化（九州第Ⅲ期）に始まる定住化の過程の中で、細石器文化は、どのような位置にあり、どのように意義付けられるのだろうか。

実は、この命題を考えるうえで、九州細石器文化の地域性の分立が重要な意味を持つものであろうことは、十分に予想されることであろう。そこで、この点に限って、今後の見通しを含めた検討をおこなうこととしたい。

九州細石器文化の展開は、地域性があまり明確でない土器出現前段階から、2つの地域性に分立する土器出現

後段階へ、というものであった。この2つの地域性の分立こそが、九州石槍文化（九州第Ⅲ期）を基点に始まる定住化の過程の1つとして重要な意味を持つものと評価できる。

ところで、土器出現後段階において分立した北西地域と南東地域は、泉福寺（福井）型が現れることを契機に成立した地域性であった。その意味では、泉福寺（福井）型を取り込んで、それまでの細石核を払拭した北西地域と、泉福寺（福井）型を取り込まずにそれまでの細石核を保持し続けた南東地域、という対時の関係を2つの地域性には認めることができる。そこには、南東地域における一足早い石鏃の出現や細石器文化継続の時期差、石鏃受容の時期差も多分に関係しているはずである。しかも、石材利用の傾向もその対時関係を裏付けるものとなっている。

九州ナイフ形石器文化での石材利用については、概略次のような傾向が指摘できる。

九州第Ⅰ期では、曲野石器文化が示すように、遠く100 kmという範囲を周回移動する集団の存在（安森1990）を認めることができる（木崎2003）。その領域の範囲は、腰岳産や阿蘇産、小国産若しくは日東産の黒曜石を一つの石器文化に持ち込んでいることにより、北九州から中九州にかけてで、黒曜石の原産地が複数箇所存在していることは、原石採取地を1カ所に固定していたわけではなく、数カ所の中から選択していたことを示してもいる。おそらく、原石採取地の選択に伴って、周回移動の軌道も変更していたことが想像できるのである。そして、この傾向は、やや領域を狭める傾向にあるが、九州第Ⅱ期においても踏襲される傾向にあった。

こうした傾向に変化を生じるようになったのが、九州石槍文化（九州第Ⅲ期）であった（木崎2003）。石材の利用がより在地産石材に重点を置き始めたのである。こうした九州ナイフ形石器文化の石材利用の時期的傾向は、先に指摘した、定住社会として評価される縄文時代文化への段階的な移行過程を窺わせるものである。また、定住社会である縄文時代文化の起点として評価できる九州石槍文化（九州第Ⅲ期）の活動領域の特定化と根拠地への弱い定住化をさらに裏付けるものである。

では、九州細石器文化における石材利用の傾向を概略見てみることにしよう。特に、地域性が顕著になった土器出現後段階の南東地域を中心に、主に産地同定データがそろっている黒曜石の傾向を捉えることにしよう。

泉福寺8層類型（織笠）の細石核が出土し、泉福寺（福井）型の南西地域への波及段階を明確に示すと評価した（木崎2002）鹿児島県瀬戸頭遺跡では、3点の細石核がある。その中、泉福寺8層類型の細石核はチャート製、泉福寺（福井）型類似の細石核は硬質砂岩製であった。また、他の1点は上牛鼻産黒曜石製であった。

泉福寺（福井）型に類似する細石核が出土した鹿児島県志風頭遺跡では、細石核及び細石核原形90点の産地同定が行われた（藁科1999）。その結果は、上牛鼻産黒曜石が79点（88%）、竜ヶ水（三船）産黒曜石5点（6%）、桑ノ木津留産黒曜石3点（3%）、長谷産黒曜石1点、不明2点という内訳で、ほとんどが南東地域に産する黒曜石利用という傾向であった。

泉福寺（福井）型に類似する細石核が出土した鹿児島県横井竹ノ山遺跡では、肉眼観察での産地の推定が行われている。それによると、そのほとんどが竜ヶ水（三船）産黒曜石と上牛鼻産黒曜石であり、僅かに西北九州産黒曜石も含まれている、という。

鹿児島県帖地遺跡では、960点の産地同定が行われた（高橋2000）。その結果、三船（竜ヶ水）産黒曜石が83%、上牛鼻産黒曜石10%と在地産黒曜石が9割強を占めていることが分かった。また、腰岳、針尾島、淀姫などの西北九州産黒曜石も6%存在することが分かった。

南東地域の石材利用の傾向を概観すれば、在地産黒曜石の利用が主体であって、それに僅かな西北九州産黒曜石が含まれる、ということが分かるだろう。しかも、土器出現後段階の南東地域には泉福寺8層類型の細石核や泉福寺（福井）型に類似する細石核が見られるが、例えば、瀬戸頭遺跡の泉福寺8層類型の細石核は在地で採取できるチャート製であったり、志風頭遺跡の泉福寺（福井）型に類似する細石核も上牛鼻産黒曜石であったり、と北西地域に係わるものも在地産石材が利用されているところも見逃せない。そして、在地産石材に大きく依存する傾向は、北西地域でも同じであったと考えられる。このように、土器出現後段階の南東地域と北西地域とは、それほど顕著に係わっていたわけではなかった、ということが窺われるのである。

このように、九州石槍文化（九州第Ⅲ期）から始まる定住化過程であるが、土器出現後段階に至り、南東地域と北西地域の分立によって活動領域の特定化と根拠地への弱い定住化がしだいに鮮明になった、と評価できるのである。九州細石器文化に起きた地域の形成は、続く縄文時代前期以降の定住社会に向けた重要な第1歩という意味で、歴史的な意義が高いと評価されるだろう。

本稿では、九州細石器文化における地域性の形成を踏まえ、地域と集団について、私見を述べた。この問題は、石材利用や集落形成、遺跡群形成についてさらに踏み込んだ検討をおこなわなければ解決できるものではない。その意味で、本稿は、その第1歩ということになるものとする。

再度、稿を改めて検討することとしたい。

最後に起稿の切っ掛けをいただいた、堤隆氏に感謝して、本稿を閉じることとする。

引用参考文献

- 佐佐保市教育委員会 1985 『泉福寺洞穴の発掘記録』
麻生 優・白石浩之 1976 「百花台遺跡」『日本の旧石器文化 第3巻 西日本の遺跡』
安森政雄 1979 「日本の細石器」『駿台史学』第47号
安森政雄 1984 「日本の細石器文化」『駿台史学』第69号
安森政雄 1986 「先石器時代の石器と地域」『岩波講座 日本考古学5 文化と地域性』
伊集院町教育委員会 1999 『瀬戸頭遺跡』
岐宿町教育委員会 1998 『茶園遺跡』
市来町教育委員会 1999 『籠之段遺跡他』
入来町教育委員会 1993 『床並B遺跡』
鹿児島県教育委員会 1981 『加栗山遺跡』
鹿児島県教育委員会 1981 『加治屋園遺跡』
鹿児島県教育委員会 1992 『榎崎A遺跡』
鹿児島県教育委員会 1983 『成岡遺跡』
鹿児島県教育委員会 1985 『成岡遺跡Ⅱ』
鹿児島県教育委員会 1992 『西丸尾遺跡』
鹿児島県教育委員会 1995 『奥ノ仁田遺跡』
鹿児島県立埋蔵文化財センター 1993 『星塚遺跡』
鹿児島県立埋蔵文化財センター 1993 『榎崎B遺跡』
鹿児島市教育委員会 1992 『掃除山遺跡』
鹿児島市教育委員会 1990 『横井竹ノ山遺跡』
加世田市教育委員会 1998 『椿ノ原遺跡』
加世田市教育委員会 1999 『志風頭遺跡・奥名野遺跡』
喜入町教育委員会 2000 『帖地遺跡（旧石器編）』
熊本県教育委員会 1982 『里の城遺跡・若宮城跡・瀬戸口横穴群調査報告書』
熊本県教育委員会 1986 『狸谷遺跡』
熊本県教育委員会 1993 『白鳥平A遺跡』
熊本県教育委員会 1994 『白鳥平B遺跡』
小畑弘己 1983 「九州の細石器文化」『物質文化』第41号
織笠 昭 1990 「西海技法研究序説」『東海大学文学部紀要』53
織笠 昭 1991 「西海技法の研究」『東海大学文学部紀要』54
鎌木義昌・芹沢長介 1967 「長崎県福井岩陰」『考古学集刊』第3巻第1号
川道 寛 1997 「長崎県の細石器編年」『九州の細石器文化—細石器文化の開始と編年研究—』九州旧石器文化研究会
木崎康弘 1981 「九州地方の細石器」『熊本史学』第55・56号
木崎康弘 1983 「東日本細石器技術展開についての一理解」『旧石器考古学』第26号

- 木崎康弘 1988 「九州ナイフ形石器文化の研究—その編年と展開—」『旧石器考古学』37
- 木崎康弘 2002 「九州細石器文化考—泉福寺洞穴遺跡の位置付けをめぐる—」『泉福寺洞穴研究編』泉福寺洞穴研究編刊行会
- 木崎康弘 2003 「ナイフ形石器文化集団研究序論—石器文化の類型とその評価—」『旧石器人たちの活動をさぐる—日本と韓国の旧石器研究から—』
- 木下 修 1976 「門田遺跡」『日本の旧石器文化 第3巻 遺跡と遺物(下)』
- 九州旧石器文化研究会 1997 『九州の細石器文化—細石器文化の開始と編年研究—』
- 九州旧石器文化研究会 2000 『九州の細石器文化Ⅲ—九州における更新世末期の環境と人類の適応 縄文文への鼓動—』
- 下川達彌・立平 進 1982 「宇久島・城ヶ岳平子遺跡の調査」『長崎県立美術博物館年報』
- 鈴木重治 1973 「宮崎県岩土原遺跡の調査—土器伴出細石器文化の一例」『石器時代』第10号
- 高橋 豊 2000 「蛍光X線分析による鹿児島県喜入町帖地遺跡出土黒曜石の産地分析」『帖地遺跡(旧石器編)』喜入町教育委員会
- 橘 昌信 1975 「宮崎県船野遺跡における細石器文化」『考古学論叢』第3号
- 福岡市教育委員会 1883 『柏原遺跡群Ⅰ』
- 別府大学付属博物館 1982 『政所馬渡』
- 宮崎県教育委員会 1985 『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』
- 宮田栄二 1988 「南九州の細石器文化—福井型細石刃核の波及について」『鹿児島考古』第22号
- 宮田栄二 1996 「南九州における細石刃文化終末期の様相」『坂詰秀一先生還暦記念論文集 考古学の諸相』
- 藁科哲男 1999 「志風頭遺跡出土の黒曜石製遺物の原産地分析」『志風頭遺跡・奥名野遺跡』加世田市教育委員会

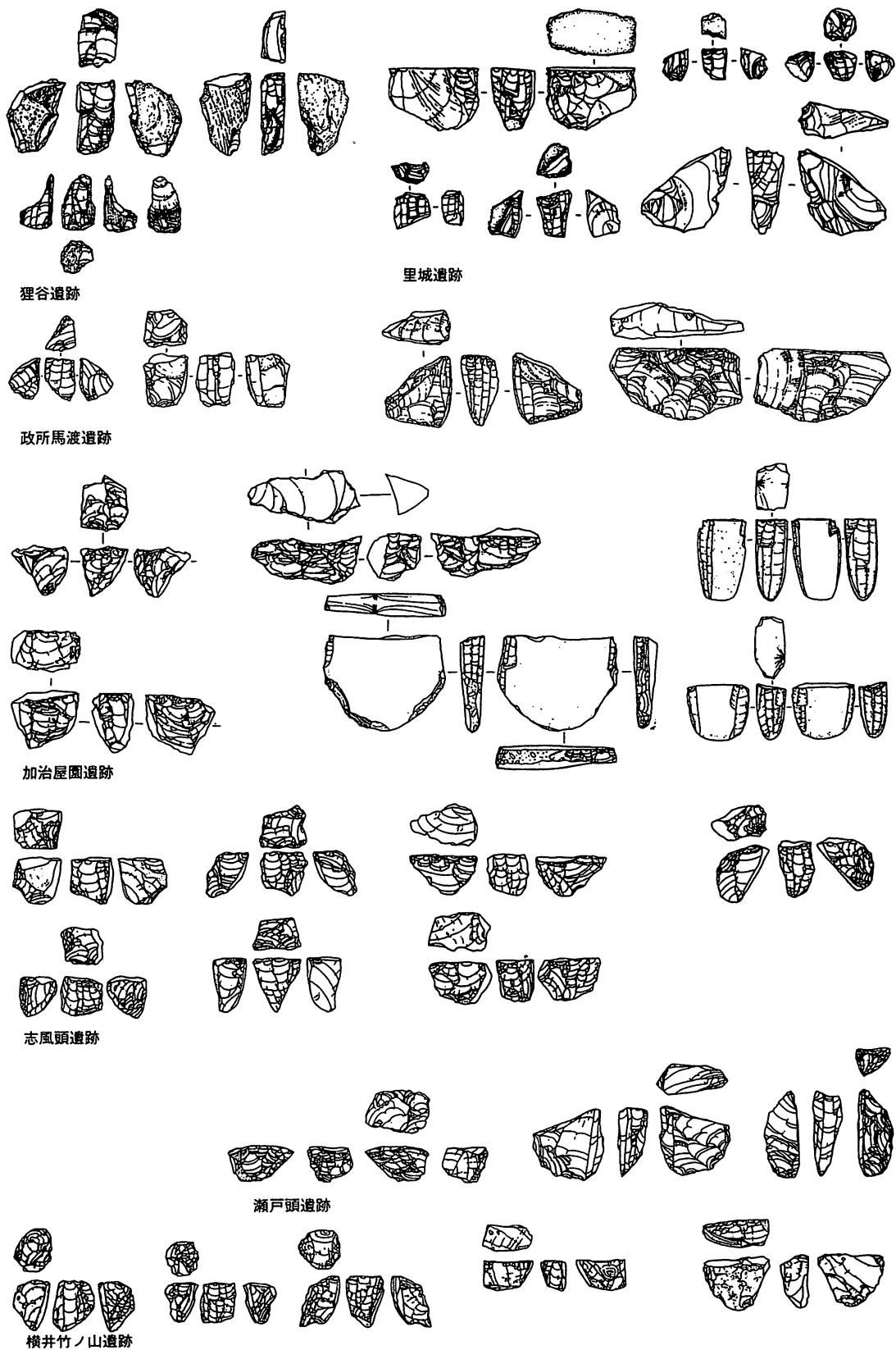
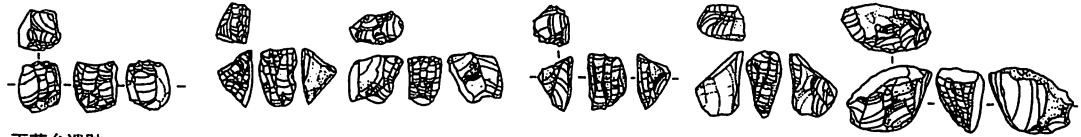


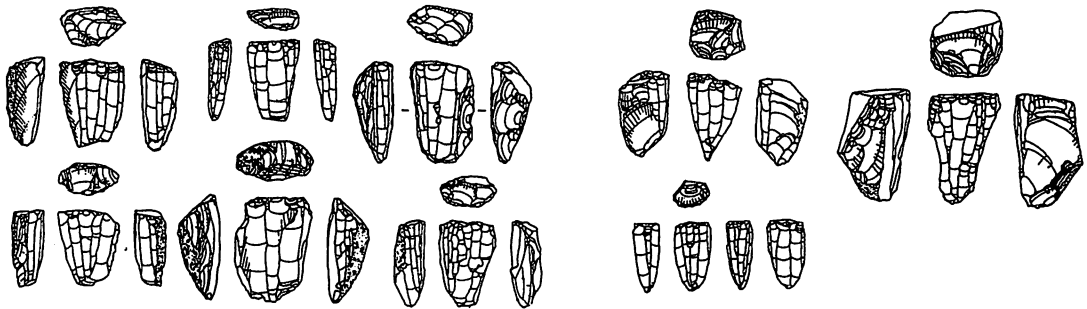
図1 南東地域土器出現後段階の細石核（木崎 2002 より）



福井洞穴遺跡



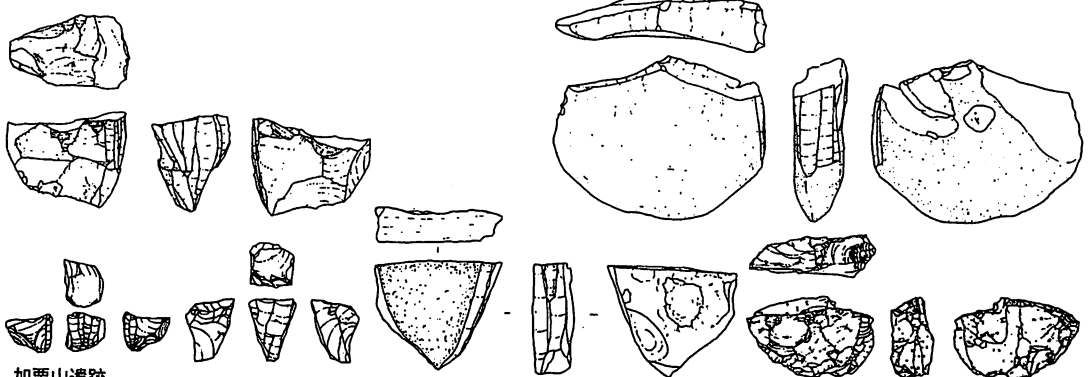
百花台遺跡



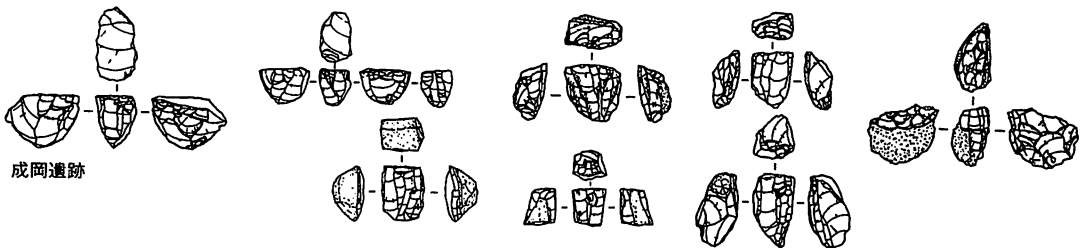
茶園遺跡



白鳥平A遺跡



加栗山遺跡



成岡遺跡

図2 土器出現前段階の細石核(1) (木崎 2002 より)

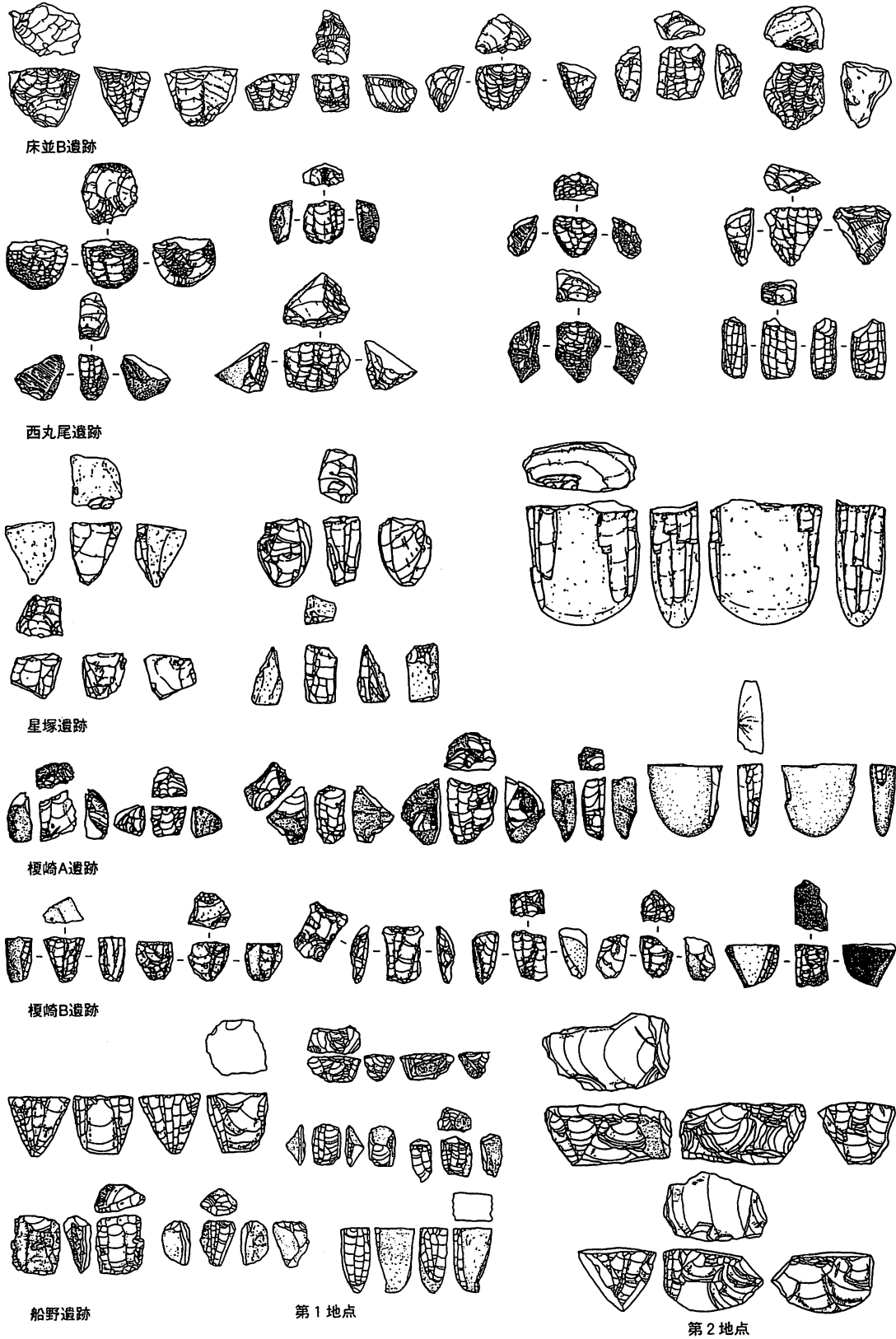
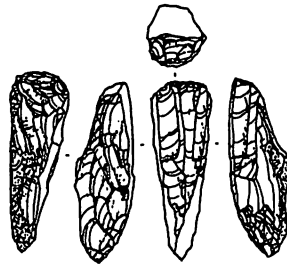


図3 土器出現後段階の細石核(2)(木崎 2002 より)



泉福寺洞穴遺跡

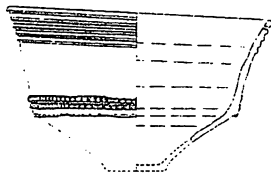
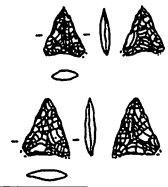


(泉福寺 8層類型)

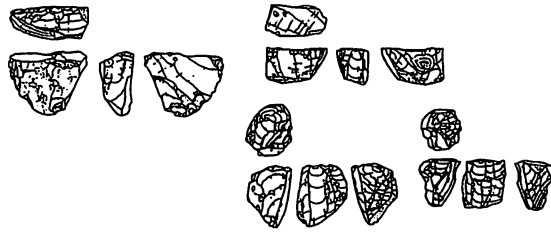
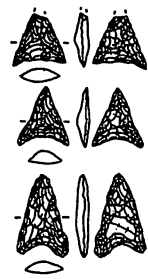
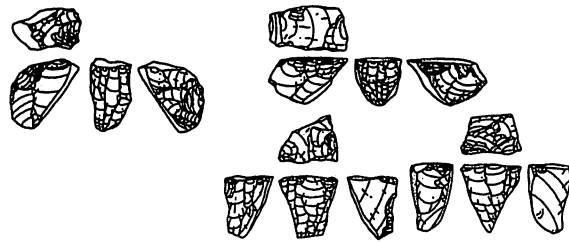


瀬戸頭遺跡

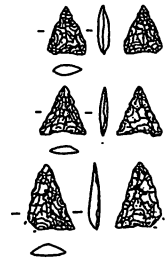
(泉福寺 8層類型)



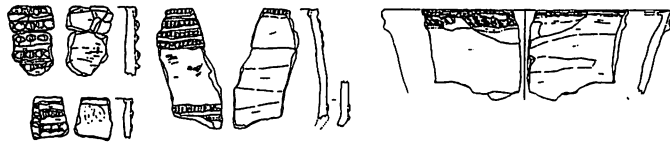
志風頭遺跡



横井竹ノ山遺跡



掃除山遺跡



梶ノ原遺跡



奥ノ仁田遺跡

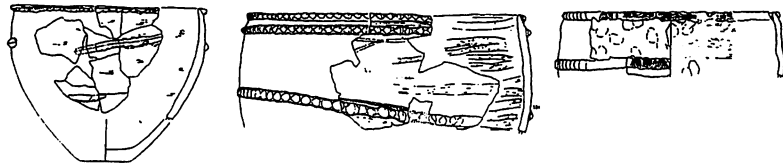


図4 細石核と石鏃 (木崎 2002 より)

日本列島の細石刃遺跡と細石刃資料

堤 隆

1953年、長野県矢出川遺跡において、最初に細石刃遺跡が発見されて以来、50年となる2003年において、日本列島には総計1,792ヶ所に及ぶ細石刃遺跡が把握されている。その分布は、北は北海道北端宗谷丘陵の豊別A遺跡から、南は九州の離島種子島の銭亀遺跡まで、沖縄を除く日本列島全域におよぶ。地域別の内訳では、北海道233遺跡、四国を含む本州島833遺跡、九州島726遺跡から構成される。

細石刃遺跡は、列島内においていくつかの密集地域を形成する。とくに北海道東部、本州中央部、九州北部、九州南部の4地域に集中が著しく、一定の人口をもち社会経済的な領域を形成していたものと考えられる。一方、東北地方の太平洋側、北陸・山陰地方および近畿地方、四国地方太平洋側などは、存在する遺跡自体が少なくその規模も貧弱で、人口希薄地帯と考えられる。おそらく黒曜石など良好な石材資源やその他の有効環境に恵まれないことから、主要な生活領域からはずされたものと想定できる。

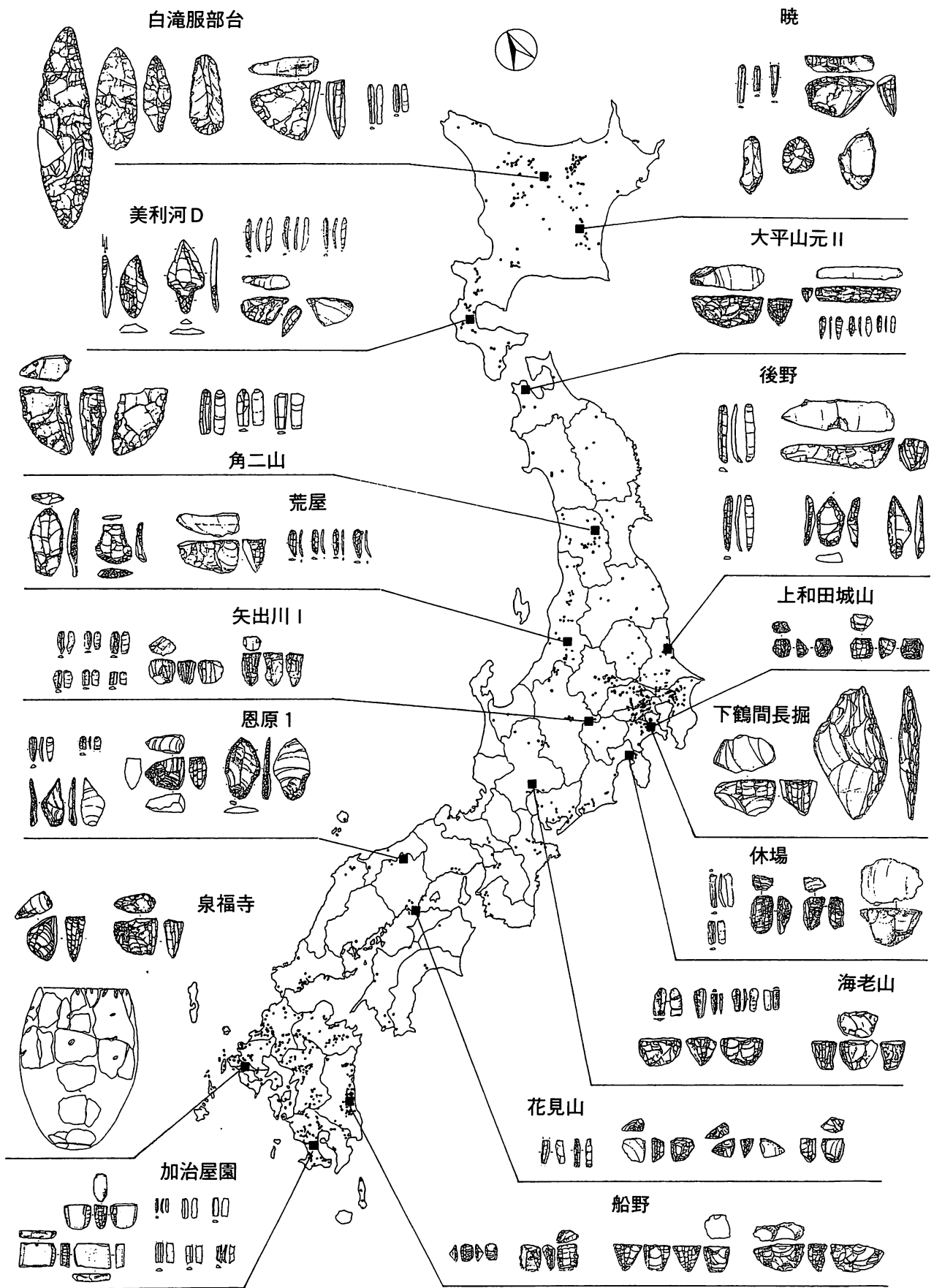
1792遺跡のうち石器出土点数が判明している遺跡の石器出土点数を集計すると、現時点で日本列島における出土総数は、細石刃83137点、細石刃石核8225点である。このうち、出土点数の明確な357遺跡を検討すると、細石刃の出土が10点未満のものは172(48%)、100点未満とした場合282(79%)、200点未満とした場合309(87%)遺跡からなる。つまり、細石刃石器群期の遺跡の約半数は、細石刃の出土数が10点未満であり、約8割が出土数100点未満の石器群であるということになる。おそらく、細石刃の出土総数が100点未満となる約8割の遺跡は、日常の生計活動を示す小規模なキャンプサイトやトランジットスポットなどと考えられる。他方、それ以上の出土点数をもつ2割の遺跡は、ベースキャンプやキャッシュなど異なる性格が考慮できる。

一方、細石刃石核について、出土点数の明確な国内の622遺跡をみると、およそ9割にあたる537遺跡(86%)は細石刃石核の出土が9個以下で、10個以上が55遺跡(9%)、30個以上が13遺跡(2%)、50個以上が10遺跡(2%)、100個以上が7遺跡(1%)である。大多数の遺跡では、細石刃石核の出土点数は10点に満たない。

表1 日本列島の細石刃遺跡と細石刃・細石刃石核数

地域	細石刃遺跡数	細石刃数	細石刃石核数
北海道東部	168	20902	778
北海道西部	65	6983	373
東北北部	16	204	23
東北南部	45	1368	48
中部北部	50	2779	149
中部南部	44	6271	840
北関東	68	1307	123
南関東	380	10260	910
東海東部	58	3716	357
近畿・東海西部	78	388	239
中国	49	1043	123
四国・瀬戸内	45	1561	604
九州北部	384	18144	1112
九州南部	342	8211	2546
合計	1792	83137	8225

※ 石器数は、出土点数の明確な遺跡のみの集計による



第1図 日本列島における細石刃石器群



八ヶ岳旧石器研究グループのシンボルマーク

旧石器時代の食料といわれるハシバミの葉をデザインしており、その下縁は八ヶ岳の稜線を描いている。ハシバミは現在でもたくさん野辺山に自生する。

シンポジウム 日本の細石刃文化 III

— 細石刃文化研究の諸問題 —

発行者：八ヶ岳旧石器研究グループ

発行日：2004年12月18日

編集者：堤 隆

印刷所：ほおずき書籍株式会社

連絡先：〒385-0022 長野県佐久市岩村田1292-4

堤 隆方 八ヶ岳旧石器研究グループ

Eメール tsutsumi@avis.ne.jp

